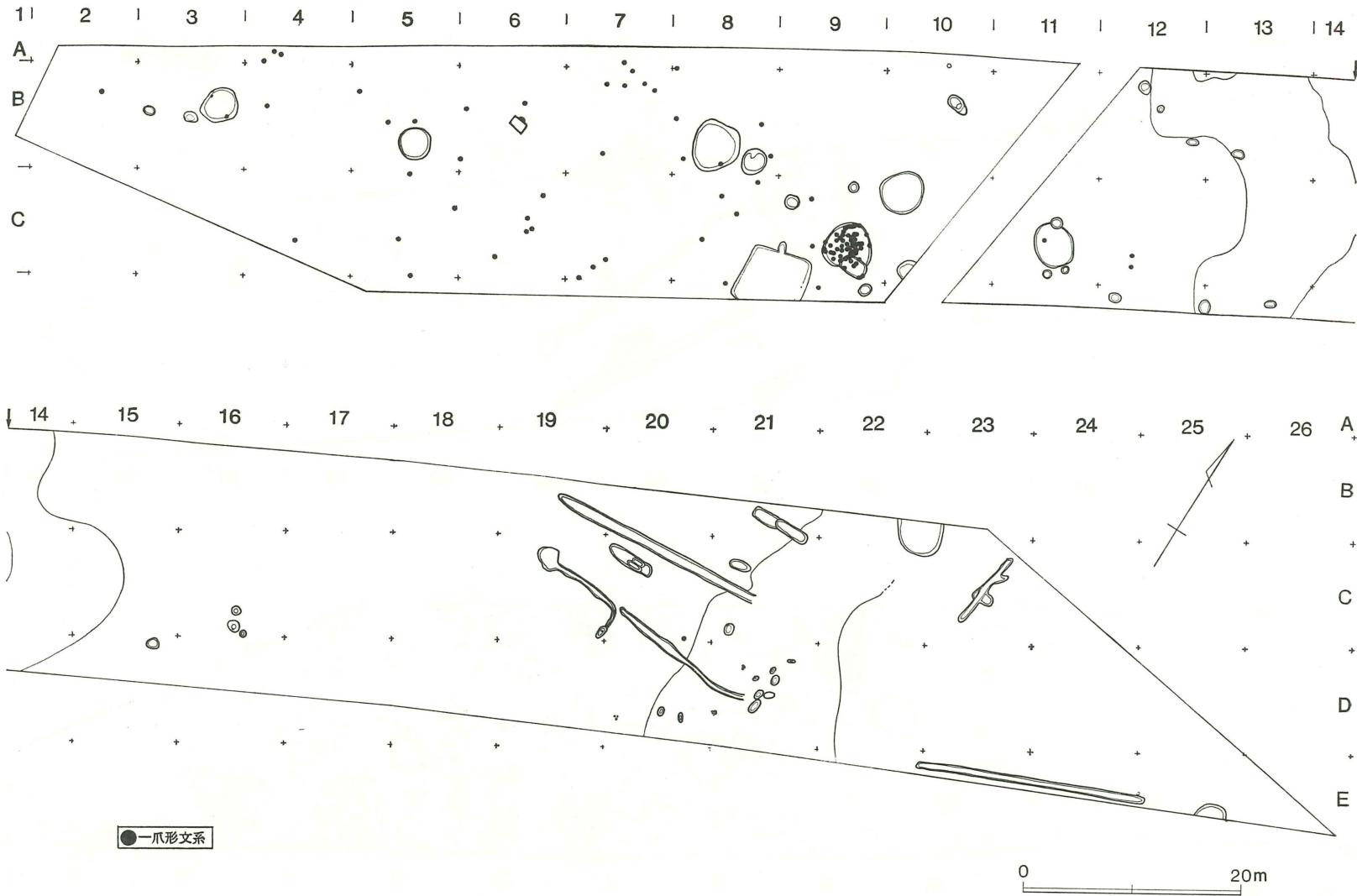
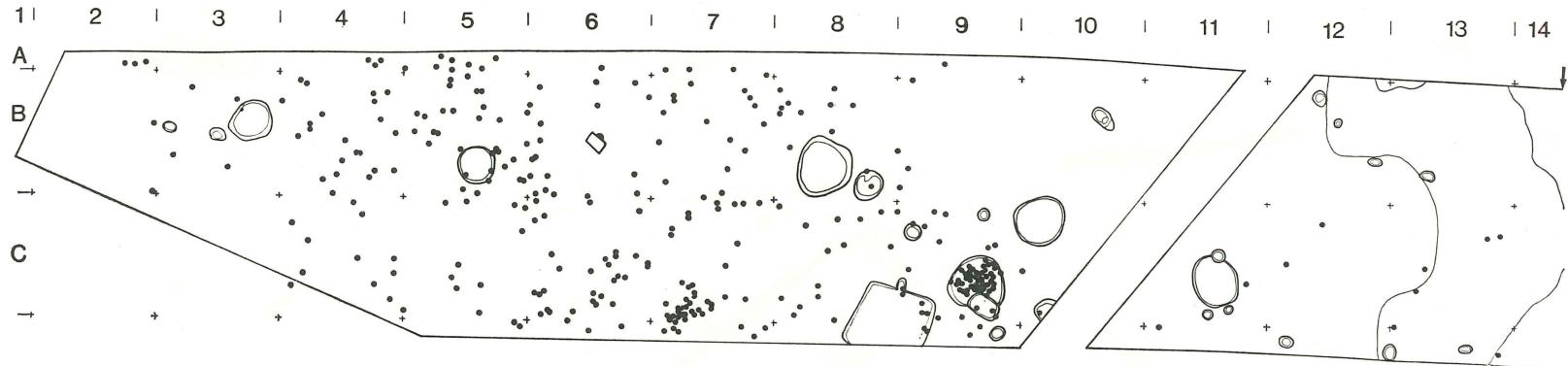


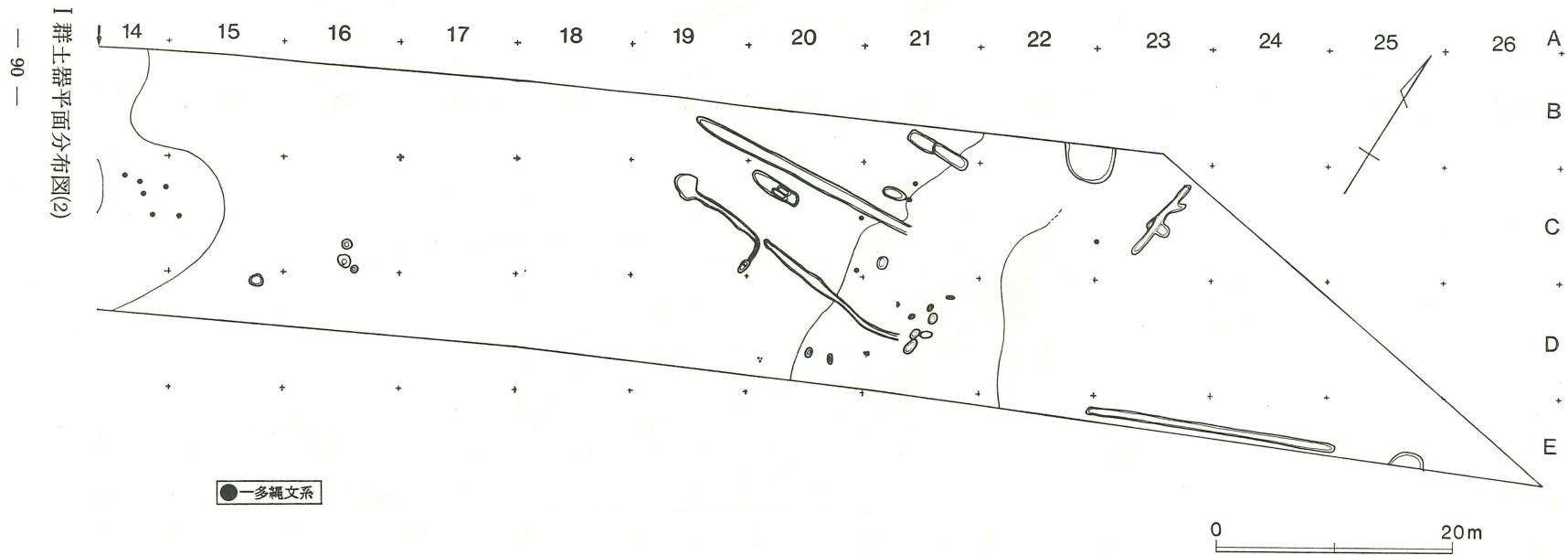
第70図 I群土器平面分布図(1)

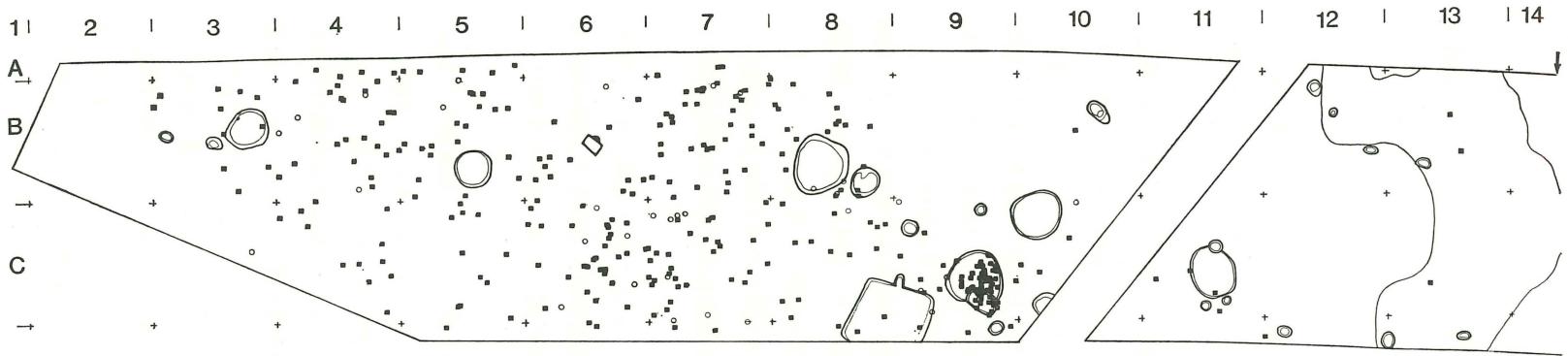
- 89 -



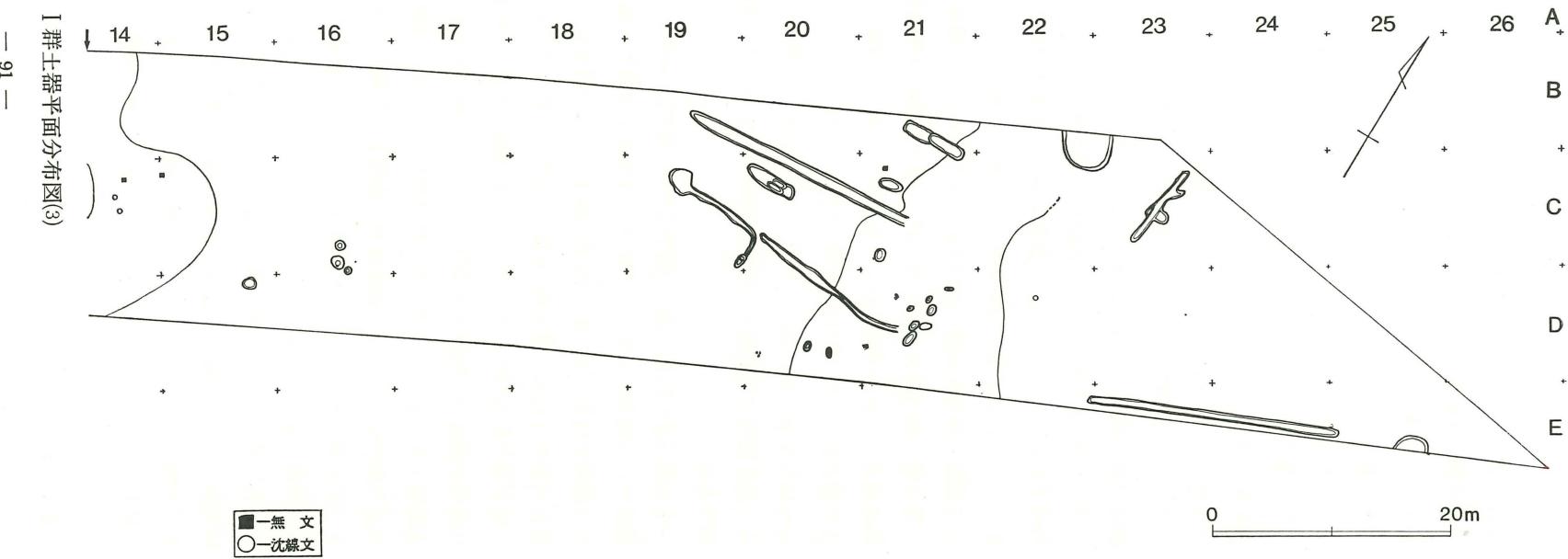


第71図





第72図



4はLR, 5はLが用いられる。

* 第6類（第69図6～32） 無文のものである。なお、ここには上記の土器群に胎土の面で近似するものの一部を示しておいた。

第Ⅱ群土器

第1類（第73～76図、第97図1） 摽糸文系土器群を一括する。

第1種（第73図1・3） 口縁部文様帶、頸部文様帶、胴部文様帶から成るもので、撈糸文系土器群第I様式である。1・3は口唇部内外端にRLが横位に施文され、1の頸部はRLの条が横走する様に、3の頸部はRLが縦位に施文される。井草I式に比定される。

第2種（第73図2・4～7・9～13） 口縁部文様帶と胴部文様帶から成るもので、口縁部文様帶は口唇上面及び外端に施文されるものを一括する。第II様式である。口唇部は丸くめくれるもの（4）、肥厚するもの（5）、角頭状を呈するものに分かれ、口縁は外反するもの（7・9・12）と外折するもの（10・13）とが存在する。4～7・9はY型でR、11はJ Y型で口縁部がRL、胴部がL、12・13はJ型で12はLR、13はRLが施文される。いずれも口唇直下は無文となり、5・13には口縁を外折する際に付けられたと思われる爪の整形痕が残る。井草II式に比定される。

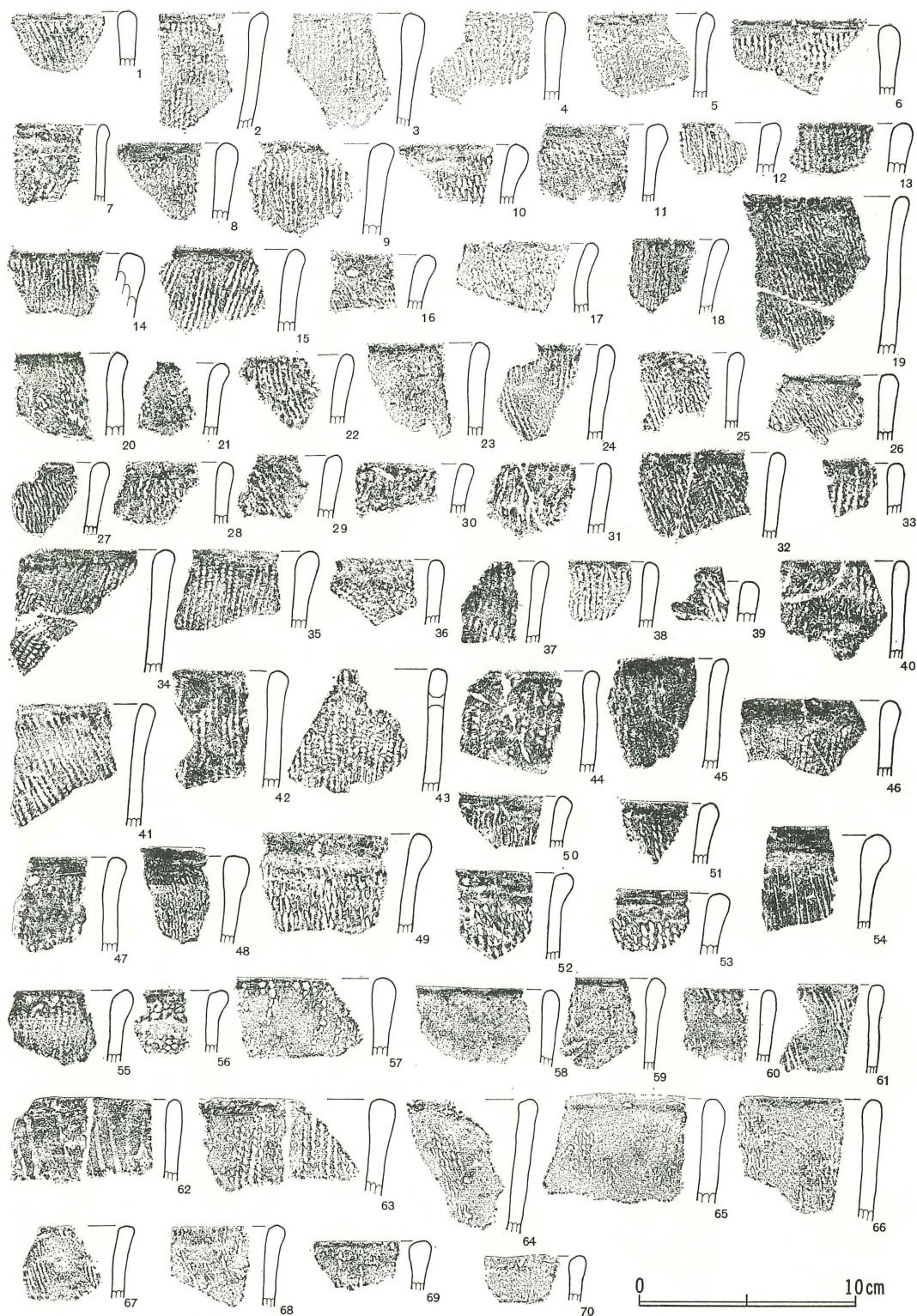
第3種（第73図8・14～24・47） 第2種同様口縁部文様帶と胴部文様帶から成るもので、口縁部の施文が口唇の外端に限られるものである。口唇部形態は第2種とほぼ同形態を示すが、第73図4の類はない。14・21は第2種に近いが、16・20・24・47は口縁部文様帶が形骸化している。8・17～19はY型でR、14はJ Y型で口縁部がRL、胴部がR、15・16・20～24はJ型でRLが施される。第II様式と第III様式の中間的様相を示すもので、井草II式から夏島式にかけての過渡期的な土器である。

第4種（第73図25・26） 頸部文様帶と胴部文様帶から成るものである。25は丸味を帯びて若干肥厚する口縁部が外反し、口唇下に単節RLを縦位に施文し、頸部文様帶を形成する。26は角頭状の口縁部を外反させ、折り曲げる部分に太目の原体RLの側面圧痕を施す。25・26ともJ型でありRLが施文される。第3種と同様な段階に位置付けられよう。

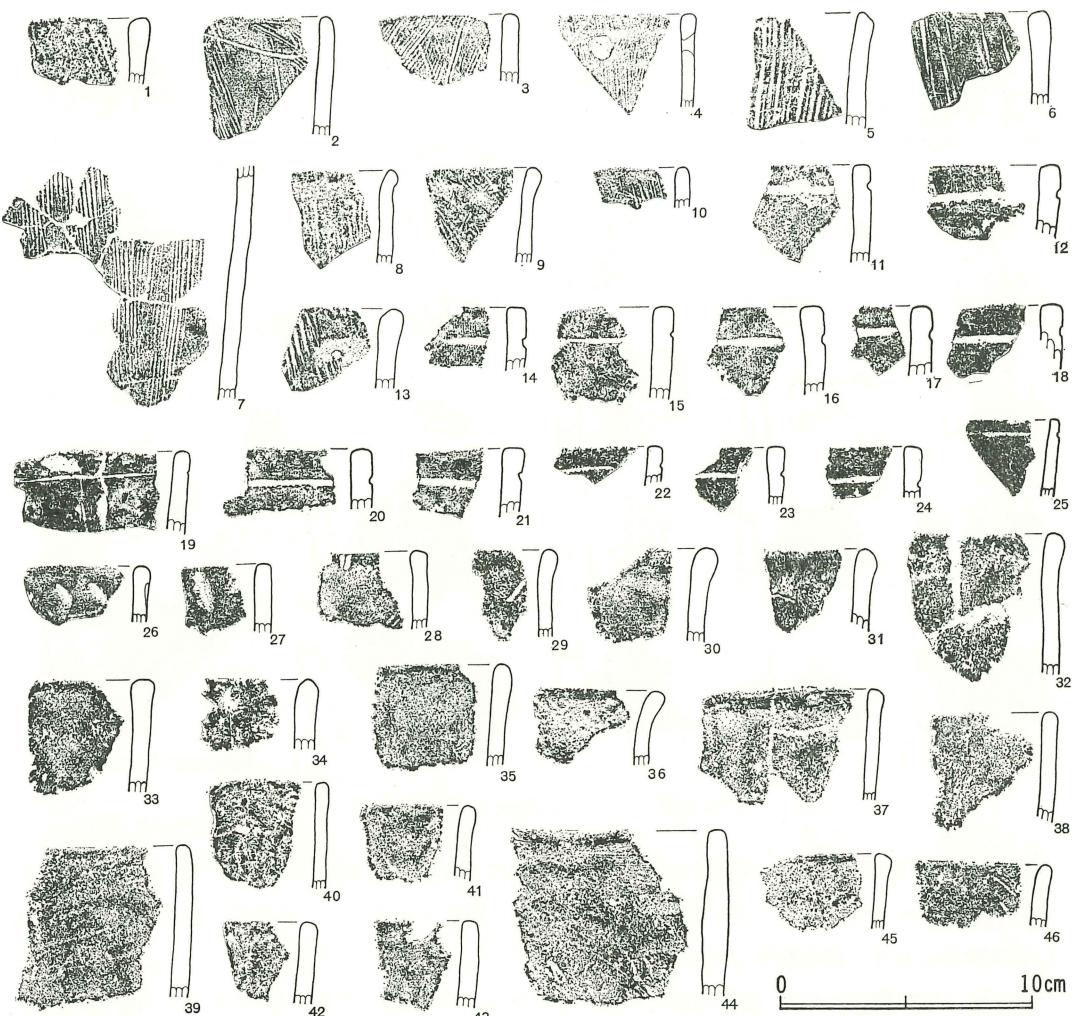
第5種（第73図27～46・48～74、第74図1～46） 胴部文様帶から成るもので、第III様式である。口縁部の形態は、肥厚せず角頭状を呈する口縁部が外折するもの、丸頭状を呈するもの、肥厚して丸頭状を呈するもの、口唇の内側が肥厚するもの、口唇の外側が肥厚するものとに大別できる。口縁部を外折するものは、外折部分に胴部施文原体を一度押捺して、それから回転する手法がみられる（27～31・36）。これはY型が殆どであり、口唇直下は若干の無文帶が形成される。また、同様の口縁部でも、外折部に凹帶を設け、口唇直下から施文するものも存在する（32～35）。32はJ型で、他はY型である。38～44は角頭状を呈し、Y型でRが施文される。48～61は口唇部が概ね丸頭状を呈し、49が無節Rを施文する他、全てY型でRが施文される。45・46・62～74は口唇部が肥厚して丸頭状を呈するもので、45・46・74がY型で、45・46がR、74がLである。62～73はJ型で全てRLである。第74図2・34・35は口唇の内側に肥厚するもので、2はY型L、34・35はJ型RLである。7・10・11は口唇の外側に肥厚するもので、7はJ型LR、10・11はY型でRである。他は概ね丸頭状を呈するもので、1・3～6・13はJ型RL、8はY型L、9・12・14～29・31・32



第73図 グリッド出土土器(13) II群



第74図 グリッド出土土器(14) II群

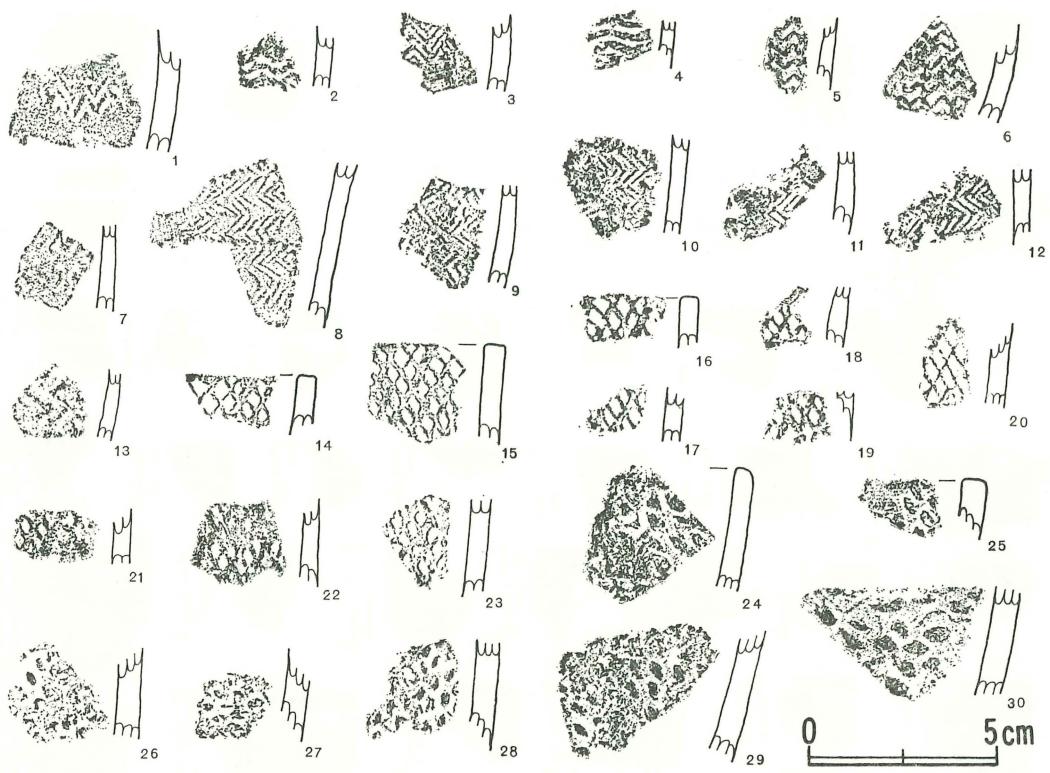


第75図 グリッド出土土器(5) II群

はY型R, 30はJ型無節Rである。33・36~40・43・46はJ型LR, 41・42・44・45はJ型RLである。概ね夏島式に比定される。

第6種（第74図47~70） 第5種とは厳密に区分できないが、原体が太くなったり、施文の間隔が広くなる傾向にあるものである。口縁部は外側に肥厚して丸味を帯びるものが大部分であり、丸頭状のものも存在する。口唇の肥厚部下を若干くぼませるものが多い。47・55~58はJ型で粗いRしが施文される。49・52・53はY型で太目のR、他は原体は太めではないが、条間がやや開くRが施文されている。稻荷台式の古い段階に位置付けられよう。

第7種（第75図1~10） 絡条体条痕が施文されるものを一括する。口唇部形態は角頭状のもの、丸頭状のものに分けられ、大きく肥厚するものはない。2・3・9の様にかなり乱雑に施文されるものと、他の様に整然と施文されるものがある。5の様に口唇部外端を面取りしたり、8・9の様に外傾させたり、1の様に口唇内側を肥厚させたりするものも存在する。



第76図 グリッド出土土器(10) Ⅱ群

第8種（第75図11～25） 角頭状を呈する口唇下に1条の沈線を巡らせるものである。沈線は浅く細く施文されるもの（15・19・22・25）と太く深く施文されるものとがある。胎土は他の種に比して緻密さに欠け、白色粒子が目立つ。

第9種（第75図26～44） 無文土器を一括する。胎土は第3種～7種に類似する。口唇部は大きく肥厚するものではなく、概ね丸頭状を呈する。26には口縁部整形時に付けられた爪形が残っている。

第10種（第97図1） 摲糸文と沈線文が複合するものである。個体数は1個体分であるが、推定復元の可能なものである。口唇部が若干肥厚して外傾し、口縁部が緩く内傾して、最大径を肩部に持つ。以下、緩く尖底に移行する器形を呈し、推定口径18.5cm、器高28cmを測る。口唇直下に1条と肩部に3条の沈線が巡り、口縁部文様帯が区画される。文様帯内は右傾、左傾する集合沈線が鋸歯状に組み合わされている。胴部は撲糸Lがランダムに格子目状に施文される。胎土は第9種に類似し、白色不透明粒子を多く含む。本種が第Ⅱ群中に含まれるか否かは資料不足のため判断がつかないが、器形・胎土の類似等から、便宜上第Ⅱ群土器の最終末の段階に分類しておきたい。

第2類（第76図1～30） 押型文系土器群を一括する。

第1種（1～12） 山形押型文土器である。1～6は横位施文であり、7～12は縦位施文である。山形文が間隔を空けて施文されるもの（1～3・11）と密接施文されるもの（4～10・12・13）とが存在する。いずれも粘土に砂粒、雲母片岩を含み、6・7には白色不透明粒子が含まれる。

第2種（14～23） 格子目押型文土器である。14～16は口縁部で、同一個体である。口唇部は角

頭状を呈し、口唇上への施文はない。器面全面への施文と思われ、原体から3個体分が観察される。

第3種（25～30） 楕円押型文土器である。第1、2種より器壁が厚く、8～9mm前後を測る。25は口縁部であるが、口唇上に施文はない。胎土・原体等から3個体分が観察される。

第3類（第77図、第78図1～5・7・8・12・13） 貝殻沈線文系土器群のうち、三戸式～田戸下層式を一括する。

第1種（第77図1～18、第78図12・13） 半截竹管状工具の外側を使用する凹線が施文されるものであり、凹線が太いものと細いものとが存在する。1～6は太い凹線のもので、短い凹線を連結させて器面を巡らせる。胎土は砂粒を多く含み、器表面に砂粒が浮き出ているのが特徴的である。7～11は細い凹線のものであり、施文手法・胎土等、太凹線のものと変りはない。これ等は所謂伏見式とされるものである。13～17は伏見式とされるものと若干タイプを異にするが、胎土・器面調整等は類似する。14～18は同一個体であり、表面は凹線とも器面調整ともとれる雑な施文がされる。裏面は丁寧な研磨が施される。17の口唇部には刻みは施されない。12・13は底部である。

第2種（第77図19～22） 細沈線で文様が描出されるものである。19は口縁部破片で、横位の細沈線帶と格子目文帶とが認められる。恐らく重層的な施文と思われる。沈線は浅く細いものであり、稻荷原型三戸式土器とされるものとは若干異なる。20は雑な斜格子目文が描出されるもので、21・22は幾何学的なモチーフがみられる。いずれも丁寧に研磨された器面に、浅い細沈線で描出するものである。

第3種（第77図23～29） 口縁部破片で、横位沈線のみ施文されるものを一括する。口唇部形態は若干内削状のもの（23・25）、丸頭状のもの（26・29）、角頭状のもの（24・27・28）が存在する。沈線は細いもののみで全て一本書きである。23～25は平行線の間隔をやや狭くとり、26・27は広くとっている。28・29は短い沈線が間隔を狭めて雑に施文されている。いずれも口唇上への刻みは施されない。

第4種（第77図30～35） 口縁部破片で、口唇直下に縦位の沈線を配するものを一括する。口唇形態には若干内削状のもの（31・33）、丸頭状のもの（30・32）、角頭のもの（34・35）が存在する。口唇上への刻みは認められない。30・32・33・35は、口唇直下に縦の沈線がほぼ等間隔に垂下される。31・34は斜位の沈線が施される。33・35は太目の沈線が使用される。

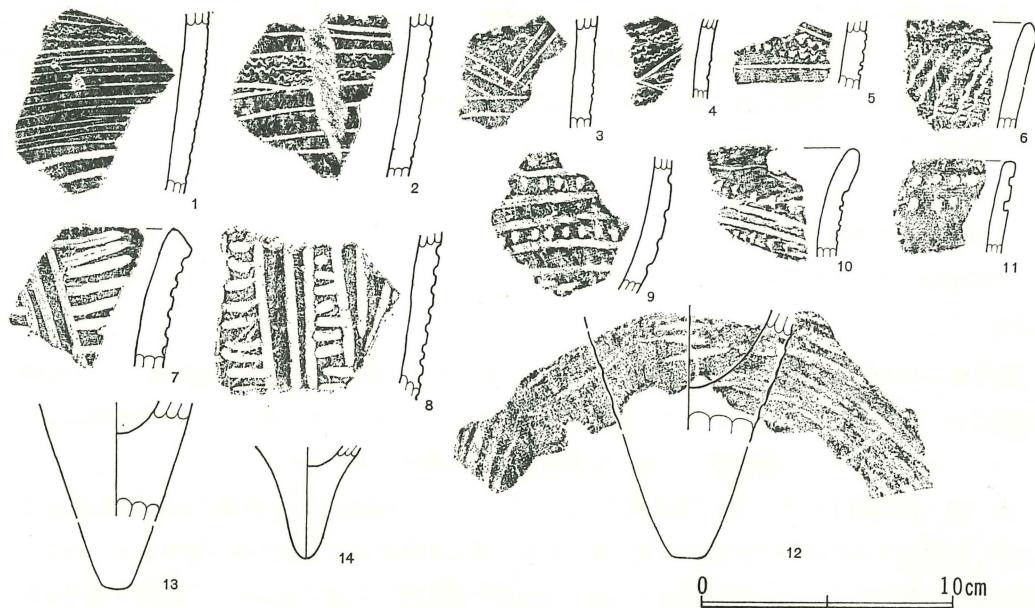
第5種（第77図36～50） 脊部破片を一括する。36～46は水平の細沈線のみ施文されるものであり、沈線間隔の差はあるが、器面調整・沈線の使い方・胎土等、第3種と同じである。47は太沈線と細沈線が併用される。48は鋸歯状か、半截竹管状工具内側による平行線が施文される。49・50は水平方向と斜位方向の沈線が組み合わされている。

第6種（第78図1～5） 沈線文と貝殻腹縁文が併用されるものである。胎土・器面調整・沈線の施文手法等、第5種と同様であり、貝殻腹縁文施文により区別される。1・2は平行沈線間に貝殻腹縁文が横位に施文されるもので、1は太沈線と細沈線、2は細沈線が使用される。3～5は細沈線で区画された内部に貝殻腹縁文を充填するものである。

第7種（第78図7・8） 太沈線で文様が描出されるものである。7・8は同一個体であり、太沈線で粗く縦分割し、横位の短沈線を充填する。器面は丁寧に研磨され、彫り取る様に沈線が施文



第77図 グリッド出土土器(17) II群



第78図 グリッド出土土器(18) II群

される。

第4類（第78図9・10・14, 第97図2・5）田戸上層式段階の土器群を一括する。

第1種（第78図9, 第97図5）胎土に纖維を含まないものである。第78図9は太平行沈線間に刺突列が巡るものである。刺突は植物質の茎状の工具が使用され、刺突の形状は「D」字状を呈する。第97図5は4単位の波状口縁で、推定口径約23cmを測る。口唇は若干肥厚した角頭状を呈し、刻みが施される。口唇下に3条の太沈線が巡り、波頂部下から2本の太短沈線が垂下して器面を縦分割する。区画内は水平、斜位の平行太沈線を組み合わせて三角形状の区画を構成する。三角形状に区画された内部は、横位の刺突列が何列かにわたって充填されている。胎土は砂粒・小礫を多く含む。

第2種（第78図10, 第97図2）胎土に若干の纖維を含むものを一括する。第78図10は波状を呈する口縁部が外彎して開く。口唇部は先細りの丸頭状を呈し、刻みは施されない。波状に沿って口唇直下に浅い細沈線が巡り、文様は深く切り込む様な平行沈線で描出される。平行沈線間及び区画に沿って刺突列が1条配され、刺突の形態は三角形状を呈する。胎土は砂粒・小礫を多く含み、なかでも縁泥片岩の混入は著しい。纖維は微量ではあるが含まれ、器表面に浮き出ている。第97図2は推定復元図であり、推定口径は約29cmを側る。胴上半部で緩く抉れ、以下張りながら尖底へ移行する器形を呈する。口縁は直線的に開き、4単位の波状縁を呈するものと思われる。口唇部は若干肥厚して外削状を呈し、上面に長方形の刺突列を配する。波状に沿って口唇直下に1条の沈線が巡り、以下胴部は2本対の平行沈線で水平に分割される。また、平行沈線に沿って長方形の刺突列が1条づつ配される。使用される沈線は角頭状工具による角張ったもので、刺突列も同一工具により、短沈線状に押引いて施文される。器表面は浅く条痕が施文され、裏面は磨かれている。胎土は緻密であり砂粒が目立つ。極く微量ではあるが、纖維を含む。

第5類（第78図6・11、第79図1） 子母口式段階の土器群を一括する。有文土器は3点出土した。第78図6と第79図1は口縁部に貝殻腹縁文が斜位に施されるものである。口唇部は外削状を呈し、貝殻腹縁による刻みが浅く施される。器表面には条痕が浅く施され、裏面には擦痕が観察される。胎土は砂粒・小礫が多目に含まれ、白色不透明粒子が目立つ。纖維が若干含まれる。

第78図11は、2段の刺突列が口縁部に巡るものである。口唇部は角頭状を呈し、刻みは施されない。刺突は植物質の茎状工具によるものと思われ、部分的に形状がそのまま残される。器面は表裏とも擦痕状の整形が施される。胎土は緻密であるが、白色不透明粒子が多く含まれ、纖維は極く微量含まれる。

第6類（第79図2・3） 野島式を本類とした。2・3の2点出土した。細隆起線のみで文様が描出されるもので、間隔の開いた平行細隆起線と、それに直交する形で垂下する細隆起線によってモチーフが構成される。表裏面とも細かな条痕が施され纖維を若干含む。

第7類（第79図4～8） 鶴ガ島台式を一括する。4・5は沈線により斜格子目文を描出するもので、沈線の交点に円形竹管文の刺突が施される。6は細隆起線により区画が施されるもので、円形の刺突が施される。7・8は沈線で区画した内部に刺突列を充填するもので、沈線と刺突は同一工具で行なわれる。条痕は4・5・7で顕著であり、6・8は表裏面とも擦痕状の調整が施される。纖維はいずれも含まれ、7・8には多目に含まれる。

第8類（第79図9・10） 茅山上層式段階の土器群である。9・10は雑に施文された太沈線に沿って、刺突が施されるものである。刺突は半截竹管状工具によるもので、部分的にその形状が残される。胎土は纖維を多量に含み、小礫が目立つ。

第9類（第79図11～15・17～21） 早期末葉～前期初頭の土器群を一括する。20は内彎気味に開く口縁部に、刻みの施される隆帯が1本巡る。口唇部は角頭状を呈し、浅い刻みが施される。表裏面とも条痕は施されず、纖維を小量含む。

15・17～19は口縁部に鋸歯状文、波状文が描出されるもので、15は表裏面に条痕が施文される。15・19は半截竹管により文様が描出されるものであり、17は角張る太沈線、18は細沈線の一本書きである。15は纖維を多目に含み、他は小量含む。

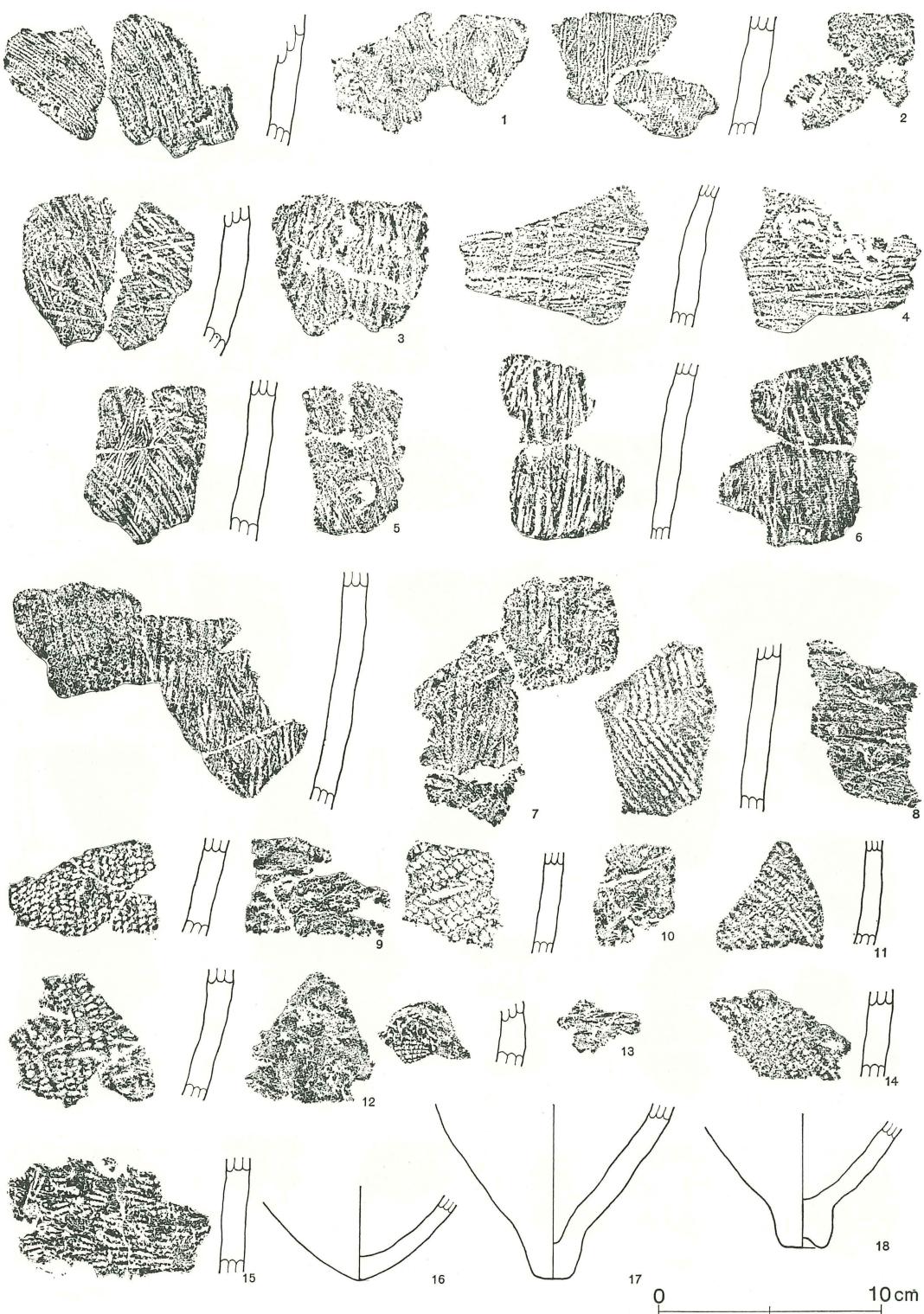
11～14は同一個体であり、波状縁を呈する。角頭状を呈する口縁が若干内傾し、口唇上に貝殻背圧痕が施される。波頂部から半截竹管状工具による集合沈線が垂下し、文様帯が分割され、口縁部は縄文R Lしが施される。纖維を多目に含む。裏面に条痕は施されない。

21は底隆帯で口縁部文様帯が区画され、隆帯上、文様帯内及び先細りする口唇部に撲糸Rが施文される。条痕は施文されず、纖維を少量含む。

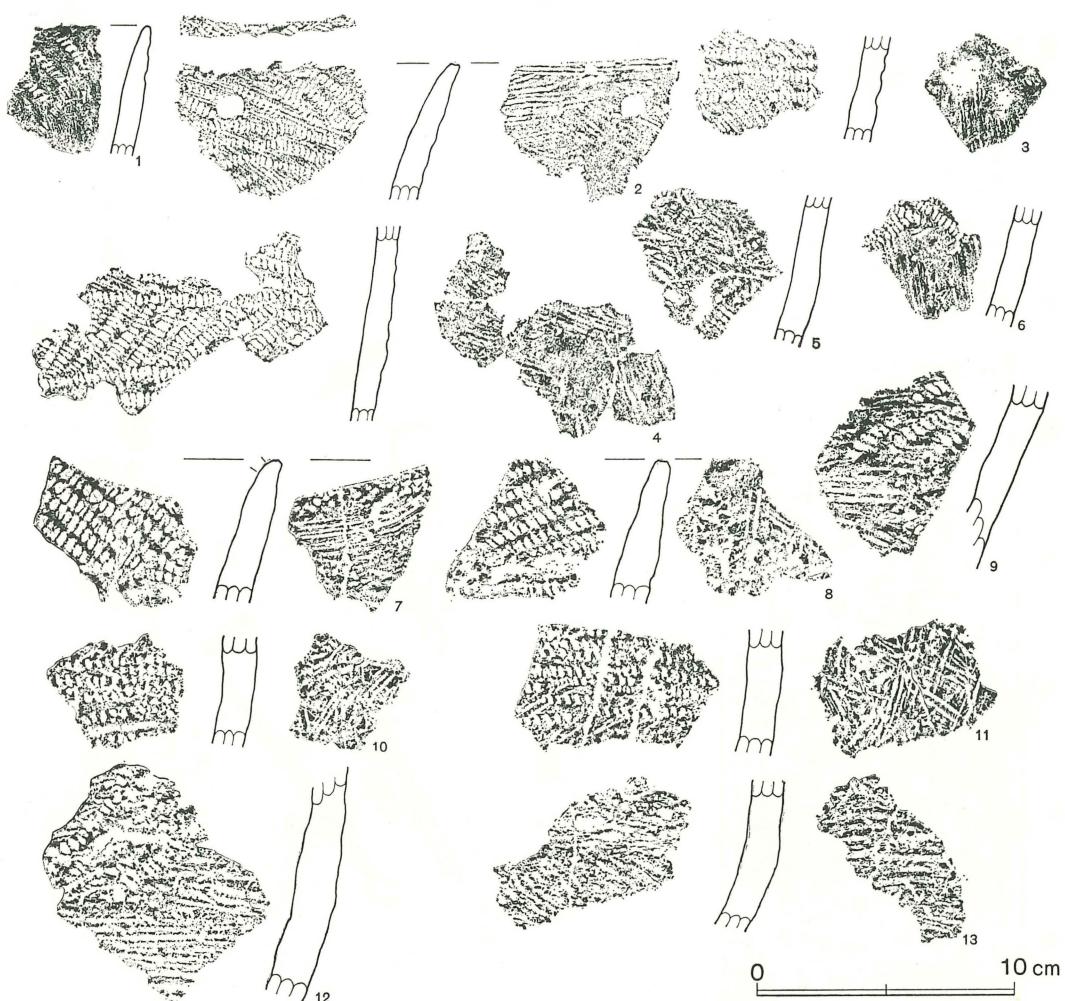
第10類（第79図16、第81図1～13） 絡条体圧痕文の施文される土器群を一括する。1は先細りして開く口縁部に、斜位の絡条体圧痕文が組み合わされる。原体は0段の縄を絡めたものである。条痕は施されず、纖維が少量含まれる。第5類に含まれる可能性が高い。2～4は同一個体である。先細りする口唇部に絡条体圧痕文が押圧され、小波状口縁を呈する。絡条体圧痕文は口縁部から斜位、横位、斜位と重層的に施文され、水平に文様帯を分割する部分では3段に施文されている。原体は1段の縄Rを絡めたものである。表裏面とも条痕が施される。胎土は小礫を多く含み、纖維を



第79図 グリッド出土土器(9) II群、



第80図 グリッド出土土器(2) II群

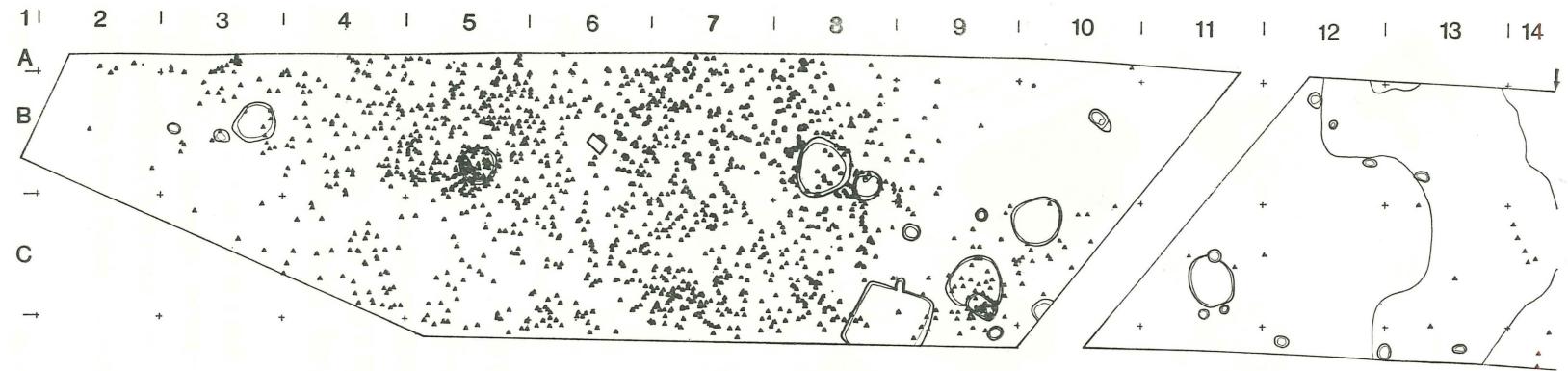


第81図 グリッド出土土器② Ⅱ群

少量含む。5は絡条体圧痕文が斜位に、6は異斜方向に組み合わされている。7は波状縁を呈し、裏面の上部にも絡条体圧痕文が施される。8は口縁部であり、斜位の絡条体圧痕文が施される。9～13は斜位、横位の組み合わせであり、いずれも条痕が顕著に施される。纖維は11～13で多量に含まれる。第97図16は、波状縁頂部から隆帯が垂下するもので、口唇、口縁部、隆帶上に絡条体圧痕文が施される。

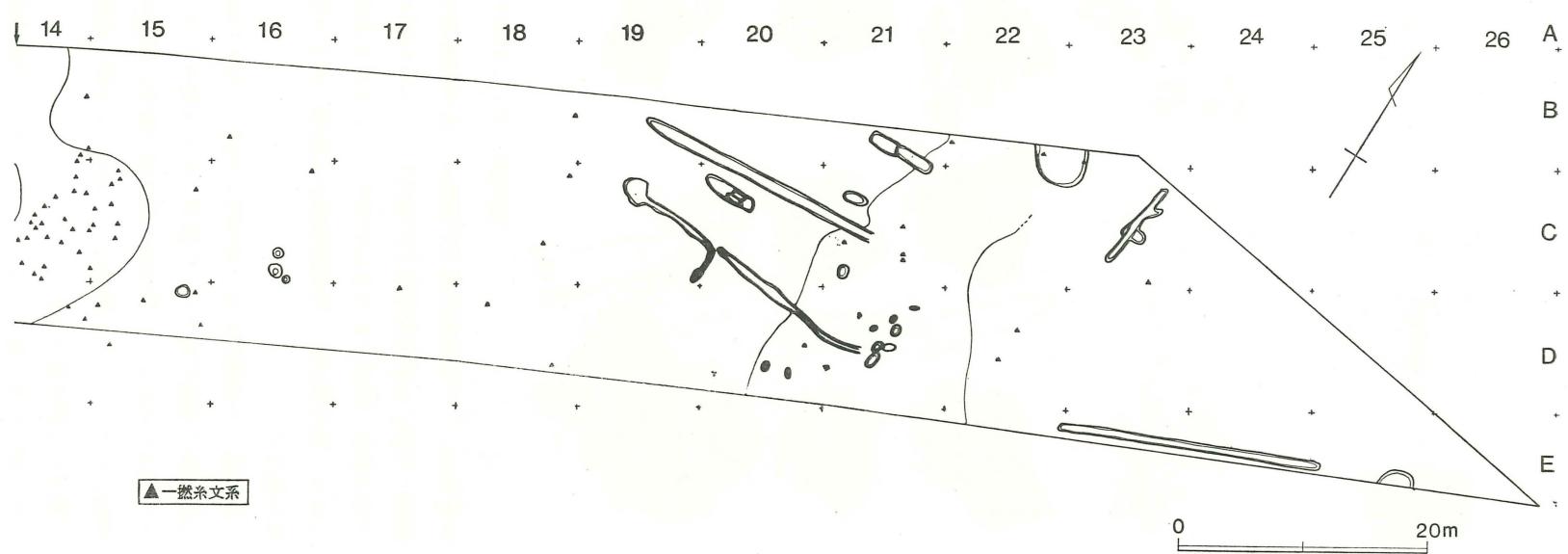
第11類（第79図22～30、第80図1～18） 文様の描出されない粗製土器を一括する。22・25・26は表裏面に条痕が施され、口唇部に刻みは施されない。23・24は擦痕状の器面調整がなされ、口唇上に刻みが存在する。27は折り返り状口縁部に刺突が施される。28・29は口唇上に貝殻背圧痕文が押捺される。いずれも纖維を多く含み、第9類の粗製土器と思われる。第80図1～7は表裏に条痕の施される胴部破片である。

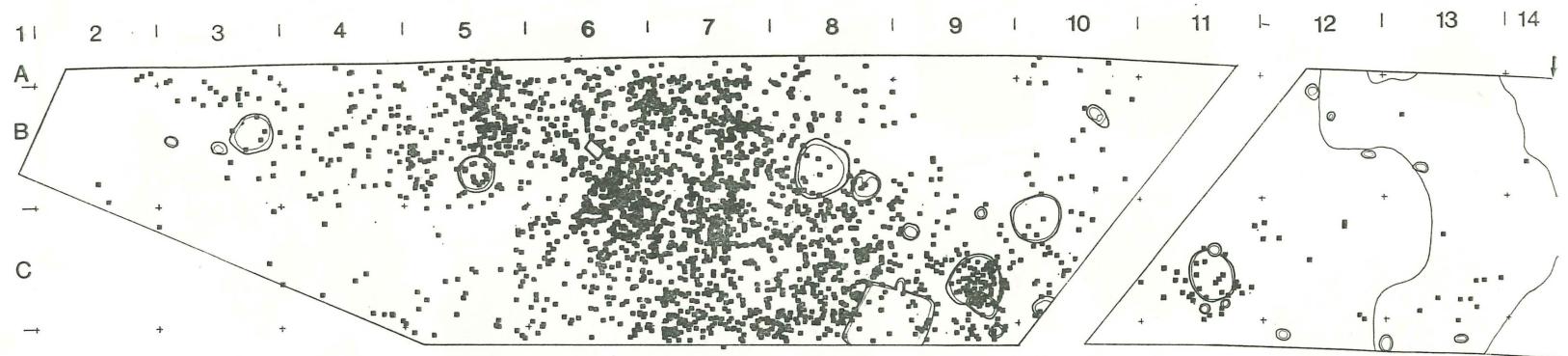
8～12は縄文が施文されるもので、胎土、器面調整から、第9類と思われる。縄文は全て単節R Lであり、9・12は斜位施文、2・10・11・14は横位施文される。



第82図 II 群土器平面分布図(1)

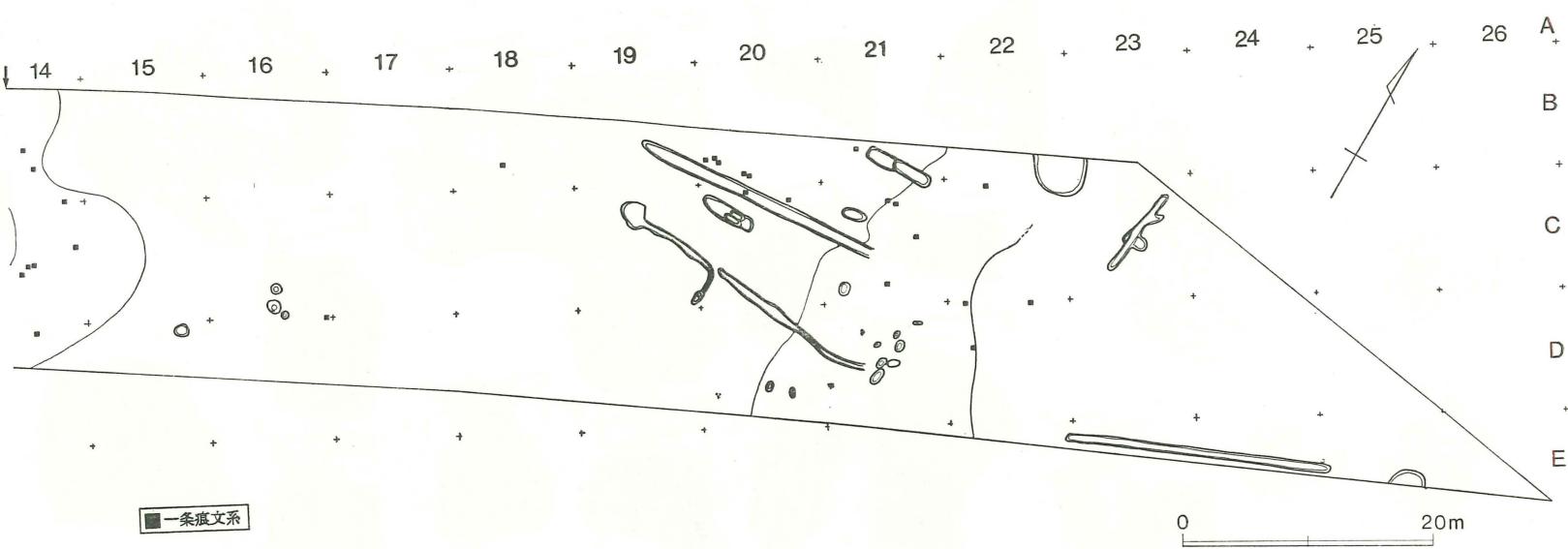
— 104 —

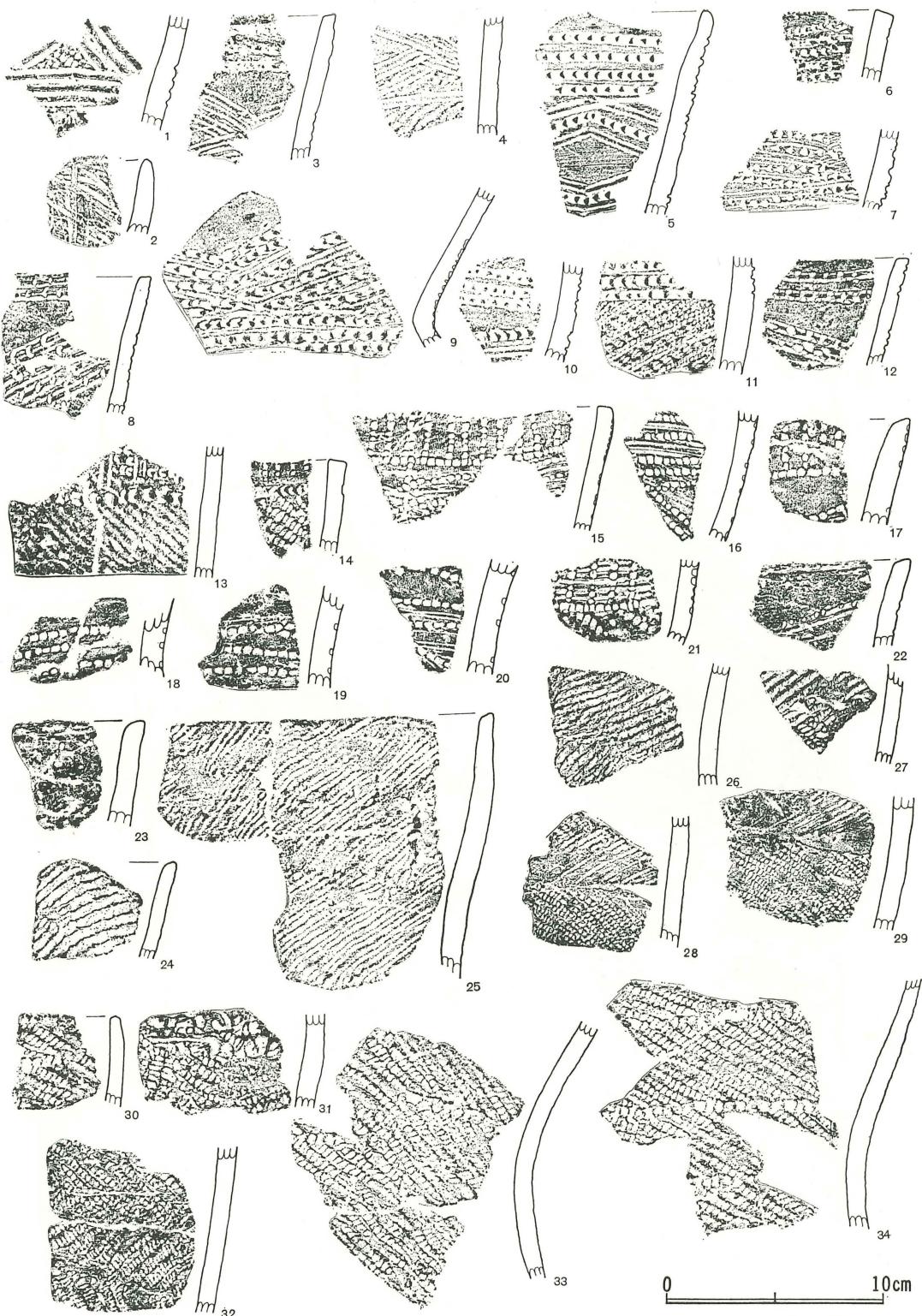




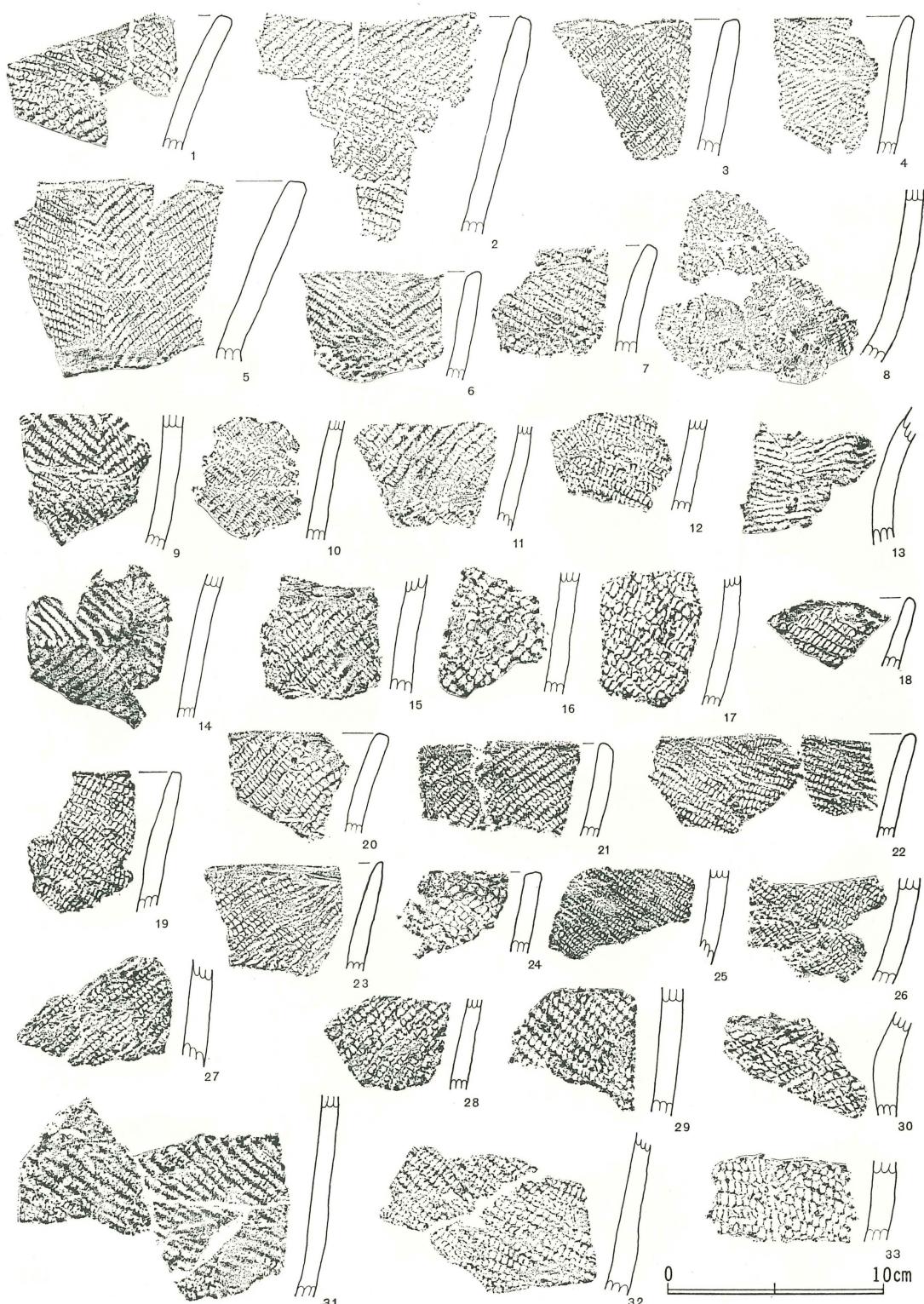
第83図 II群土器平面分布図(2)

- 105 -

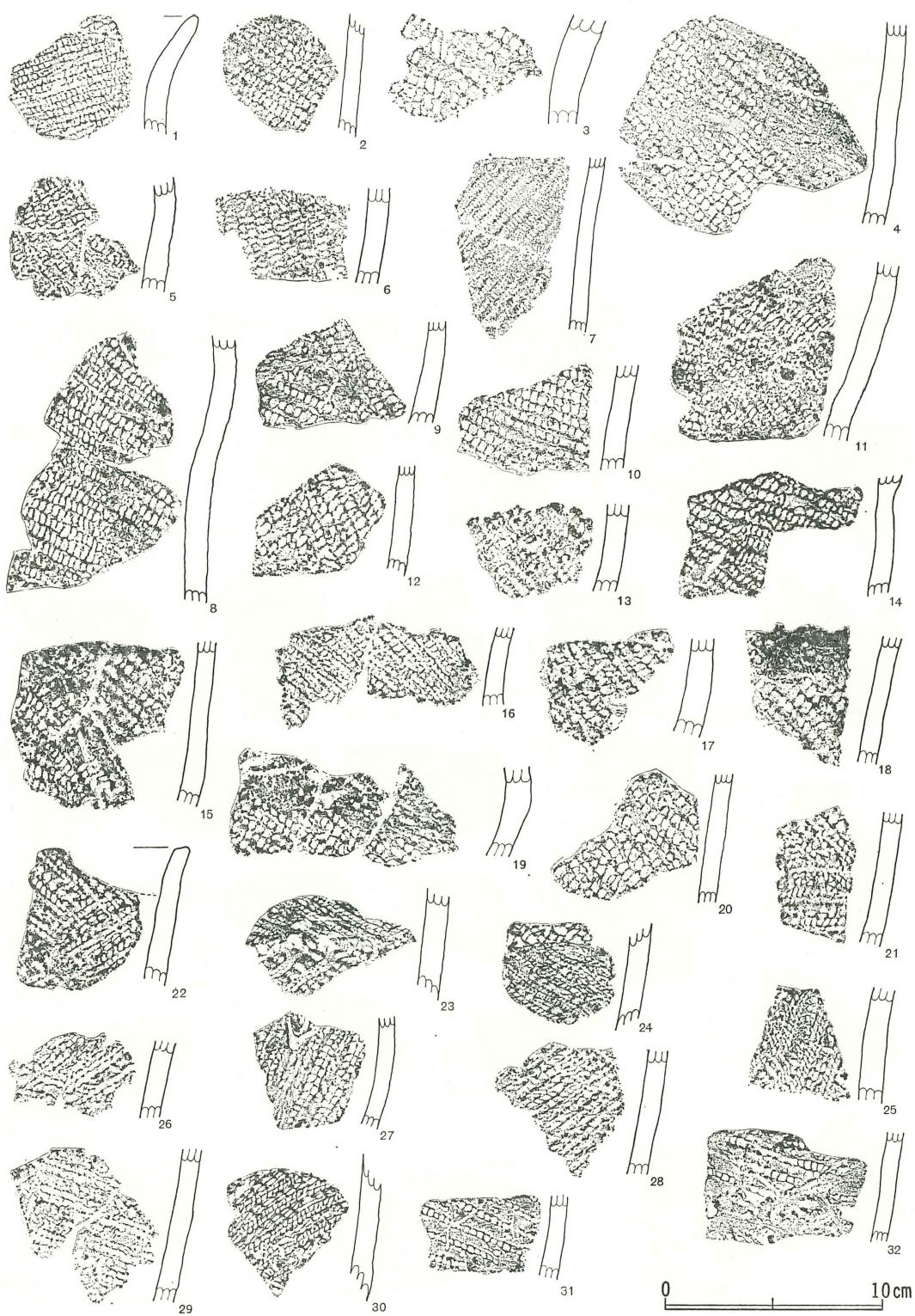




第84図 グリッド出土土器(2) III群



第85図 グリッド出土土器(3) III群



第86図 グリッド出土土器(2) Ⅲ群

13～15は貝殻背圧痕文の施される土器で、纖維を多めに含む。胎土・器面調整等から第9類に含まれるものと思われる。

16～18は底部で、16は鈍角な、17、18は先端部が突出する尖底を呈す。17・18は第8類の底部と思われ、その形状は東海系統のものと類似する。

第Ⅲ群土器

Ⅲ群土器は黒浜式と諸磯a・b式が主体である。その分布域は調査区全域にわたり、両者の集中区はほぼ合致する。粗分布を示すのは旧谷部にあたる地区で、これに面する斜面で特に集中する形となっている。羽状縄文系と竹管文系の密集度の多寡は微妙な差がある。すなわち、前者はグリッド12～15列に大きな集中が見られるのに対し、後者では4～9列と20～23列にこれが集中する。また後者の場合、多分に漏れず、住居跡・土壤上に大きな集中があり、その他4～9列は遺構内外の別なく分布が集中している。

第1類（第84～86図）羽状縄文系の土器を一括した。出土の主体は、図示したものも含め全て関山Ⅱから黒浜期の所産である。他に梯子状の沈線文様を擁する関山Ⅰ式土器も出土したが、小片のため図化していない。図示したものは、関山Ⅱ式と黒浜式が混合しているわけだが、埼玉県西部では、大宮台地以東とは異なり、関山期に開花した縄文横帯区画意識が長く残るため、両者の識別に支障を来たすことが多い。これは特に環状末端部（ループ）を残さぬ全面縄文の破片に現われるところである。そのため、時期別の意識的な分離を避け、一括して扱った。

第84図1～23は口縁部文様帶を有する破片である。文様帶内に地文を残すものは1のみで、一方を重複させる有管内痕多截竹管平行沈線や、集合角状突起の採用は関山Ⅱ式の特徴である。これに対し、2以下は時期降るもので、9のような強い屈曲部を有する大波状口縁土器を特徴とする。しかし、2は無文地に乱雑な沈線列を施文するものあり、東関東地方系の施文法といえる。

3以下の在西部関東・中部系施文の中で、平行沈線のみで全体が構成される類は出土しておらず、口縁直下に横位爪形文を配した3・4の同一個体片がこれに最も近い。一方、5～23は列点系の施文法を特徴とするタイプで、使用工具によってさらに爪形文（5～13）と列点状刺突文（14～23）とに分けられる。両者は区画線内に菱形の構図を挿入する点で類似するが、口縁直下の構成は、系譜の差を示唆するような違いが現れている。すなわち、前者は口縁線に並走する複数の爪形刻を配し、後者は大形爪形文を祖源とする縦位列点文が同所を飾る。

基本的には補助的に割振りした平行沈線相互の間に列点・爪形を充填しており、共通しているが、8のみは平行沈線内にこれを施しており、本遺跡の様相内では異質の手法といえる。一方、補助線としての平行沈線を用いない例は列点状刺突文を用いる17・18にしか見られず、両手法の内包する施文変化限界の差を感じさせる。

胎土内には、文様系統の差に関わらず、纖維が混和されている。しかし、17～20の含有量は僅少で、注意を要するだろう。なお、13・22・23は列点系の施文法を用いながらも前述の諸例と構図を異にしている。詳しい構成は不明。

第84図24以降は縄文のみを施した破片である。大方が黒浜期の所産となろうが、関山期のそれと判別できないものも数点ある。24～29は無節斜縄文を残すもので、条線は一様に細く、単節と見紛

う程の荒い纖維痕を残すものは出土していない。27~29は单方向施文の单節斜縄文と併用されるもので、施文変換点は追加成形の接合部にあたっており、粘土層が下位の縄文を覆ってしまっている。

一方、30~34は原体環状末端痕（ループ）を残すものであり、全て2段縄製作時に趨向を凝らした原体を使用している。このうち、31は多段のループ帯を配するもので、本遺跡の地理的位置を考え合わせれば、確実に関山期に遡り得る。他の单段ループに関しては、黒浜期にも残存することが明らかとなっており、帰属の断を下せない。現存部内で羽状を構成するのは31と32で、横帶間羽状と同一横帶内羽状の二種がある。原体の段条数は全て多条。

第85図1~第86図20は末端変化のない单節斜縄文を施すものである。うち、第85図1~16は羽状構成を採用している。構成基準に明らかな根拠は見出せず、横帶間羽状と横帶内羽状が混在している。両者を併用するものは、施文限界を統一することによって菱形状の条線帯を作出している。このうち、14は原体末端の半折部痕が残るが、環状処理を経た可能性もある。また、横帶が一際幅広の3と5は同一個体である。両者に象徴されるように、各施文幅（横帶幅）は一様に広く、横位施文を基本とするものの、8・12・13のように斜位施文の痕跡を残す破片も少なくない。原体の段条数は多条が基本となっており、16のみが2条を確認できた。

单方向施文は17以下に示した。こちらは羽状構成の一群より0段2条原体を使用するものが多く、半数近くがある。しかし、粗大な節を有する類は少なく、比較的軟質径細の纖維束を使用したことが推せられる。

第86図21~32は附加条原体の痕跡を残すものである。原体は全て逆方向附加条法を用いているが、附加縄が1本のもの（31・32）と2本のもの（21~30）がある。後者は、一見して撲戻し法を用いた正反の合原体痕と解せられる破片もあるが、仮の正縄部に現れる節数が多く、撲戻し法による原体製作法では説明がつかない。もちろん、附加条（視覚的には反縄）痕が深く印されていることは言うまでもない。

第2類（第87~91図） 竹管文系土器を一括した。諸磯a・b式が主体で、特に前者が多く、縄文單文の破片（第90・91図）は殆どがこちらに属すであろう。一方、後者は浮線文系土器を主として平行沈線文土器が若干加わる程度である。幅広の爪形文で不整文を描く爪形文土器は、典型的なものが出土しておらず、本遺跡の諸磯a・b間に幾許かの空白期間が存在したことを物語っている。

第87図1~24は肋骨文系、若しくは窓枠状文系の構成をとる破片である。旧態を残す典型的な肋骨文は7~9の無地文同一個体片に限られ、他は著しい変質が窺える。複段の文様帶構成を条件とする窓枠状文は、10・15が確定し得るのみで、他はいずれとも決し難い。1・5・23・24はその文様展開を施文の特徴からすれば、单段文様帶構成の肋骨文系にあたろう。また、10~22は粗な斜行線より窓枠状文系と思われる。両者の施文技法には大きな差が認められず、文様交点に円形竹管文等の刺突文を追加するのも同様である。両者ともに地文としてR L縄文を有し、窓枠状文系は2本1組の、肋骨文系はさらに多数の有管内痕平行沈線で縦区画を連結する。

同図25~35はさしたる文様構成を有さず、円形竹管等の縦位刺突文を唯一の拠所とする個体である。28・31は前述した窓枠状文構成にあたるものかも知れないが、確定できない。他の文様要素では、29・30などの平行沈線があるのみで、これは文様帶区画線的要素を持っている。また25・27・

28の口唇上には押圧痕が残っている。

連続山形文系の個体は第88図1～12に示した。山形、若しくは波状文と、直線文の交互配置によって文様帯を充填するのが基本だが、6・7・9のように直線文を介さぬものもあり、一定しない。また、10・11では縦位刺突列、12では爪形列が棒状化の一助となっており、肋骨文系構成と類似する。地文の有無と既述の要素項との関わりは見出せなかったが、単施文平行沈線の場合は殆どが有地文となっている。

以上の確立系統の構成に不足する破片を第88図13以下に示したが、多くは幅狭の並走爪形文を主要素としている。爪形はC字が常であるが、14・29・34等、D字列化するものも一部見受けられる。

平行沈線内に爪形を充填しないのは40～51であるが、40は諸磯C式と思われる。また、41以下のうち、粗間隔に単施文平行沈線を廻らす胴部片は、諸磯b式に属するものかも知れない。40を除き、これらは一様に地文を持ち、この類ではL R原体の使用(47・51)も行われている。

第89図1・2・4～8・13・15は複列施文の平行沈線によって文様を描くもので、諸磯b式に相当する。典型的なキャリパー形の器形はなく、1・2のような屈折口縁部がこれを担う。口頸部文様帯内に曲線文を展開するものもなく、直線的な施文が専ら採用されている。

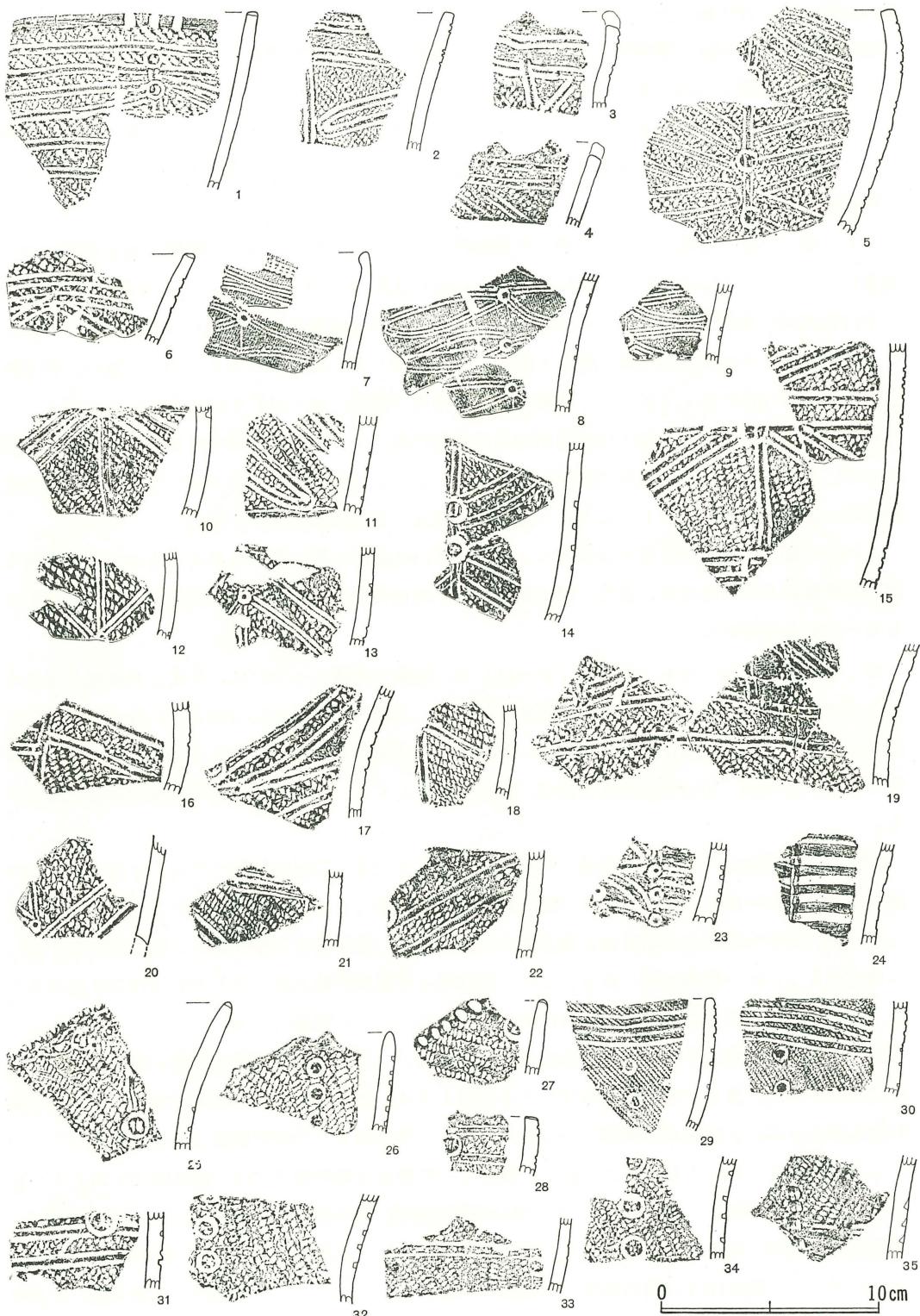
これらに類するものには3・14があり、前者は平行沈線内に鋭い刻みを加えるもので、浮線文土器との折衷施文法にあたる。また、14は諸磯a的な幅狭爪形による文様帯区画線を設定し、内部をb的な曲線文で埋める。

同じ平行沈線を用いる木ノ葉文系(9～11)も、幅狭の沈線からすれば、a式に共通性を求めることができる。爪形文で木ノ葉部を区画する種類は、遺構外では出土しておらず、得られた破片も非常に少ない。11は単開口平行沈線土器にも共通した構図を見るため、この類とは確定できない。なお、16の集合条線土器は、第88図40とともに、諸磯c期の古い段階の所産と思われる。

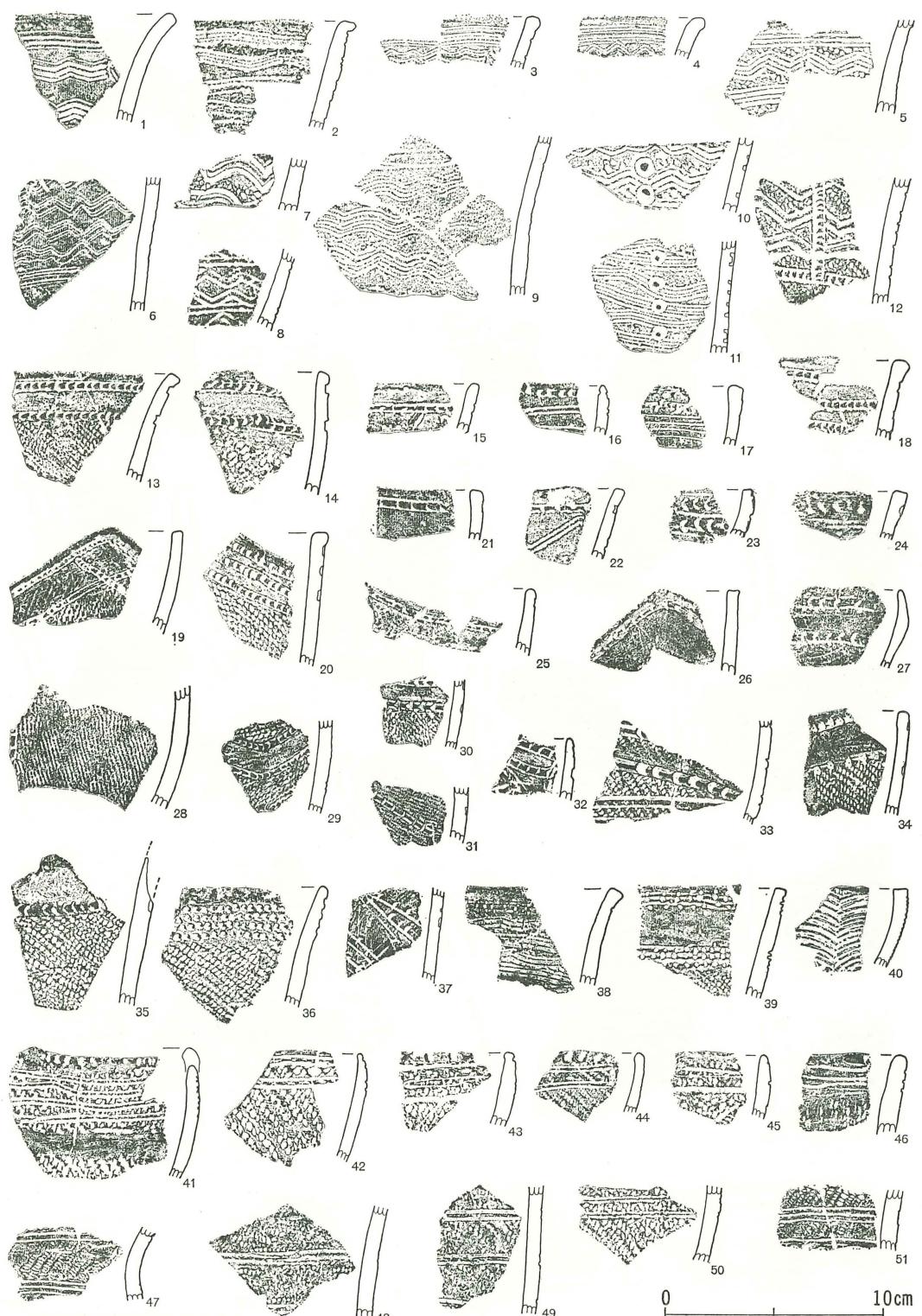
浮線文(第89図17～31)は、浮線上の施文法によって大きく二種に分割できる。すなわち、押圧様刻み(17・20～23)と刺切様刻み(18・19・24～31)である。この種別に応ずる他要素は見当たらないが、前者の浮線には貼付感が多く残る傾向がある。低浮線で丁寧な刻みを施す26・27・31には地文がなく、同一個体と思われる。また、器面部と浮線部の粘土色が異なるのは25の1点のみであった。全体の構成を彷彿させるものではなく、器面についても同様である。

第90・91図には縄文单文の破片を示した。前述の如く、多くは諸磯a式の所産と思われる。口縁片は平縁が多く、薄手で朝顔形に外反するのを常とする。基本的には横位施文で器面を飾るが、第91図1のように、斜位施文が確認できる破片もあり、黒浜期までの横帶意識は完全に崩壊したといえる。原体別にこれらを見た場合、R Lしが優勢で、附加条(第90図11・16、第91図12・24)や、結節部回転痕(第90図13、第91図5)、第一種結束部回転痕(第91図5)などの変化もある。各節は、菱形状の、該期に特徴的なものが多く、第91図21のように、0段多条の原体を使用するものもある。このうち、第91図5は使用原体や羽状構成を用いることなどより、時期降る前期末葉の所産と見做すことができる。

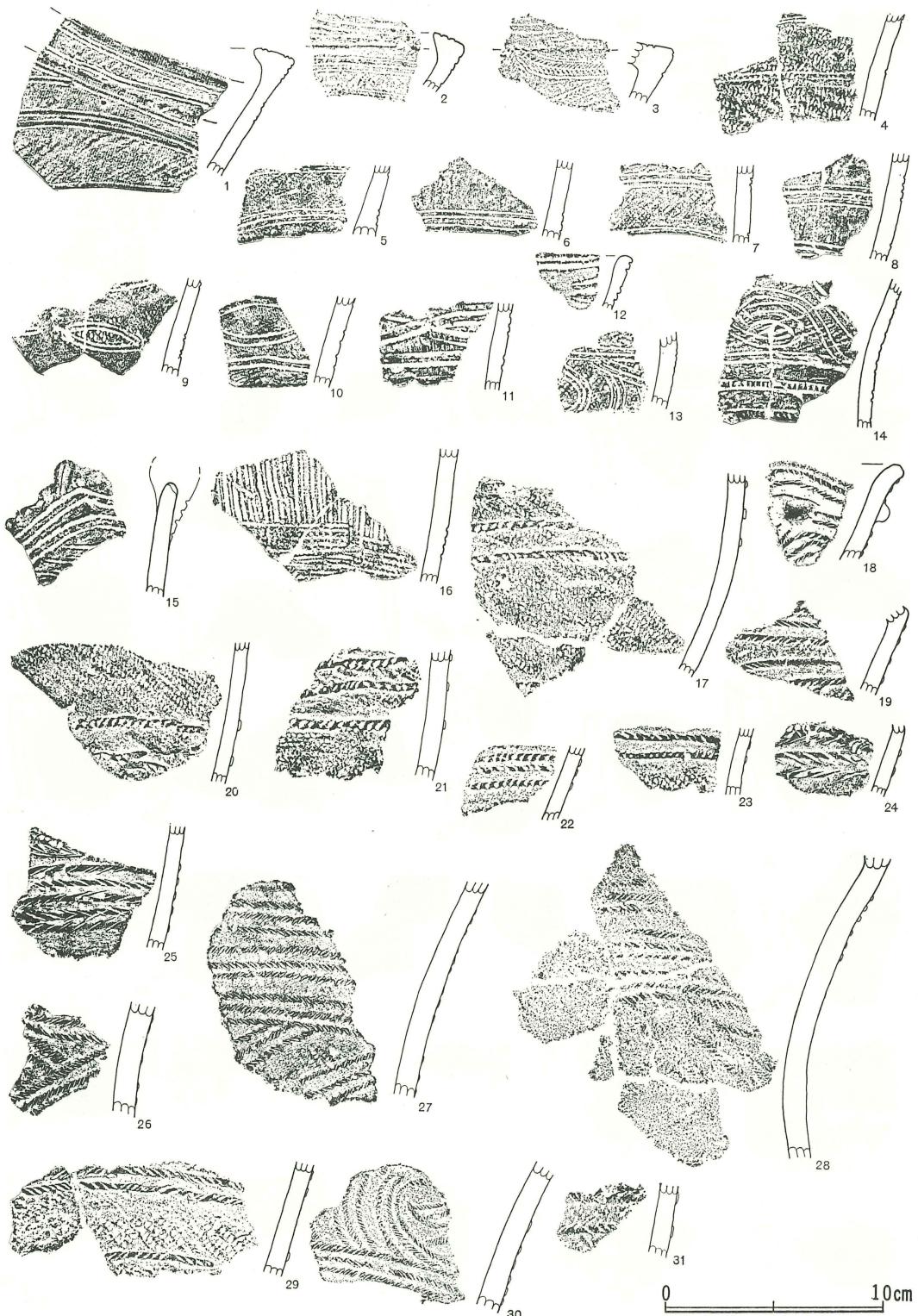
单文では他に無文土器(第91図29～34)があるが、全体を推し得る資料がない。口縁部の破片を



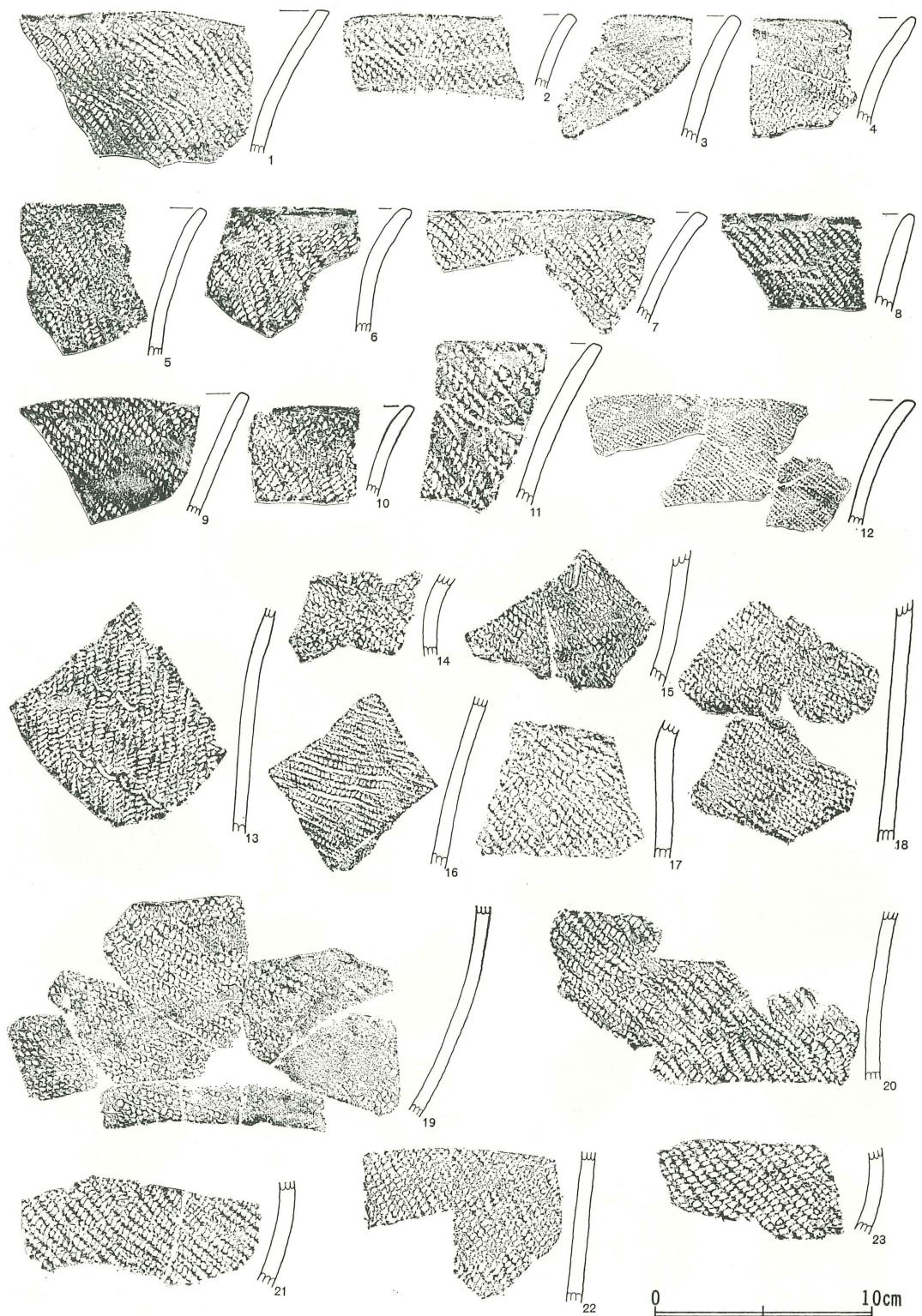
第87図 グリッド出土土器(25) Ⅲ群



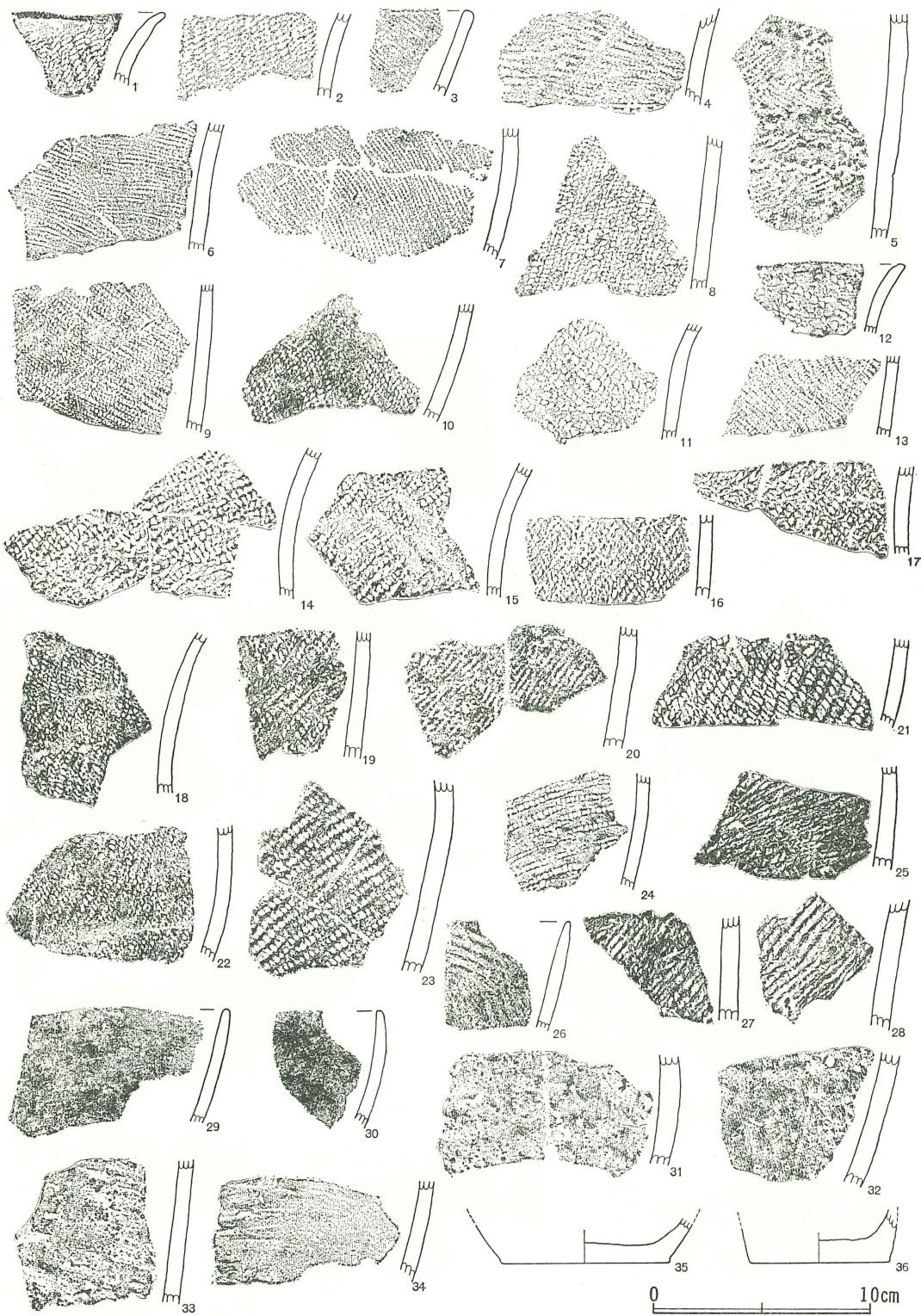
第88図 グリッド出土土器(2) III群



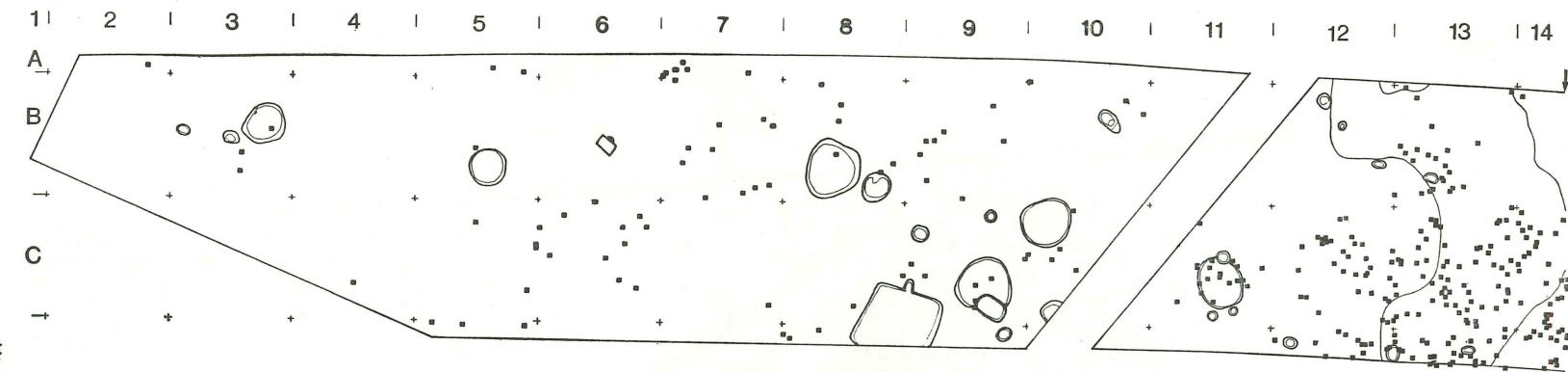
第89図 グリッド出土土器(27) Ⅲ群



第90図 グリッド出土土器(28) III群

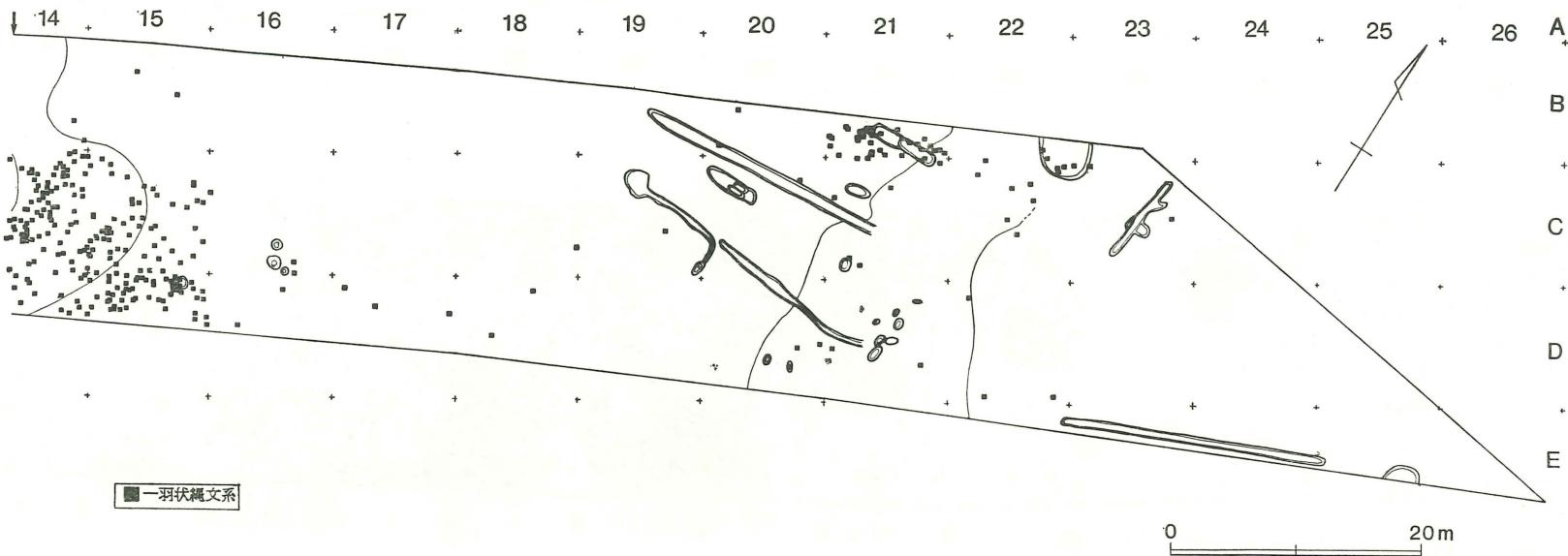


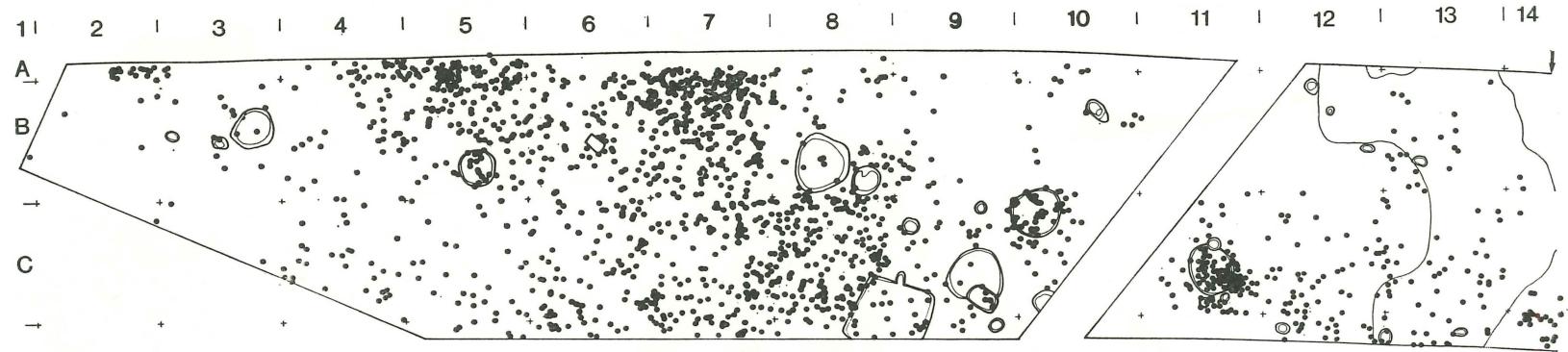
第91図 グリッド出土土器(29) Ⅲ群



第92図

III群土器平面分布図(1)





第93図
Ⅲ群土器平面分布図(2)

見る限りでは、内傾する鉢、若しくは浅鉢形がこの種にあてられるようである。なお、列孔土器は遺構外に出土していない。

第Ⅳ群土器（第94～96・99図）

縄文中期前半から中期後半の土器群を一括した。施文手法・形態によってa～i類に分類した。

a類（第94図1～6）

勝坂式に属する土器群を一括した。いずれも隆帯区画文をもち、隆帯上には刻みが加えられる。

b類（第94図8～10）

勝坂式に比定され、地文に撲糸文をもつ。8は口唇が尖り、内弯する。

c類（第94図7）

加曾利E式のキャリパー系土器で口縁部文様帶が幅狭である。地文に撲糸Lをもつ。

d類（第94図11～16）

c類より時期的に下ると思われる一群である。頸部無文帶は消失し、隆帯も偏平化している。13は口縁部の内弯が強い。12は浅鉢型土器と思われる。15は懸垂文に沿ってナゾリが加えられる。

e類（第94図18～25）

連弧文系土器を一括した。地文は17・25が縄文R L、他は撲糸Rである。弧線は3本沈線が主で、20の如く2本沈線も含まれる。18・19・24は口唇直下に交互刺突文が加えられる。

f類（第94図26～30）

曾利系の土器群を一括した。隆帯間に沈線が綾杉状に施される。30は橢円形刺突である。

g類（第94図33、第95図6～10、第99図3）

加曾利E式後半で隆帯文をもつものを一括した。隆帯は断面三角形を成す。第99図3は懸垂文と橢円区画文が胴部上半に交互に配される。地文は全て充填縄文である。第95図6はEⅢ式である。

h類（第99図5）

隆帯文のみで縄文をもたない。全体に強く内弯し、口唇無文部下に4単位の環状把手をもつ。

i類（第94図31・32・34、第95図1～5、第99図2）

g・h類と同時期で沈線で文様描出される一群である。第99図2は渦巻文を、他は口唇下から垂下する懸垂文をもつ。地文は全て充填縄文である。2～4は口唇下に隆帯が廻らされている。

第V群土器（第96図1～25）

縄文後期の土器群を一括した。モチーフによりa～c類に分類される。

a類（第96図1～11）

掘之内I式に属するものを一括した。3本1単位の沈線文を基調とする。

b類（第96図12～20）

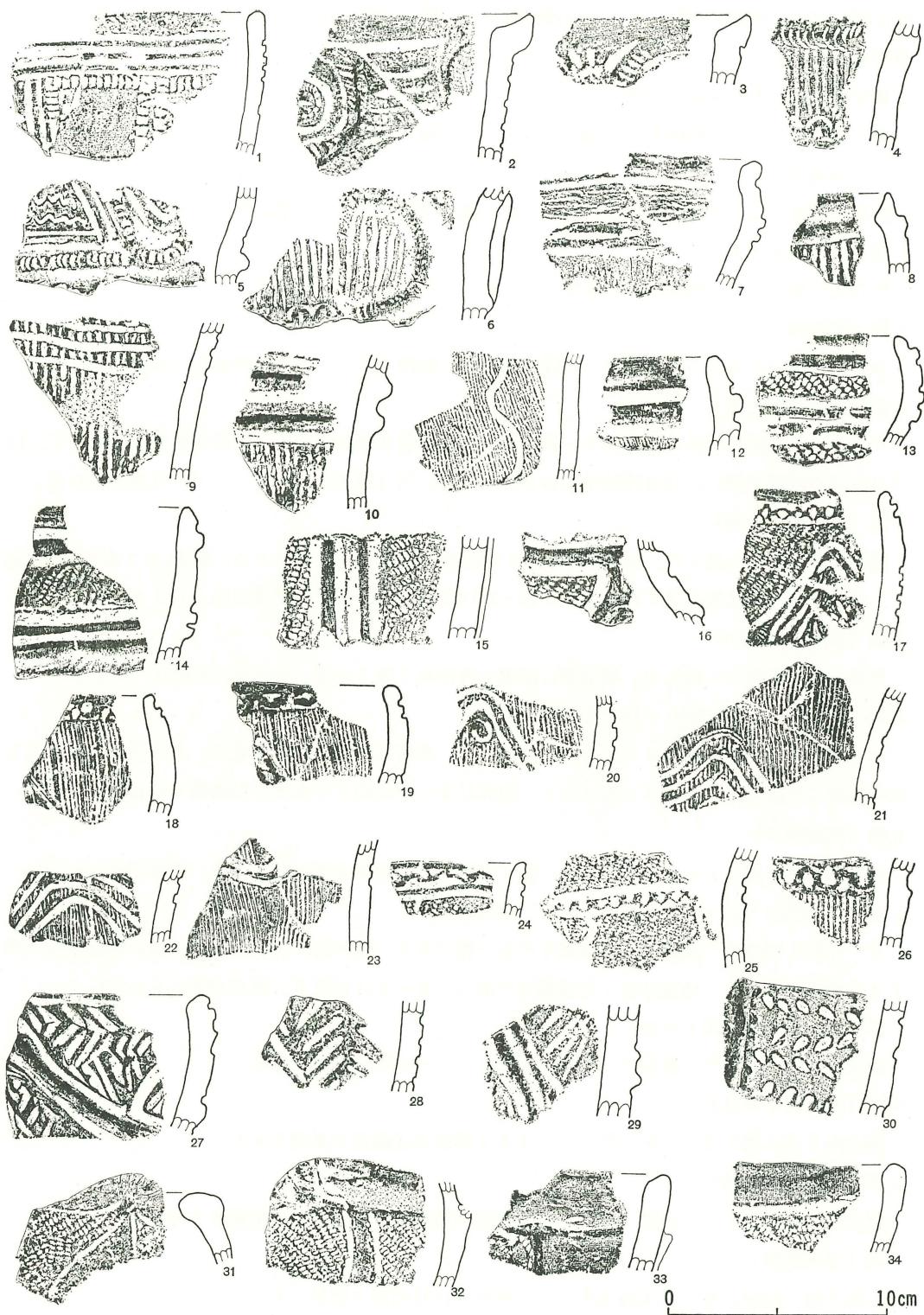
掘之内II式に属する土器群である。17は口唇が屈曲する。沈線間に細縄文が充填される。

c類（第96図21）

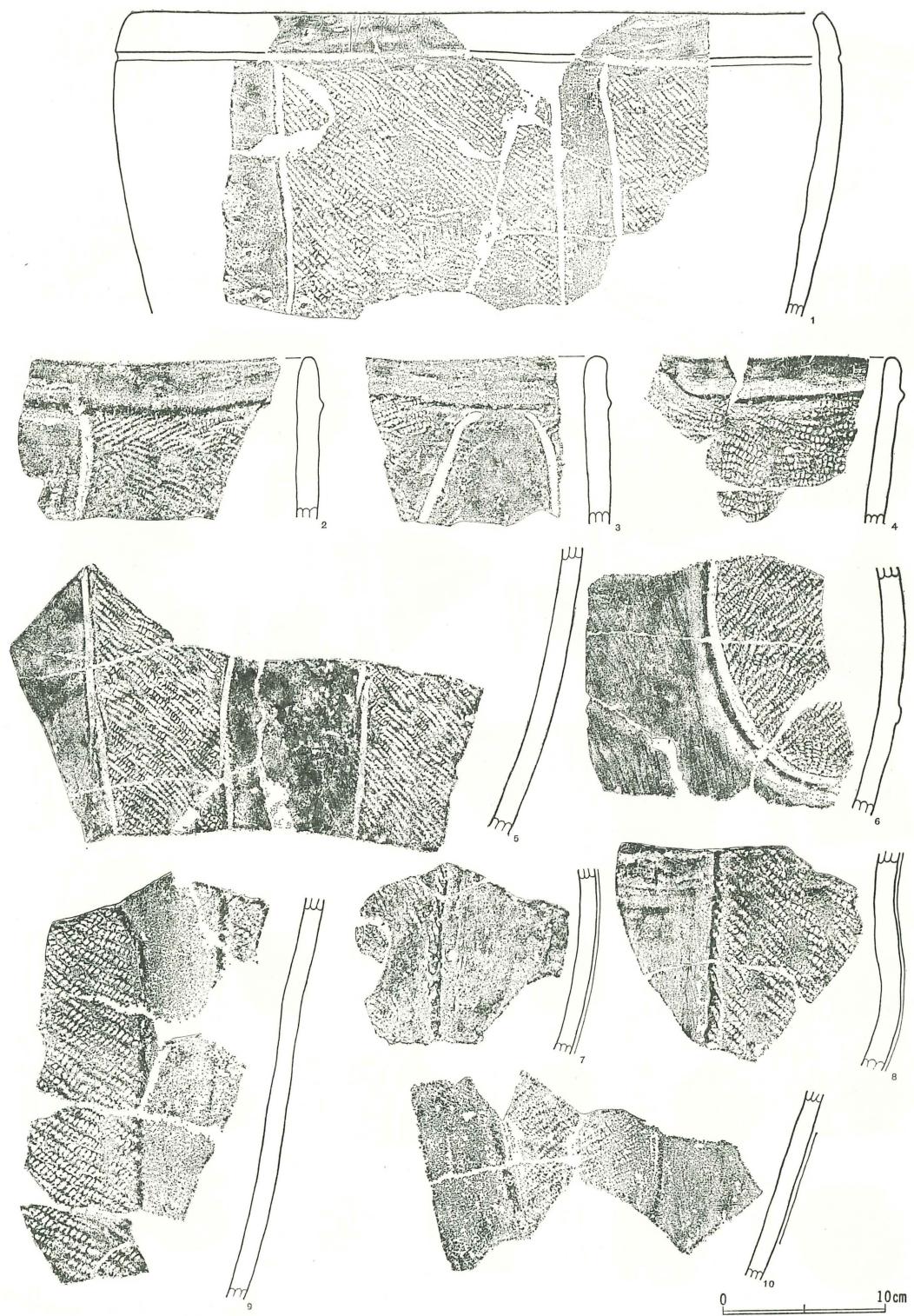
口唇を廻る沈線に接して沈線文をもつ。無文で口唇内側は肥厚している。

d類（第96図22～25）

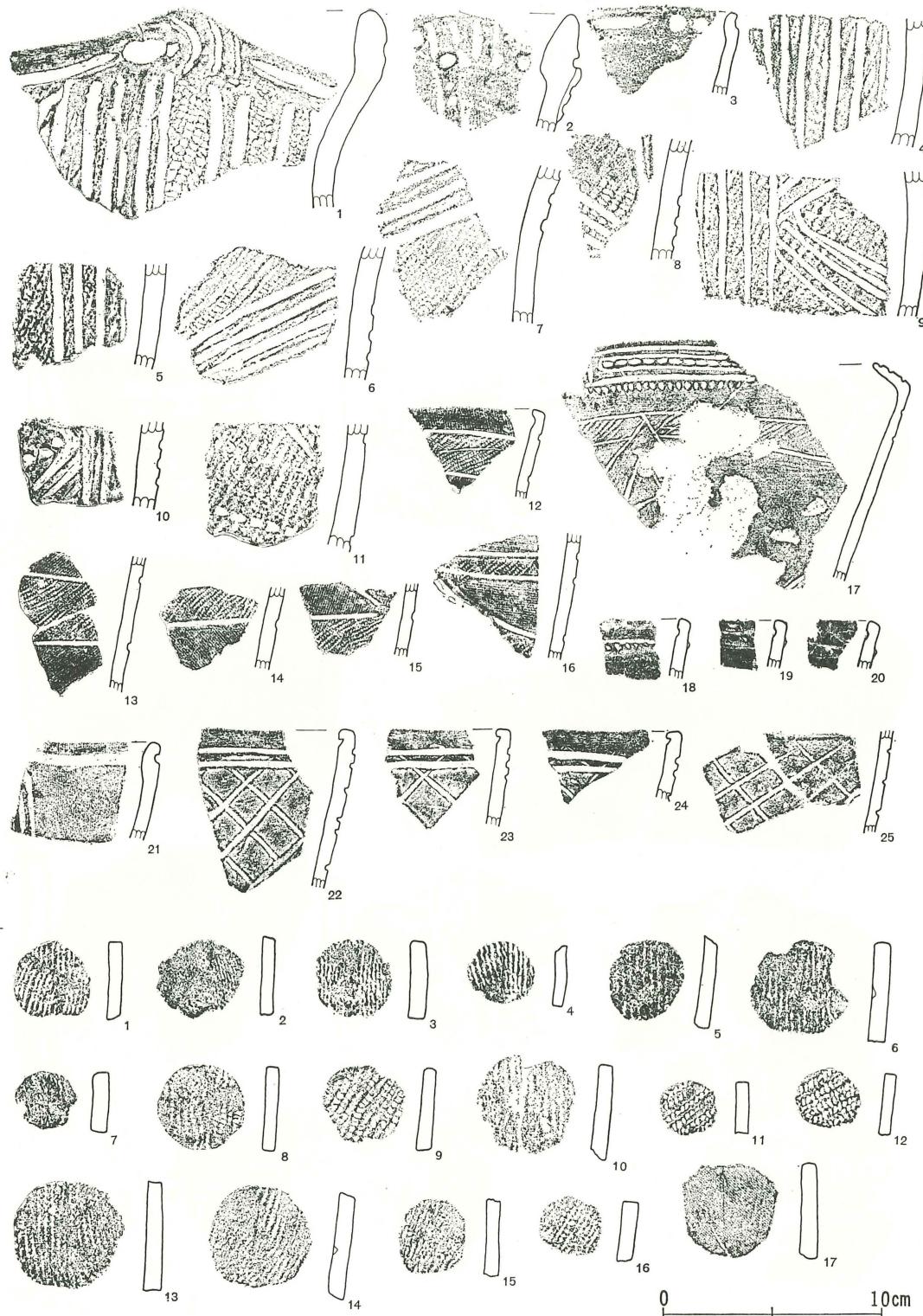
加曾利B I式に属する土器群である。口頸部文様帶に格子目状沈線文をもつ。



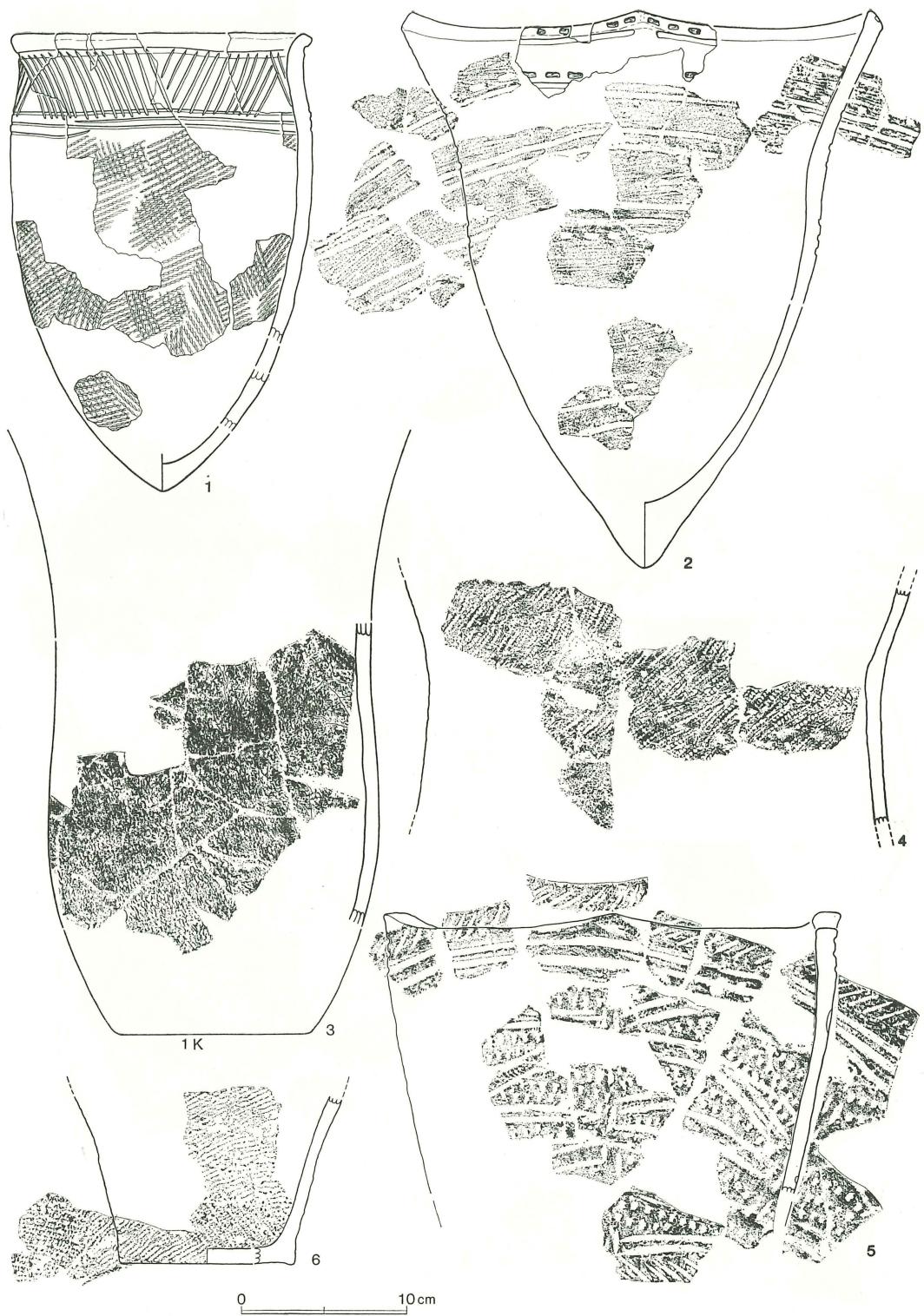
第94図 グリッド出土土器(30) IV群



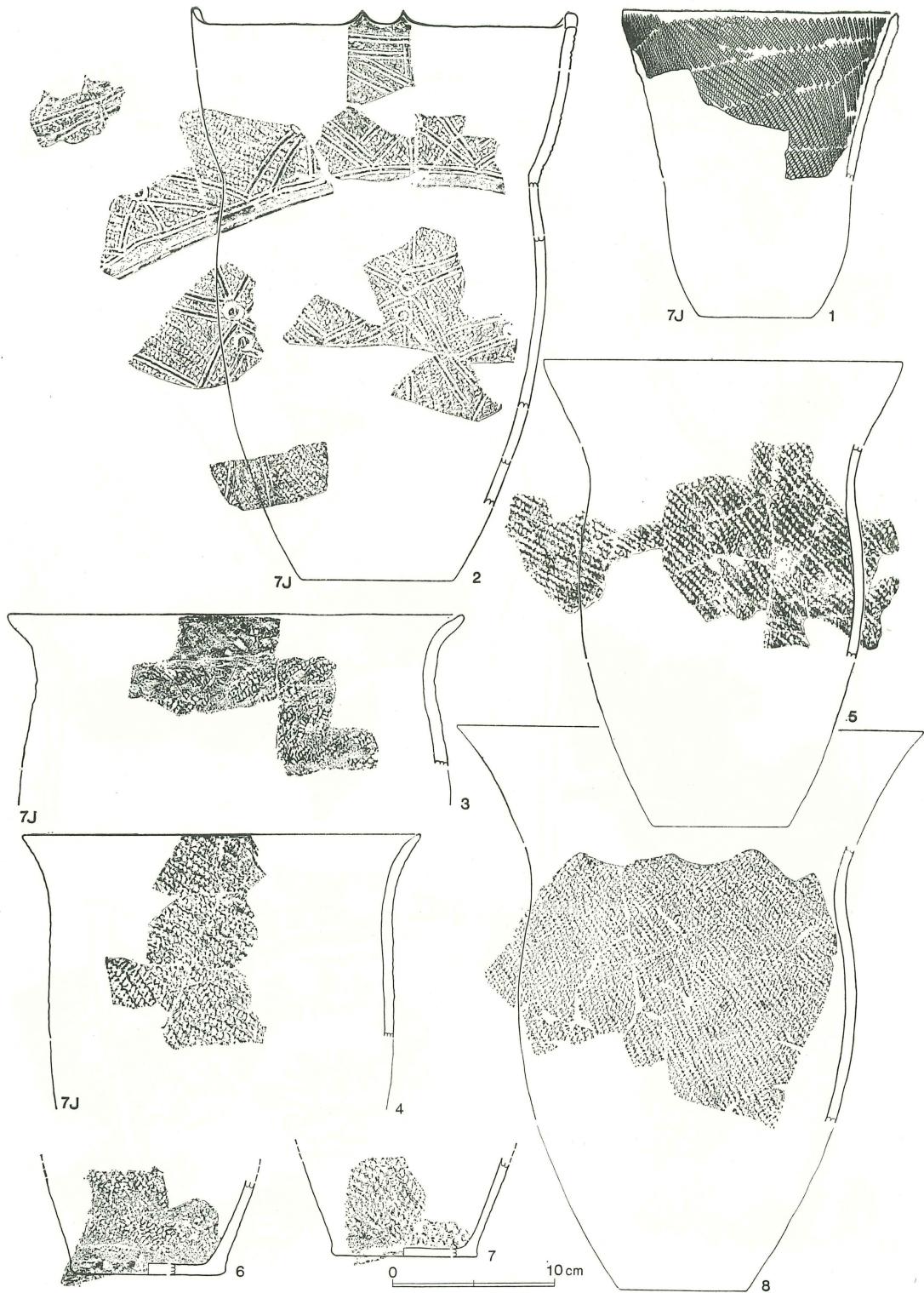
第95図 グリッド出土土器③) IV群



第96図 グリッド出土土器(82) V群



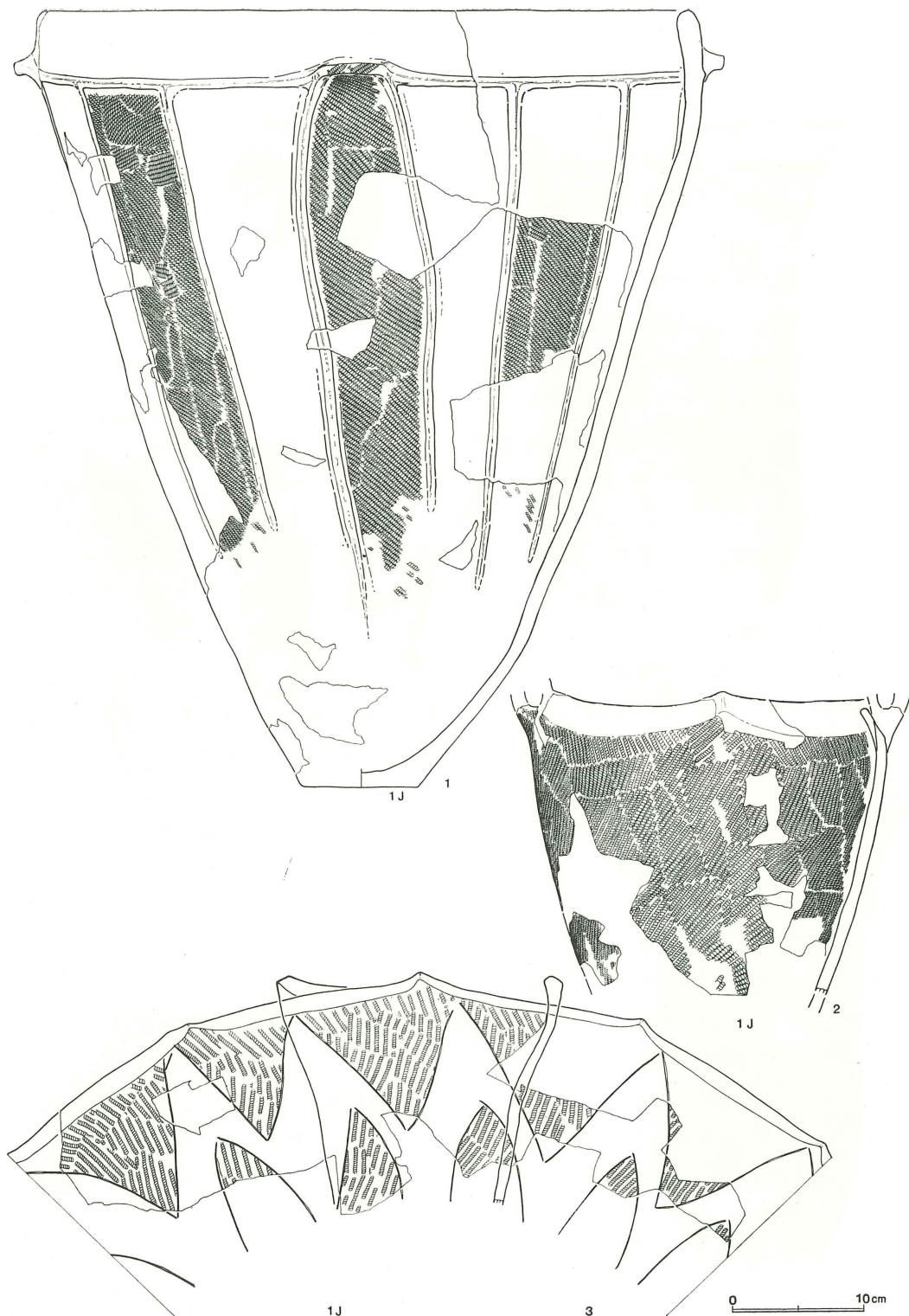
第97図 土器実測図(1)



第98図 土器実測図(2)



第99図 土器実測図(3)



第100図 土器実測図(4)

土製品

土製円盤である。縁辺は丁寧に研磨され、11・12・17は諸磯式、他は撲糸文土器片利用である。

グリッド出土石器

本遺跡からは多数の石器が出土したが、遺構に伴なって検出されたものは少ない。多くはグリッド出土であったため、各石器を時期単位で明確にはし得なかった。このような限界を前提にするため、草創期と思われる石器群以外は、器種単位での形状分類を基本に図を組むことにした。時期的問題に関しては文中に極力触れるところにする。

草創期の石器（第101～102図）

1・2は搔器である。1は上部を欠損しているが刃部は全周に巡ると思われる。2は刃部が全周に巡っている。打点は下位にあり、バルブは裏面加工により取り除かれている。以上のような片面加工の流麗な搔・削器は、草創期に特徴的にみられるものである。3～5は局部磨製石斧である。3は上半が丸鑿、下半が片刃石斧と、両端を刃部にしている珍しい例である。4～5は、楕円形の偏平礫の長軸の一端に研磨を施し刃部としたものである。4は裏面に剝離面が見られるが、研磨が施されているため詳細は不明である。これらに関しては、撲糸文系土器群の後半に特徴的に検出される局部磨製石斧に似ており、その可能性も高い。6はいわゆる有溝石器である。下部を欠損するが、両面に溝状の研磨痕が認められ、矢柄研磨器の可能性も考えられる。

A. 石鏃（第101図7～22、第102図1～34）

1類（第101図7～22、第102図1～5）草創期所産と思われる石鏃を一括してみた。

a（第101図7～9）細身で鉾先状を呈し、基部は凹基無茎のもの。先端を作り出している。
b（第101図10～12）小形で薄身のもの。基部は円基である。12は上下両端が尖り平行四辺形である。
c（第101図13～17）基部の抉りが比較的明確なもの。大形のものが多く、先端を作り出している。
d（第101図18～22、第102図1～5）基部の抉りがないもの。先端を作り出している。
以上の石鏃の特徴として先端部を作り出している事があげられる。

2類（第102図6～34）草創期以外の時期に属すると思われる石鏃を一括した。

a（第102図6～15）基部の抉りが明確なもの。6～14が両面加工で、15が周縁加工である。
b（第102図16～34）基部の抉りが不明確なものを一括した。16～25は基部に浅い抉りが見られる。26～31の基部はほぼ直線になる。32～34は基部が円基になる。34は先端部を作り出している。

B. スタンプ形石器（第103～104図）

1類（第103図1～5）小形のものを一括した。1以外は体部に加工はなく、打割面からの細かい剝離が見られる。打割面は1回の剝離によって作られ、研磨痕が見られる。

2類（第104図6～10）細身のものを一括した。体部には加工がなく、打割面より細かい剝離が見られる。打割面は6・9・10が1回の剝離、7・8が2つの大きな剝離によって作られている。研磨痕はよく見られる。

3類（第103図12～15）体部側縁に加工が施されているものを一括した。両側縁に加工を施すものではなく、全て片側加工であった。打割面は1回の剝離によって作られており、11以外は研磨痕が見られた。

4類（第103図16～18、第104図1～3） 比較的偏平な礫を素材としたものを一括した。体部の加工はなく、打割面より細かい剝離が見られる。打割面は1回の剝離によって作られ、研磨痕が見られる。

5類（第104図4～14） a—花崗岩系の石を素材にしたものとb—それ以外の石を素材にしたものに区分した。体部には加工が施されておらず、打割面からの細かい剝離が見られる。打割面は1回の剝離で作られており、9・12以外は研磨痕が見られる。以上、スタンプ形石器を見てきたが、本石器群は撫糸文系土器群の後半に特徴的に見られる石器であり、分布も関東平野に限定されている。本遺跡における特徴を列挙しておくと、体部に加工を施したもののが少なく、所謂凡字形石器と言われるものはない。打割面は1回の剝離によって作られる事、研磨痕の範囲の広いものが多い事などの点があげられる。

C. 打製石斧（第106～111図）

1類（第106図1～5） 小形のものを一括した。1～4は正面に打割面、裏面に自然面を大きく残す。調整加工は周縁に施されている。5は自然面を残さない。

2類（第106図6～19、第107図1～6） 所謂撥形の打製石斧を一括した。a（第106図6～11）小形で薄手のもの。全て正面に打割面、裏面に自然面を残す。刃部の形状は6～10が円刃で11が直刃である。調整加工は裏面から正面に向って行われている。b（第106図12～14）小形で厚手のもの。正面に打割面がなく、裏面に自然面を残す。調整加工は裏面（自然面）から急角度に比較的大きな剝離が行われる。早期に特徴的に見られる石器群である。c（第106図15～19）中形のもの。裏面に自然面を残す15～18と、正面に部分的に自然面を残す19がある。調整加工は15～18が周縁加工で19が片面加工である。d（第107図1～4）基端部を細く作り出しているもの。全て裏面に自然面を大きく残すが、2は正面にも自然面を残している。刃部は1～3まで調整加工を施し、1・3が円刃、2が直刃になっている。4は欠損していると思われる。e（第107図5・6）基端部が最も厚くなるもの。5は両面に自然面を残し、周縁加工を施したものである。

3類（第107図7～15、第108図1～3） 所謂短冊形の打製石斧を一括した。a（第107図10～15）小形のもの。10～12は裏面に大きく自然面を残す。14・15は裏面に部分的に自然面を残す。13は自然面を残さないものである。刃部は正面に調整加工が施されており、形状は直円に近い円刃である。b（第107図7～9、第108図1～3） 第107図7・9、第108図1～3は裏面に大きく自然面を残し、第107図8は裏面に部分的に自然面を残すものである。調整加工は周縁的に施されているが、刃部では正面に行われている。形状は直刃に近い円刃である。

4類（第108図4～9） 基端部が尖り、三角形状を呈するもの。裏面に自然面を残し、調整加工は周縁に施されている。4～8の刃部は円刃となっているが、4・5・8は正面からの調整加工が施されているのに対し、6・7は側辺の加工のみである。9は欠損と思われる。

5類（第108図10～13） 所謂分銅形の打製石斧を一括した。10～12は裏面に大きく自然面を残す。11～13は基部の抉りが深い。刃部は10・11・13が円刃で、12が尖る。

6類（第108図14、第109図1～3） ほぼ橢円形を呈するものを一括した。全て裏面に大きく自然面を残す。調整加工は第108図14、第109図1・3が裏面から正面へ比較的大きな剝離を行い、第

109図2は裏面から正面への周縁加工である。

7類（第109図4～7） 中形で厚手で、刃部が極めて鈍角のもの。裏面は自然面を残し、裏面から正面に急角度の比較的大きな剝離を施している。

8類（第109図8・9・11～14） 薄手のもの。8・9・12～14は正面に打割面、裏面に自然面を大きく残す。11は両面に打割面を残し、その縁辺を利用しているため、調整加工が少ない。

9類（第109図10、第110図1～5） 不定形で厚手のもの。第109図10、第110図1～4は裏面に自然面を大きく残し、全周に加工を施している。第110図5は両面に自然面を残し刃部と思われる所に集中して剝離を施している。打製石斧というより礫器とすべきかも知れない。

10類（第110図6・7） 大形のもの。6は自然面を残さない。7は裏面に大きく自然面を残す。

11類（第110図8、第111図1～6） 特に大形のものを一括した。a（第110図8） 裏面に自然面を残し、刃部を尖らせている。b（第111図1～6） 上記以外のものを一括した。5は刃部が欠損していると思われる。6は基部を大きく欠損している。

D. 磕器（第113～115図1～8）

1類（第113図1～6、第114図2～14、第115図1～8） 片刃のものを一括した。a（第113図1～6） 長方形及び橢円形の礫の長軸を刃部としたもの。比較的形状が整っている。b（第114図2～4） 長方形の礫の2側縁を刃部としたもの。c（第114図5～8・10） 長方形の礫の3側縁を刃部としたもの。5は基部にも剝離が見られる。d（第114図9・12） 刃部加工がほぼ全周に廻るもの。e（第114図11・13・14、第115図1・2・4） 磕の短軸に刃部加工を施したもの。所謂バリカン形石器である。f（第115図3・5～8） 正面に分割面をもつもの。刃部は2側辺から正面にかけて作り出されている。

2類（第113図5～12、第114図1） 両刃のものを一括した。a（第113図5～10） 長方形の橢円形の礫の1～3側縁に刃部加工を施したもの。b（第113図11・12、第114図1） 全周に加工を施した亀甲状のもの。第113図11は両面に自然面を残す。第113図12、第114図1は正面に分割面を残す。以上礫器を見てきたが、2類は1類に比べ規格性が低い。

E. 敲石（第115図9～16、第117図1～9）

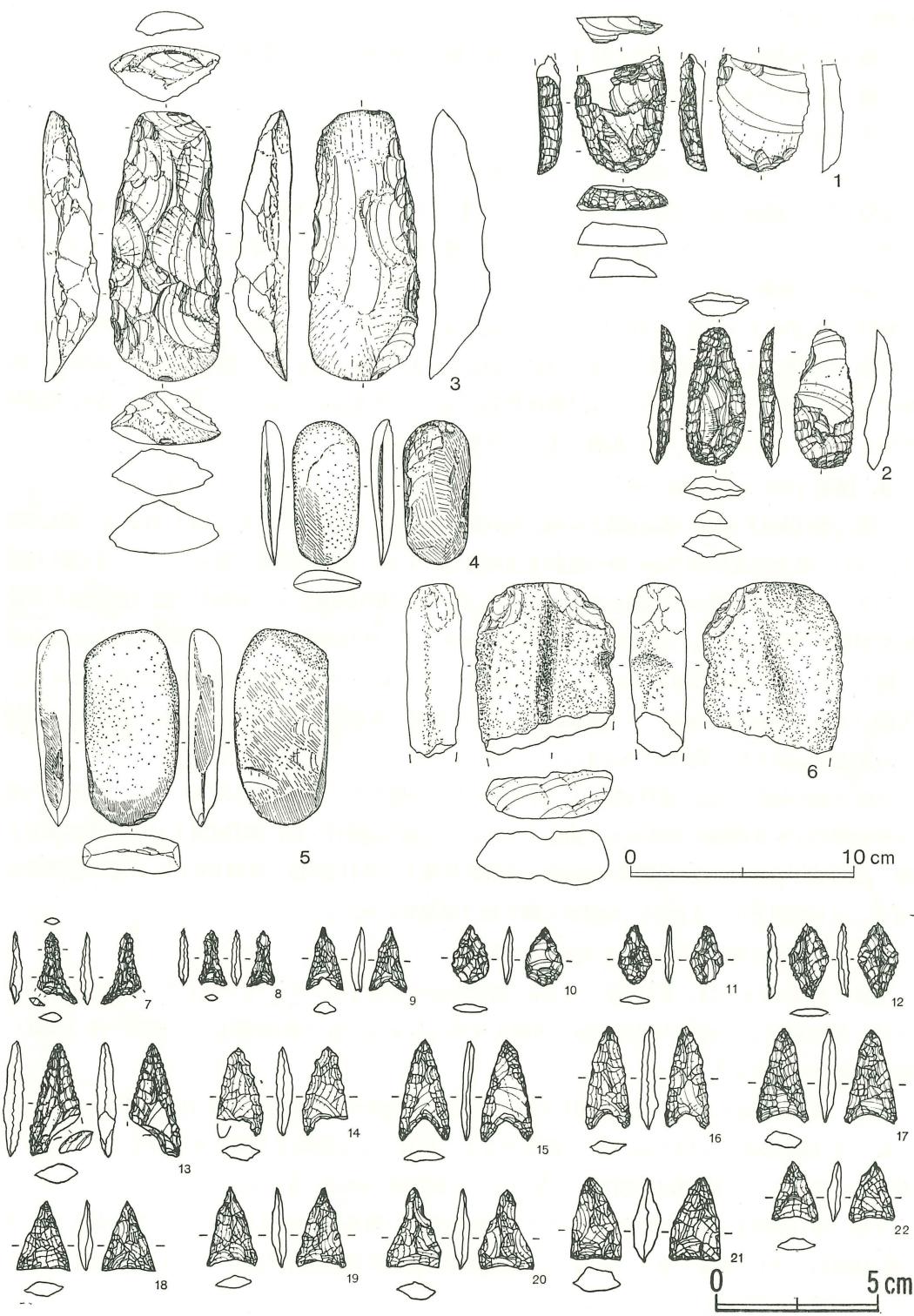
1類（第115図9～11、第116図2・6） 棒状の礫を素材としたものを一括した。a（第115図9～11、第116図6） 棒状の礫の長軸の両端を使用したもの。b（第116図2） 棒状の礫の側縁に敲打痕の見られるもの。

2類（第115図12・13・15・16、第117図3～5） 比較的小形の偏平礫を素材としたものを一括した。a（第115図12・13・16、第117図3～5） 敲打による剝離が片面に見られるもの。主に一端のみに見られる。b（第115図15） 敲打による剝離痕が両面に見られるもの。

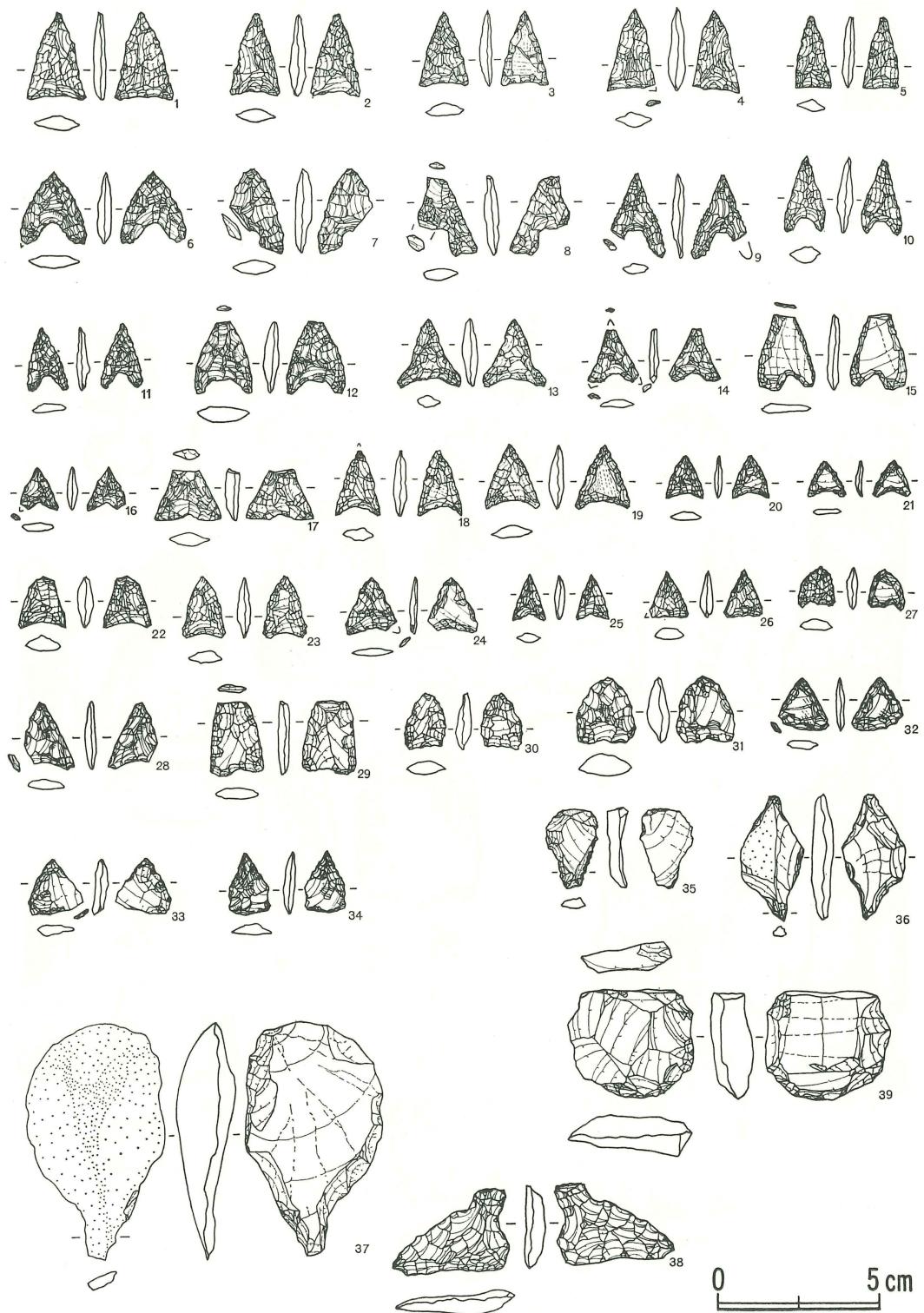
3類（第115図14、第117図1・7～9） 比較的大形の偏平礫を素材としたものを一括した。a（第115図14、第117図8・9） 敲打による剝離痕が片面に見られるもの。b（第117図7） 敲打による剝離が両面に見られるもの。

F. 搔・削器（第117図10～13、第118図、第119図1～9）

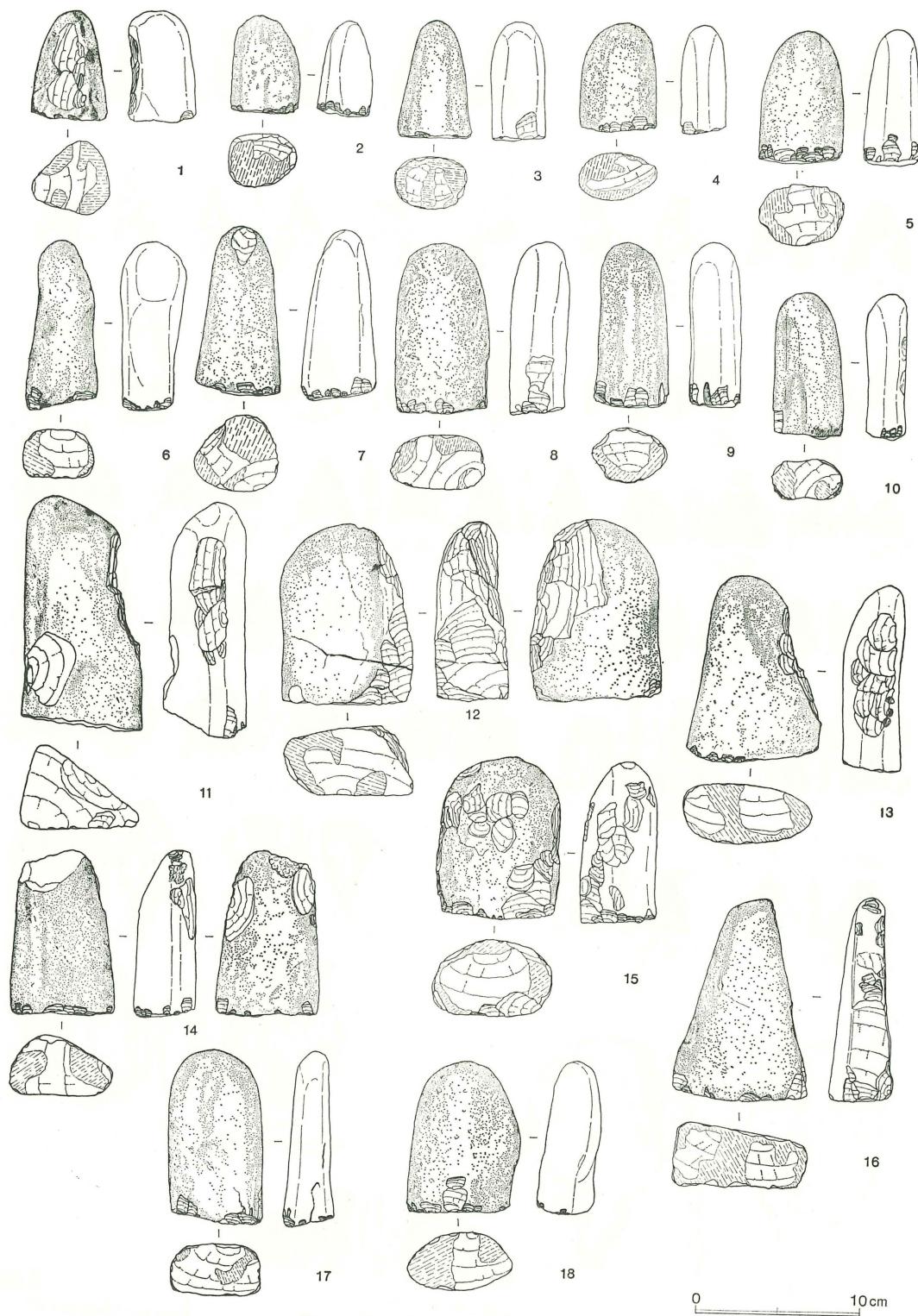
1類（第117図10～13、第118図1） 比較的厚手で両側縁に刃部を設けているものを一括した。



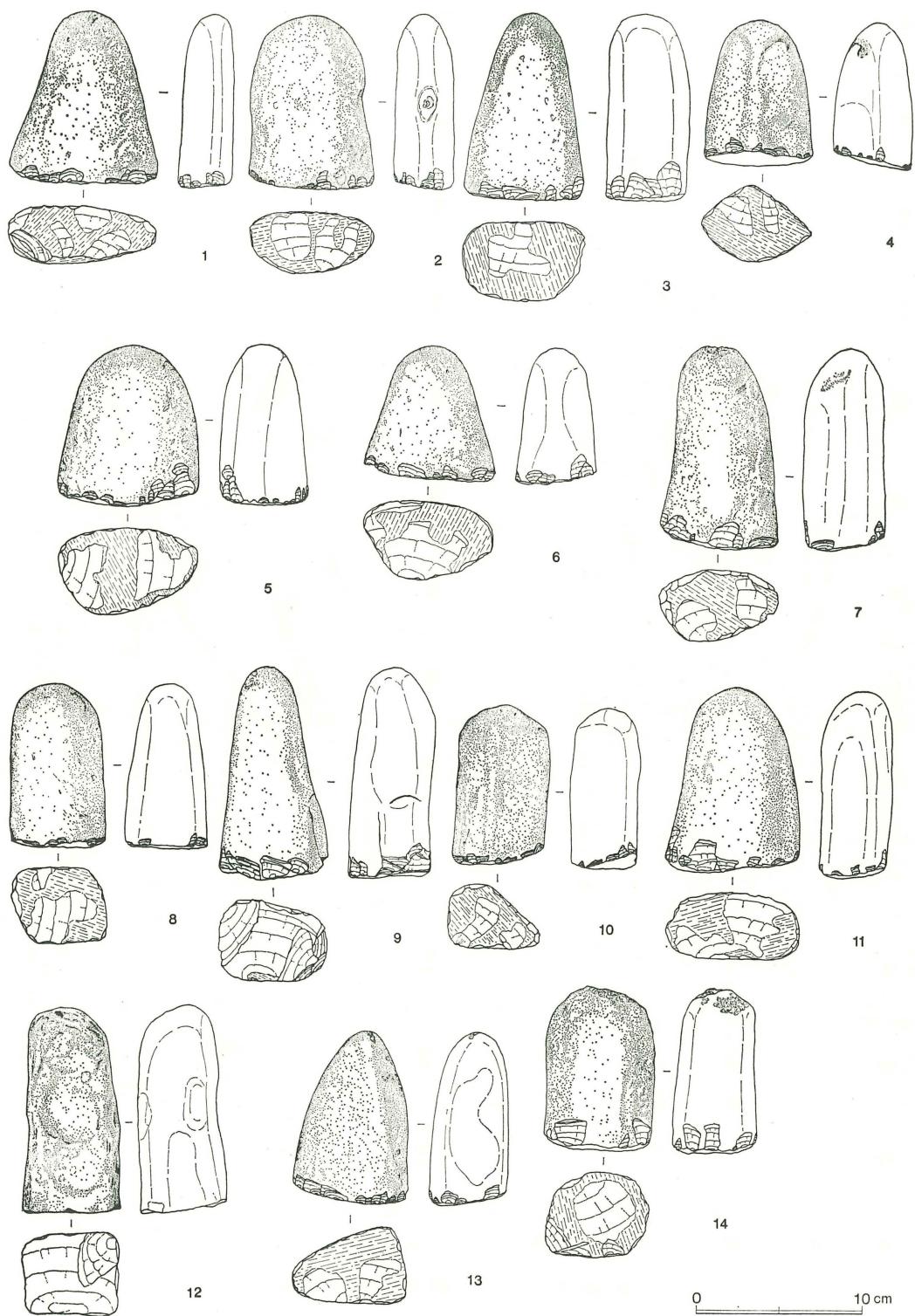
第101図 グリッド出土石器(1)



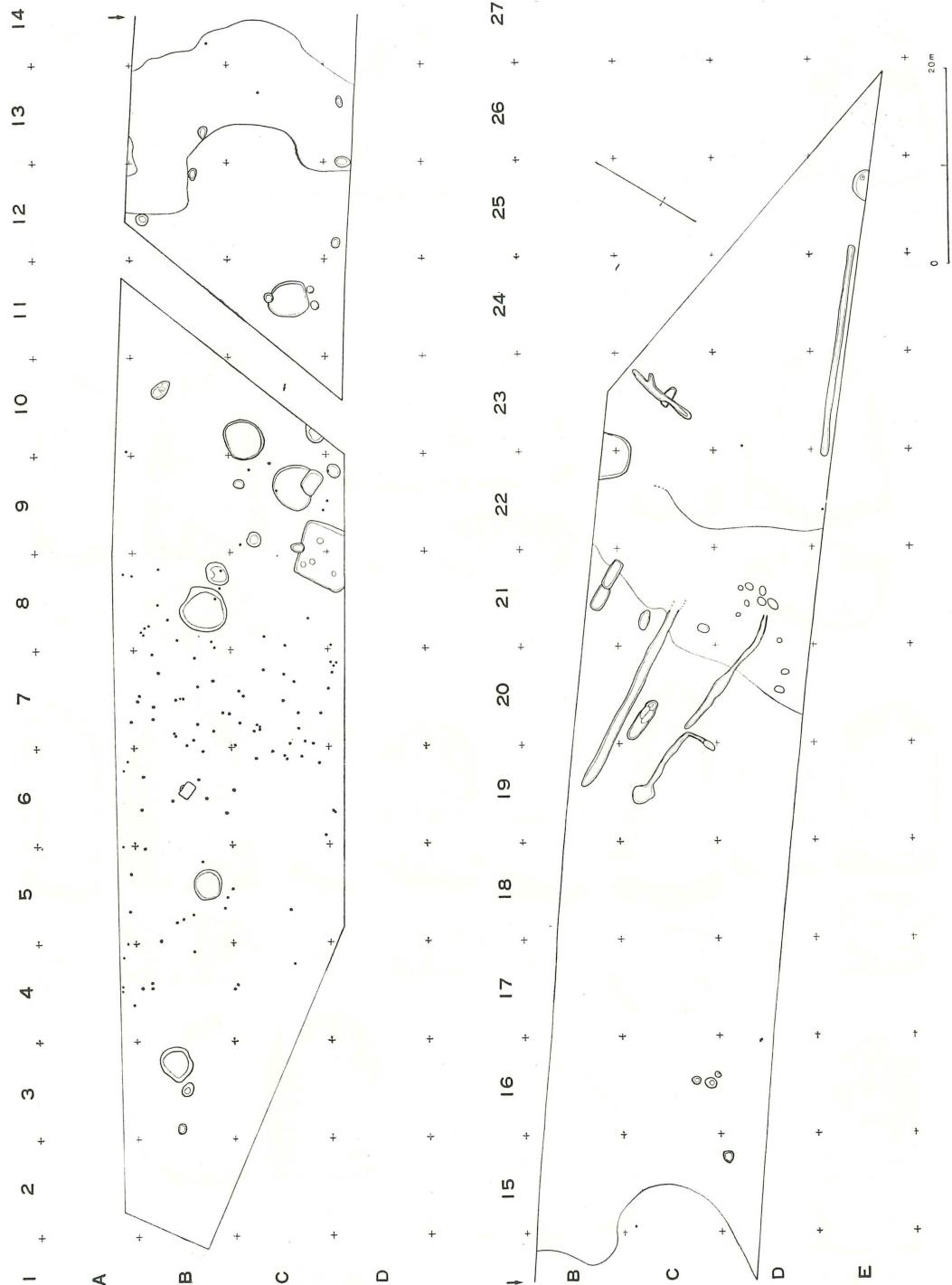
第102図 グリッド出土石器(2)



第103図 グリッド出土石器(3)



第104図 グリッド出土石器(4)



第105図 スタンプ形石器平面分布図

片面に大きく自然面を残すものが多く、打製石斧に形状が似ている。

2類（第118図2～4） 形状は不安形で片側縁に刃部を設けているものを一括した。片面に大きく自然面を残す。2・4は片刃、3は両刃加工である。

3類（第118図5～9） 下部が尖るような形状を呈するものを一括した。

4類（第118図10・11・13・14） 不定形で4辺の内3辺に刃部加工を施したものを一括した。

5類（第118図12・15） 裏面に大きく自然面を残し、刃部加工は裏面から正面方向に行われている。所謂亀甲状の搔器である。

6類（第119図1～3） 自然面の残りは小さく、長軸の一辺に刃部加工を施したもの。

7類（第119図4～8） 比較的小形の剝片を素材にしたものを一括した。形状は不定形である。

8類（第119図9） 剥片を素材にし下縁を刃部としている。所謂搔器である。

G. 磨石類（第119図10～23、第120図1～5）

楕円形の偏平礫を素材とし、正面にくぼみを有するもの。側縁に敲打痕の見られるものがある。

H. 石皿（第120図6～9、第121図）

皿部を明確に作り出したものではなく、偏平の大形の礫を使用している。

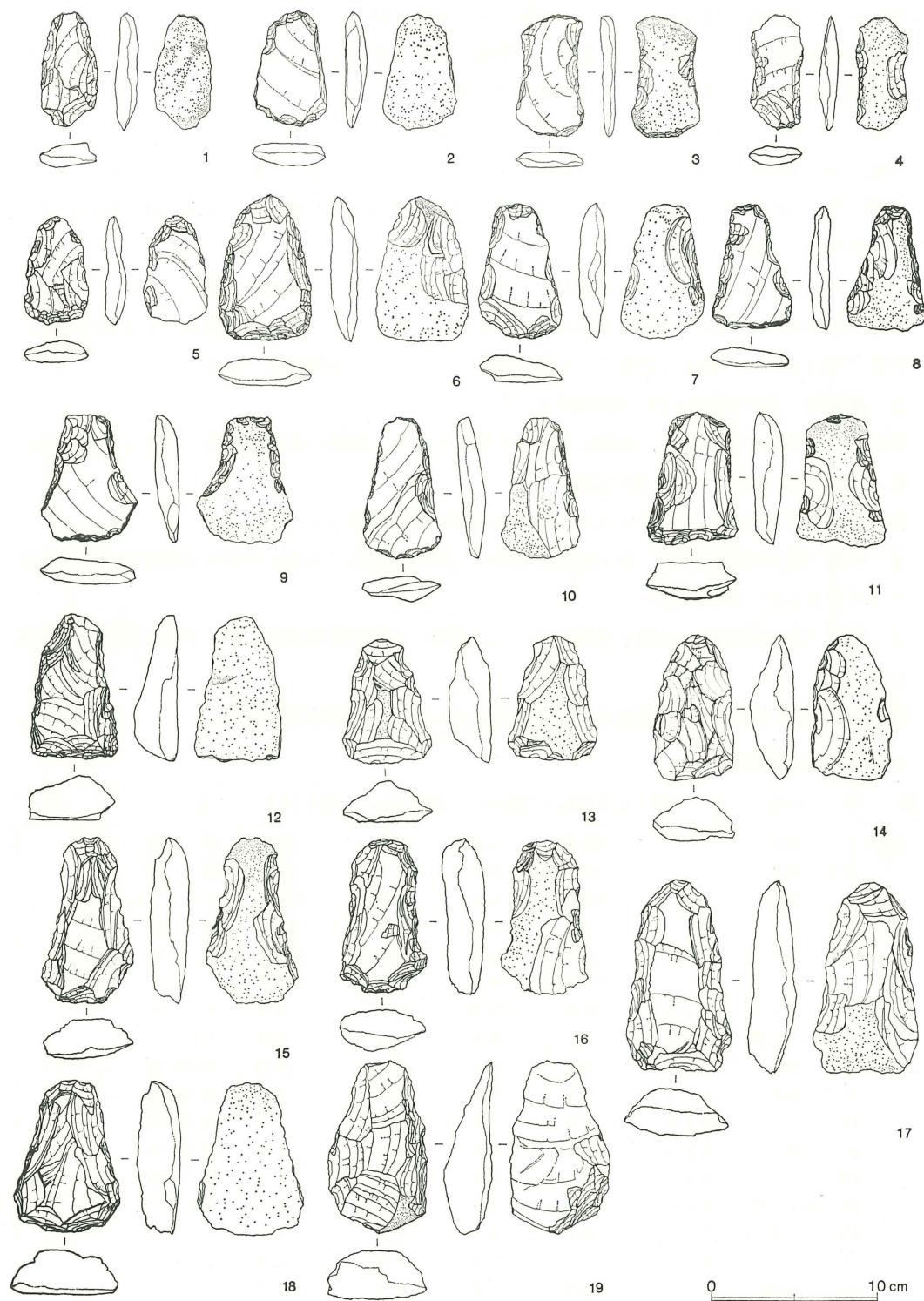
I. 石錐（第102図35～37） 35・36は小形品で、37は大形品である。いずれも剝離の一端を加工したものであるが、錐部は短い。

J. 搔器（第102図39） 上部を欠損している。裏面に主要剝離面が見られ、下縁に刃部加工を施している。

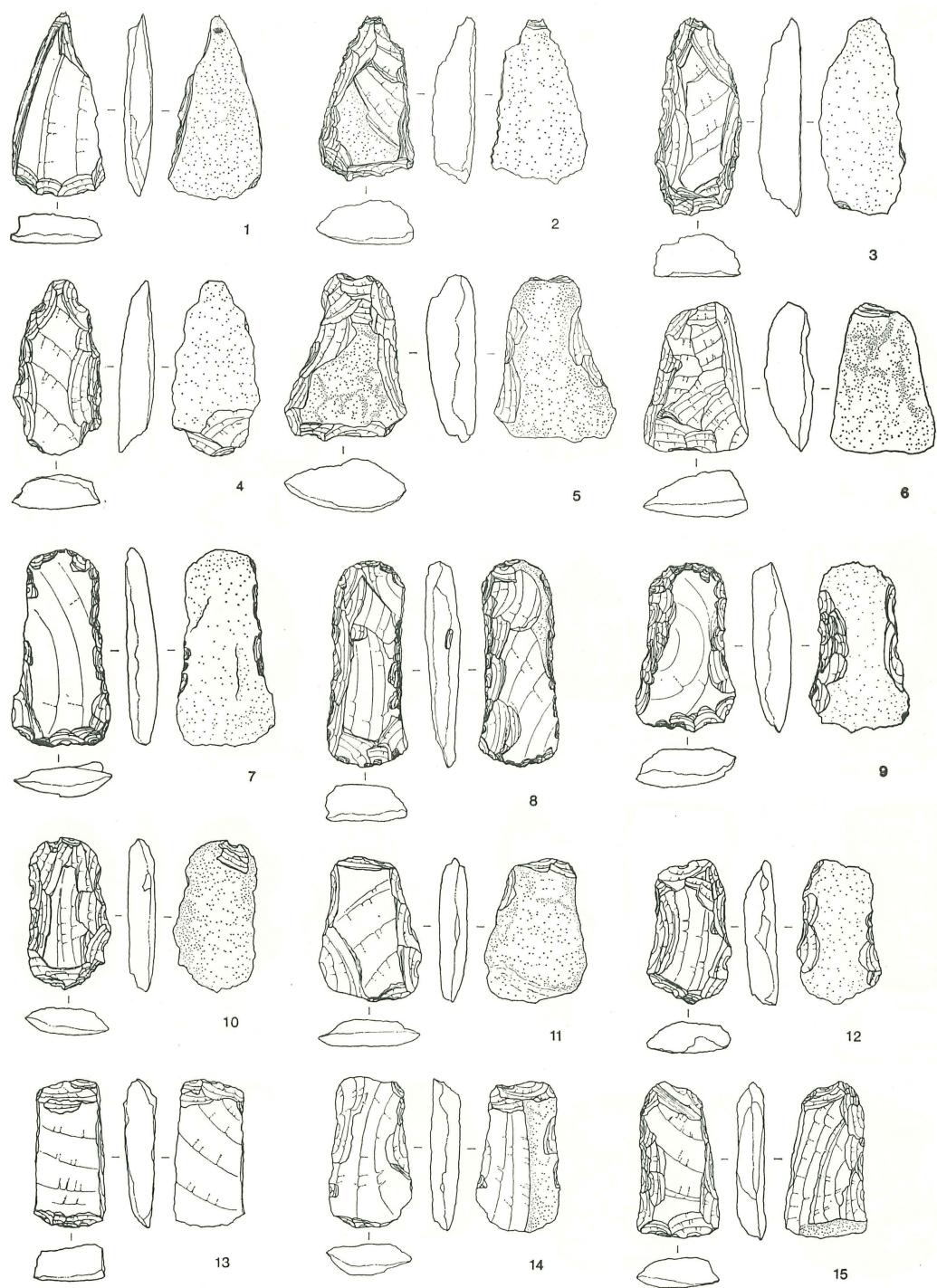
K. 石匙（第102図38） 両面加工で刃部は直線状になる。横型石匙である。

グリッド出土観察表

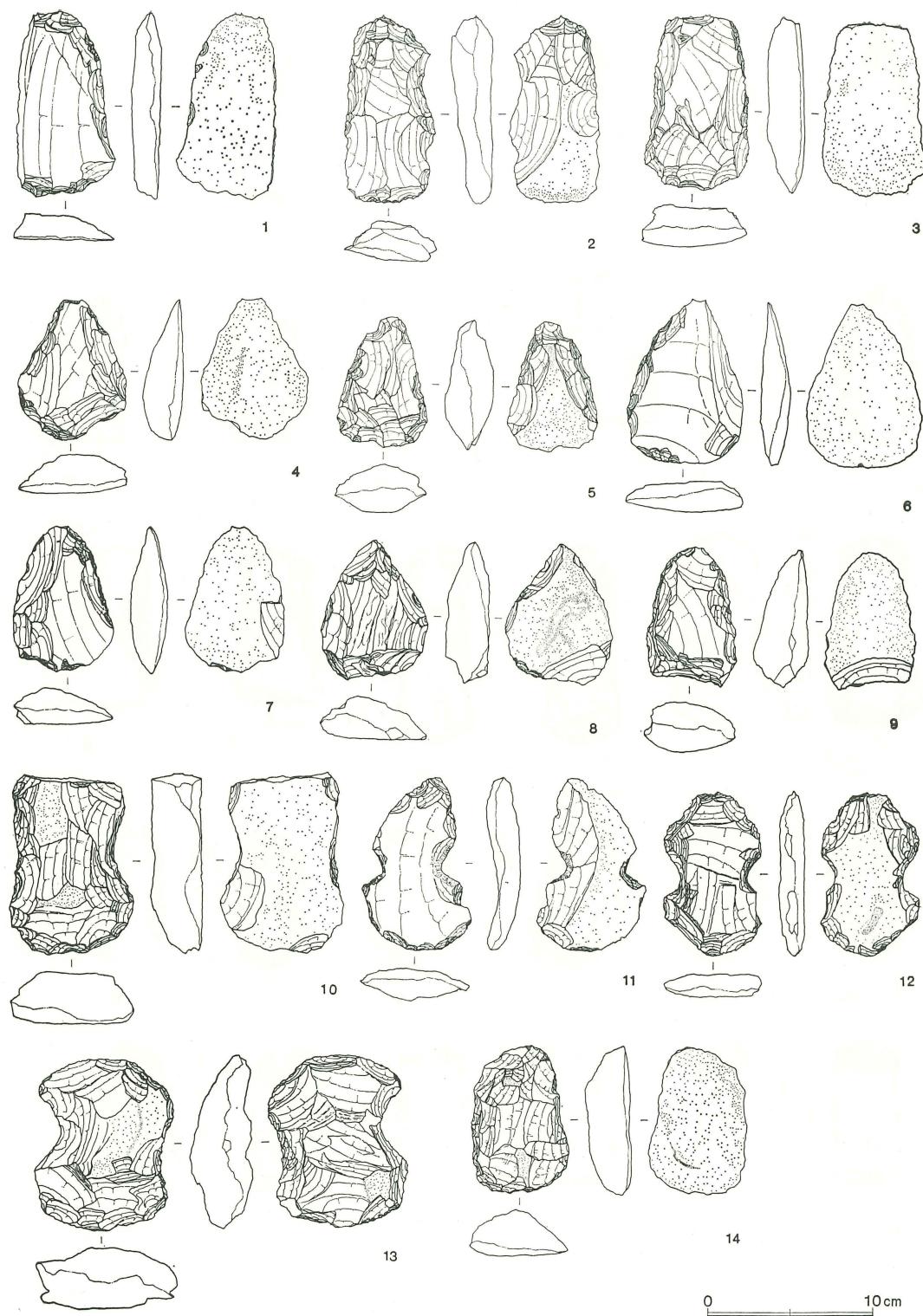
番号	Grid	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石	質
101—1	D 7		(5.4)	4.2	1.2	26.8	頁岩	
2	B 7		6.3	2.7	1.2	14.9	頁岩	
3	B 10		12.2	5.0	2.0	157.3	ホルンフェルス	
4	B 7		6.5	3.0	1.1	27.1	砂岩	
5	B 4		8.9	4.3	1.6	104.3	砂岩	
6	B 5		(7.8)	6.5	2.6	150.6		
7	B 3	A 1 a	2.2	(1.2)	0.6	0.4	チャート	
8	B 3.2住	A 1 a	1.7	0.9	0.3	0.3	チャート	
9	B 7	A 1 a	1.9	1.1	0.4	0.9	安山岩	
10	B 6	A 1 b	1.8	1.1	0.3	0.4	黒曜石	
11		A 1 b	1.8	1.0	0.3	0.4	黒曜石	
12	B 8	A 1 b	2.3	1.3	0.3	0.5	黒曜石	
13		A 1 c	3.5	(1.6)	0.6	1.7	頁岩	
14	B 3.2住	A 1 c	2.7	1.4	0.5	1.4	チャート	
15	B 9	A 1 c	3.1	1.6	0.4	1.2	チャート	
16	C 4	A 1 c	3.2	1.4	0.6	1.8	チャート	
17	D 20	A 1 c	2.9	1.6	0.5	1.7	チャート	
18	II区	A 1 d	2.2	1.6	0.5	1.0	チャート	
19	C 5	A 1 d	2.5	1.6	0.5	0.9	安山岩	
20	C 5	A 1 d	2.5	1.7	0.5	1.3	安山岩	



第106図 グリッド出土石器(5)



第107図 グリッド出土石器(6)

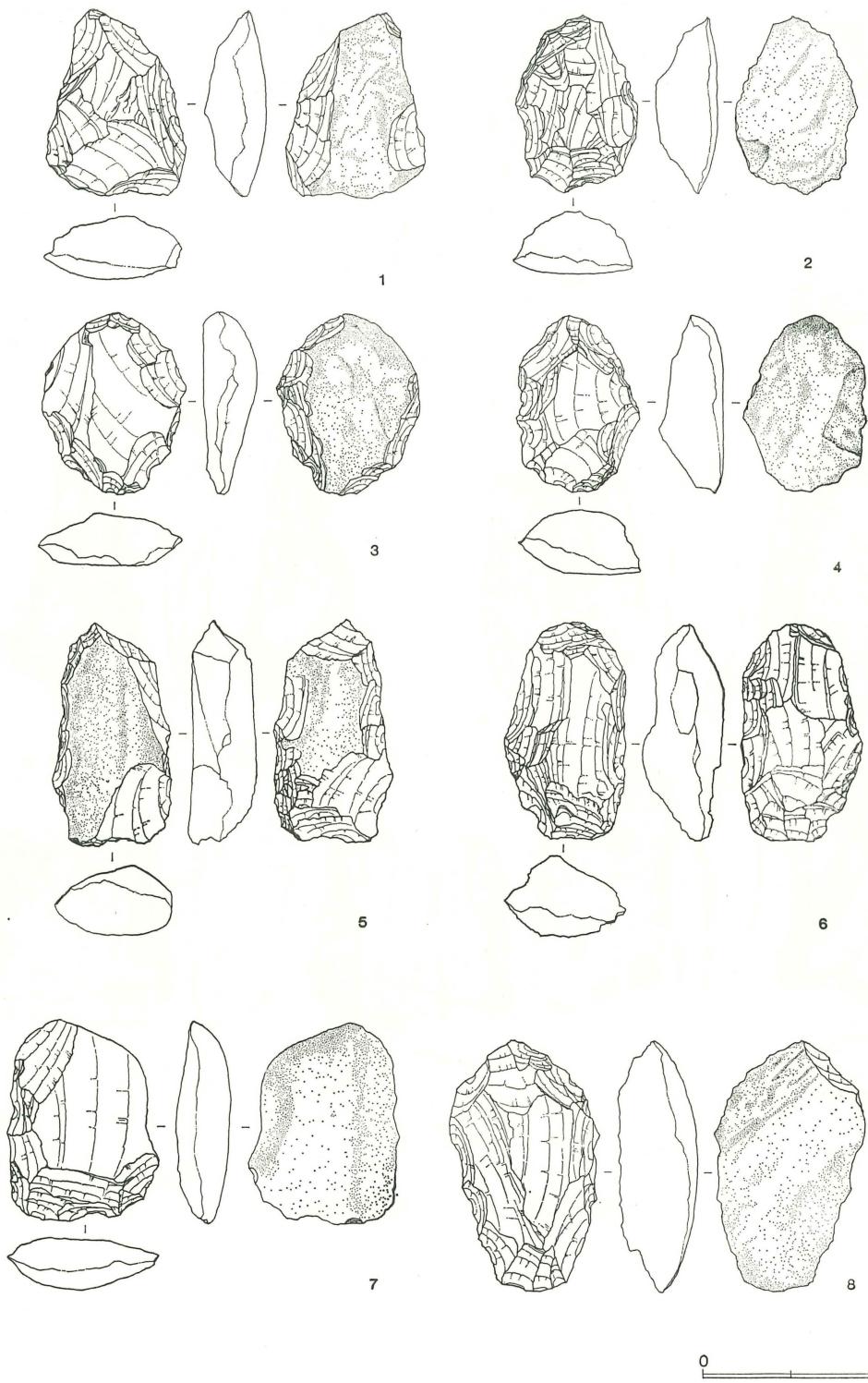


第108図 グリッド出土石器(7)

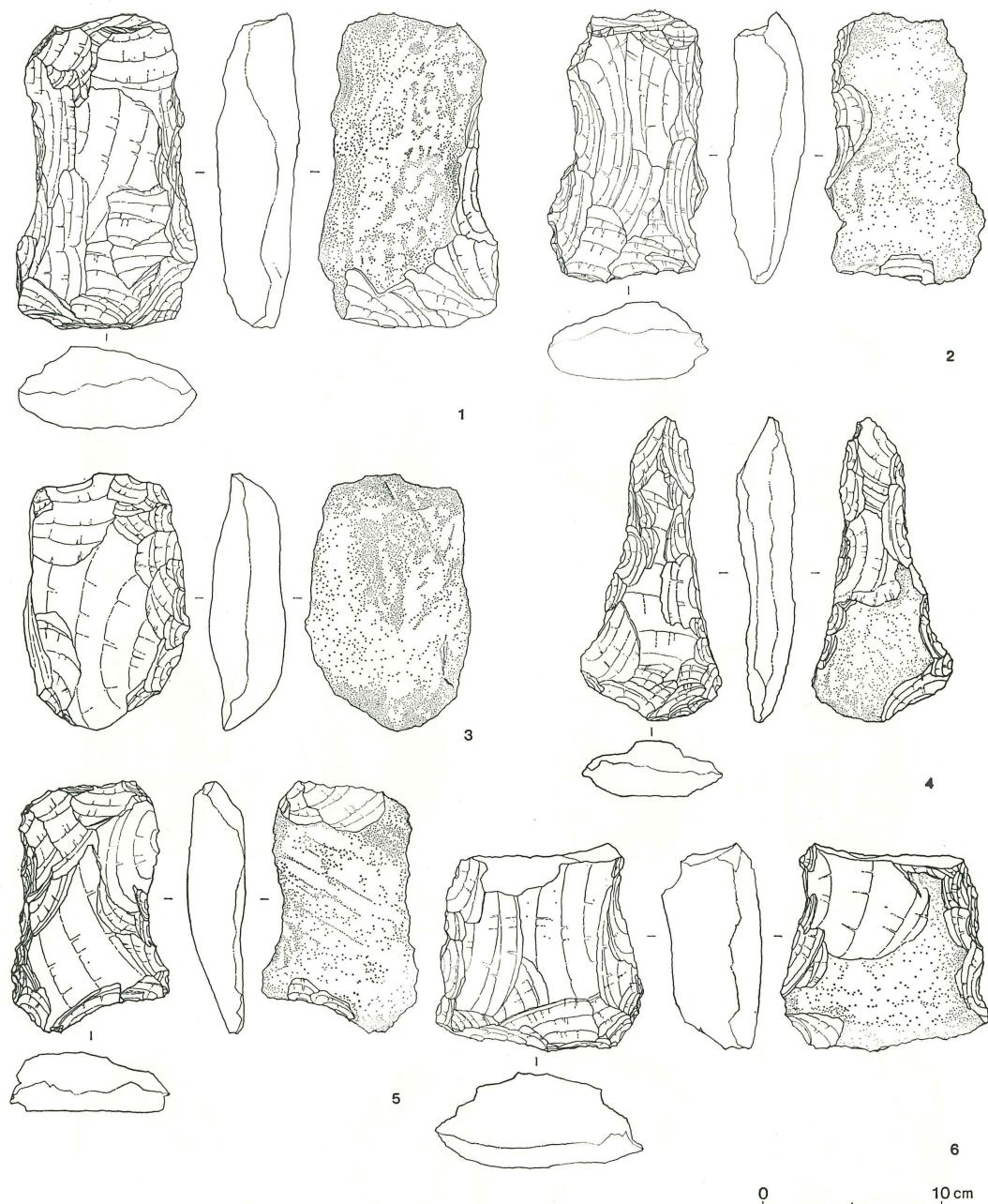
番号	Grid	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
101—21	B 7	A 1 d	2.5	1.6	0.9	2.2	安山岩
22	B 7	A 1 d	1.9	1.4	0.4	1.0	安山岩
102—1	B 7	A 1 d	1.7	1.8	0.5	1.7	安山岩
2	B 7	A 1 d	2.5	1.6	0.6	1.3	安山岩
3	D 7	A 1 d	2.2	1.5	0.4	1.2	頁岩
4	B 7	A 1 d	2.5	1.5	0.5	1.3	安山岩
5	B 5	A 1 d	2.2	1.1	0.4	0.8	チャート
6	B 7	A 2 a	2.1	2.0	0.5	1.1	黒曜石
7	B3—2住	A 2 a	2.6	(1.6)	0.6	1.3	チャート
8		A 2 a	(2.4)	(1.9)	0.5	1.21	チャート
9	C 21	A 2 a	2.5	(1.7)	0.4	0.7	チャート
10	B 8	A 2 a	2.3	1.3	0.4	0.9	チャート
11	D 25	A 2 a	1.9	1.3	0.4	0.4	黒曜石
12	C 9	A 2 a	(2.1)	1.8	0.5	1.3	黒曜石
13		A 2 a	2.1	2.0	0.5	1.0	チャート
14	B 4	A 2 a	1.7	1.6	0.3	0.4	チャート
15		A 2 a	2.3	1.8	0.4	1.2	チャート
16	B 5	A 2 b	1.3	(1.2)	0.3	0.3	チャート
17		A 2 b	(1.6)	2.1	0.5	1.1	チャート
18	B 7	A 2 b	2.0	1.4	0.4	0.8	チャート
19	A 5	A 2 b	1.9	1.7	0.5	0.9	チャート
20	B 5	A 2 b	1.3	1.1	0.3	0.3	チャート
21	B 5	A 2 b	1.1	1.2	0.3	0.2	チャート
22	B 6	A 2 b	(1.5)	1.5	0.5	0.8	頁岩
23	B 7	A 2 b	1.8	1.4	0.5	0.8	チャート
24	B 5	A 2 b	1.8	1.6	0.3	0.4	チャート
25	C 4	A 2 b	1.9	1.0	0.4	0.3	チャート
26	B 5	A 2 b	1.4	1.2	0.4	0.5	チャート
27	B 4	A 2 b	1.3	1.1	0.4	0.4	チャート
28		A 2 b	2.1	(1.5)	0.4	1.0	チャート
29	B 3	A 2 b	(2.2)	1.6	0.4	1.5	チャート
30	C 8	A 2 b	1.7	1.3	0.5	0.8	チャート
31	C 7	A 2 b	2.0	1.8	0.7	2.1	チャート
32		A 2 b	1.6	1.6	0.3	0.5	黒曜石
33		A 2 b	1.7	1.7	0.5	0.8	チャート
34	B 5	A 2 b	1.9	1.3	0.4	0.5	黒曜石
35	B 7	I	2.5	1.6	0.7	1.65	チャート
36	B 14	I	3.8	2.0	0.7	3.8	安山岩
37	B 7	I	7.2	4.3	1.9	47.9	
38	B 4	K	2.5	3.6	0.6	19.0	チャート
39	B 5	J	3.2	3.9	1.4	4.6	チャート
103—1	A 4	B 1	7.0	4.7	4.2	177.7	砂岩
2	B 8	B 1	5.9	4.3	3.3	124.7	
3	C 7	B 1	7.4	4.6	3.4	155.3	
4	B 8	B 1	6.8	4.9	2.9	142.2	花崗岩
5	C 7	B 1	8.5	5.2	3.5	240.4	安山岩
6	B 5	B 2	10.4	4.5	4.1	225.9	砂岩
7	C 7	B 2	10.7	5.3	4.7	299.8	砂岩



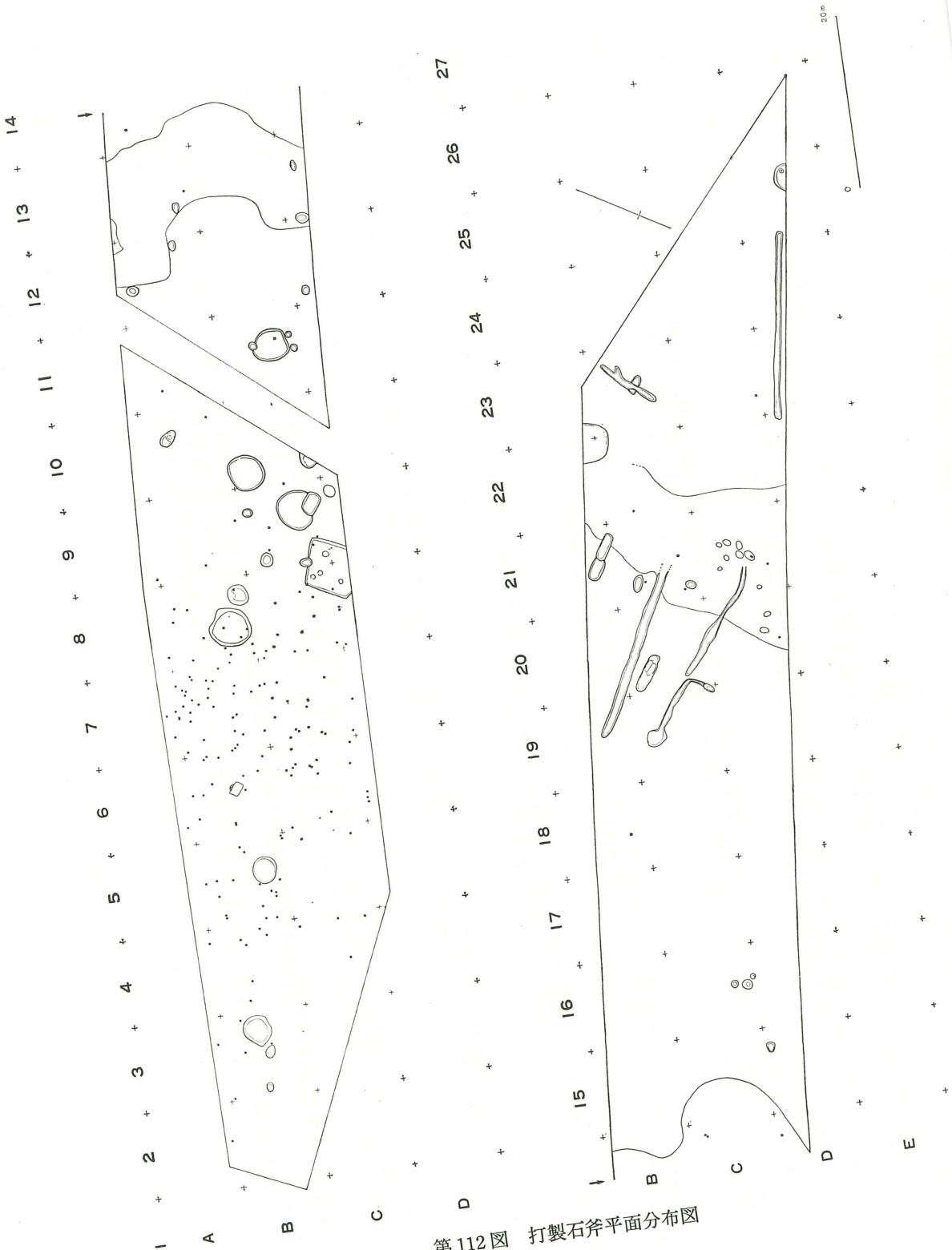
第109図 グリッド出土石器(8)



第110図 グリッド出土石器(9)



第111図 グリッド出土石器(10)



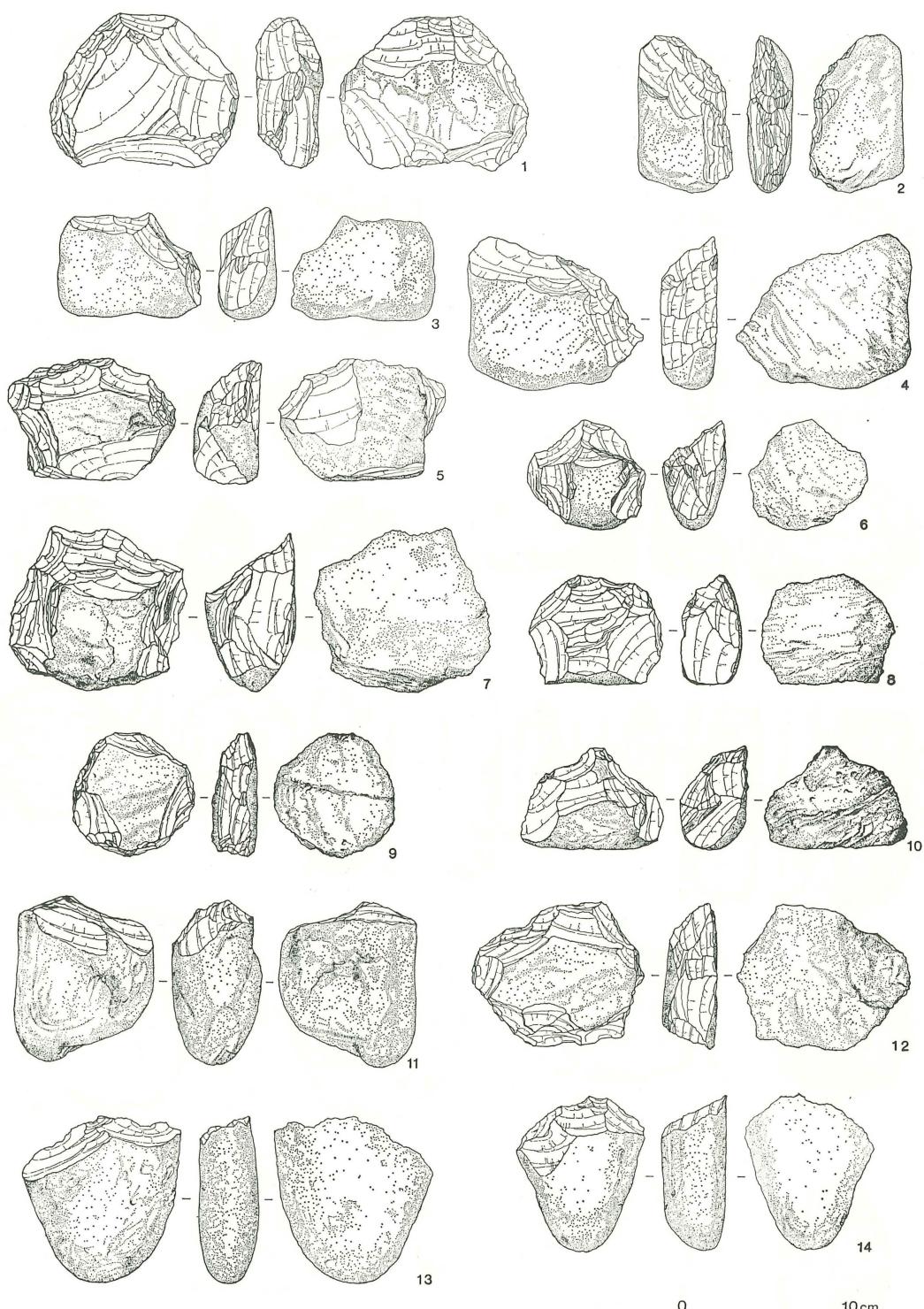
第112図 打製石斧平面分布図

番号	Grid	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
103—8	C 8	B 2	10.9	5.3	3.5	371.1	花崗岩
9	B 4	B 2	10.2	4.7	3.4	207.4	砂岩
10	B 8	B 2	9.0	4.5	2.7	133.4	砂岩
11	C 6	B 3	14.5	7.5	5.2	711.2	砂岩
12	E 22	B 3	11.1	8.1	4.6	592.1	砂岩
13	A 6	B 3	11.5	8.3	3.7	524.6	花崗岩
14	C 9	B 3	10.3	6.4	3.8	323.8	砂岩
15	C 13	B 3	10.0	7.7	4.7	538.5	安山岩
16	B 7	B 4	12.6	8.9	3.9	432.1	砂岩
17	B 6	B 4	10.9	5.8	3.2	310.4	砂岩
18	B 4	B 4	9.5	6.5	3.5	297.1	花崗岩
104—1	B 5	B 4	10.6	9.0	3.5	432.0	花崗岩
2	C 8	B 4	10.7	7.6	3.7	478.2	花崗岩
3	C 14	B 4	11.4	7.5	4.9	631.3	花崗岩
4	C 7	B 5 a	8.9	6.7	4.8	337.7	花崗岩
5	C 7	B 5 a	9.8	8.5	5.4	620.3	花崗岩
6	C 6	B 5 a	8.4	7.9	4.9	370.3	花崗岩
7	B 9	B 5 a	12.4	7.3	4.9	670.2	花崗岩
8	B 7	B 5 a	10.0	5.8	5.0	457.2	花崗岩
9	B 5	B 5 b	12.9	6.7	5.0	564.9	砂岩
10	C 8	B 5 b	9.8	5.7	4.0	342.5	砂岩
11	B 8	B 5 b	11.4	8.2	4.1	602.5	砂岩
12	B 6	B 5 b	12.6	6.0	5.3	704.2	頁岩
13	B 6	B 5 b	10.7	7.0	4.8	420.0	砂岩
14	B 3	B 5 b	10.0	6.6	5.2	577.6	砂岩
106—1	B 5	C 1	7.1	3.5	1.5	36.3	頁岩
2	B 4	C 1	7.1	4.5	1.3	49.0	頁岩
3	B 8	C 1	7.4	4.1	0.8	30.1	砂岩
4	A 8	C 1	7.0	3.2	1.1	26.3	砂岩
5	C 7	C 1	6.6	3.9	1.3	31.9	砂岩
6	C 7	C 2 a	8.8	5.7	1.8	94.5	頁岩
7	B 7	C 2 a	8.2	5.0	1.7	67.2	頁岩
8	C 7	C 2 a	7.5	4.8	1.3	46.4	頁岩
9	B 7	C 2 a	7.8	5.8	1.5	70.7	砂岩
10	C 8	C 2 a	8.6	4.8	1.6	55.4	頁岩
11	C 6	C 2 a	8.1	5.5	1.8	99.5	頁岩
12	B 5	C 2 a	8.9	5.3	2.7	126.9	頁岩
13	B 8	C 2 b	7.7	5.5	2.2	91.3	頁岩
14	B 6	C 2 b	8.8	5.0	2.7	120.9	頁岩
15	C 7	C 2 c	10.1	5.5	2.5	132.3	頁岩
16	B 7	C 2 c	9.5	5.3	2.4	133.7	頁岩
17	A 5	C 2 c	11.7	6.4	2.8	230.1	頁岩
18	B 7	C 2 c	9.3	6.6	2.7	185.0	頁岩
19	B 11	C 2 c	10.6	6.1	3.0	178.6	頁岩
107—1	A 7	C 2 d	10.7	5.4	1.8	101.0	頁岩
2	A 2	C 2 d	9.9	5.7	2.6	152.6	頁岩
3	B 7	C 2 d	11.7	5.1	2.6	158.7	頁岩
4	B 6	C 2 d	10.3	5.2	2.2	121.8	頁岩

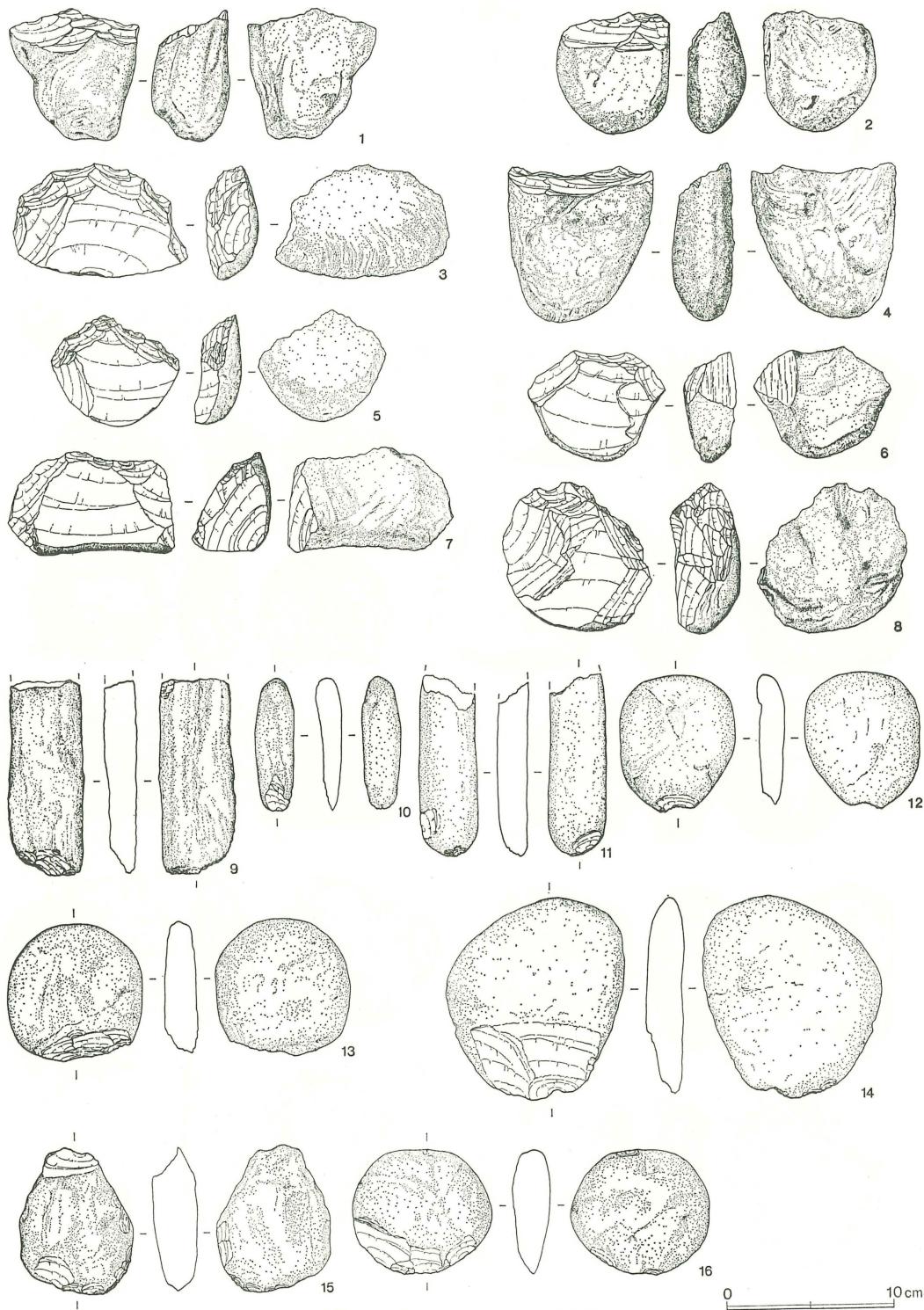
番号	Grid	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石	質
107—5	C 6	C 2 e	9.6	7.2	3.0	208.4	頁	岩
	B 6	C 2 e	8.8	6.2	3.0	146.5	頁	岩
	B 7	C 3 b	11.6	5.8	2.0	126.7	頁	岩
	C 5	C 3 b	12.1	4.8	2.2	142.0	砂	岩
	C 6	C 3 b	10.0	6.0	2.3	159.4	頁	岩
	C 6	C 3 a	9.0	5.0	1.7	86.5	砂	岩
	C 7	C 3 a	8.5	6.0	1.7	103.2	頁	岩
	B 7	C 3 a	8.5	4.9	2.0	88.4	砂	岩
	B 8	C 3 a	8.7	4.2	1.8	102.9	頁	岩
	C 6	C 3 a	9.9	5.0	1.8	86.6	砂	岩
	C 6	C 3 a	9.3	4.9	1.7	96.4	頁	岩
	B 2	C 3 b	10.5	6.1	1.9	149.0	頁	岩
	C 7	C 3 b	10.5	5.7	2.2	162.3	頁	岩
	B 7	C 3 b	10.8	6.5	2.6	132.0	砂	岩
108—1	B 8	C 4	8.6	6.7	2.5	127.6	ホルンフェルス	
	B 3	C 4	8.0	5.6	3.0	111.9	頁	岩
	C 9	C 4	10.0	7.2	1.8	130.7	頁	岩
	B 8	C 4	9.0	6.1	2.3	115.8	砂	岩
	B 6	C 4	8.7	6.6	2.2	149.5	砂	岩
	C 6	C 4	8.5	5.6	3.4	156.7	ホルンフェルス	
	A 4	C 5	11.1	7.6	3.2	363.9	頁	岩
	B 4	C 5	10.5	6.7	2.0	112.2	砂	岩
	B 8	C 5	10.1	6.0	1.6	107.3	砂	岩
	D 8	C 5	10.7	8.7	3.9	346.6	砂	岩
	C 7	C 6	9.1	6.1	2.8	171.8	頁	岩
109—1	A 6	C 6	10.9	7.2	3.1	257.2	頁	岩
	B 7	C 6	10.3	6.0	2.5	180.0	頁	岩
	C 6	C 6	9.4	6.2	2.6	163.6	頁	岩
	B 11	C 7	9.5	5.1	2.9	146.8	頁	岩
	B 3	C 7	10.6	6.4	3.7	236.7	頁	岩
	B 7	C 7	10.1	5.6	3.2	225.5	頁	岩
	C 7	C 7	9.0	5.9	3.7	191.1	頁	岩
	B 13	C 8	10.9	5.7	1.5	91.5	砂	岩
	C 10	C 8	12.9	6.2	1.6	113.6	砂	岩
	A 9	C 9	9.8	7.2	2.9	222.4	頁	岩
	C 2	C 8	10.7	5.2	1.6	79.6	頁	岩
	C 9	C 8	12.2	6.0	1.7	122.5	頁	岩
	C 8	C 8	(12.3)	6.7	2.7	184.0	頁	岩
110—1	C 9	C 8	9.1	5.7	1.8	84.4	砂	岩
	B 7	C 9	10.6	8.0	3.6	295.6	頁	岩
	B 9	C 9	10.1	6.9	3.6	252.0	頁	岩
	B 8	C 9	10.5	8.3	3.2	273.6	頁	岩
	D 7	C 9	10.3	7.2	3.7	270.4	頁	岩
	C 10	C 9	12.9	6.7	4.0	369.7	砂	岩
	C 8	C 10	12.4	6.9	4.8	370.6	頁	岩
	C 7	C 10	11.6	8.7	3.0	336.2	頁	岩
111—1	B 7	C 11a	14.5	8.7	4.7	608.7	頁	岩
	C 7	C 11b	17.8	10.1	4.7	1040.6	頁	岩



第113図 グリッド出土石器(1)



第114図 グリッド出土石器(1)



第115図 グリッド出土石器(1)

1 + + 2 + 3 + 4 + 5 + 6 + 7 + 8 + 9 + 10 + 11 + 12 + 13 + 14

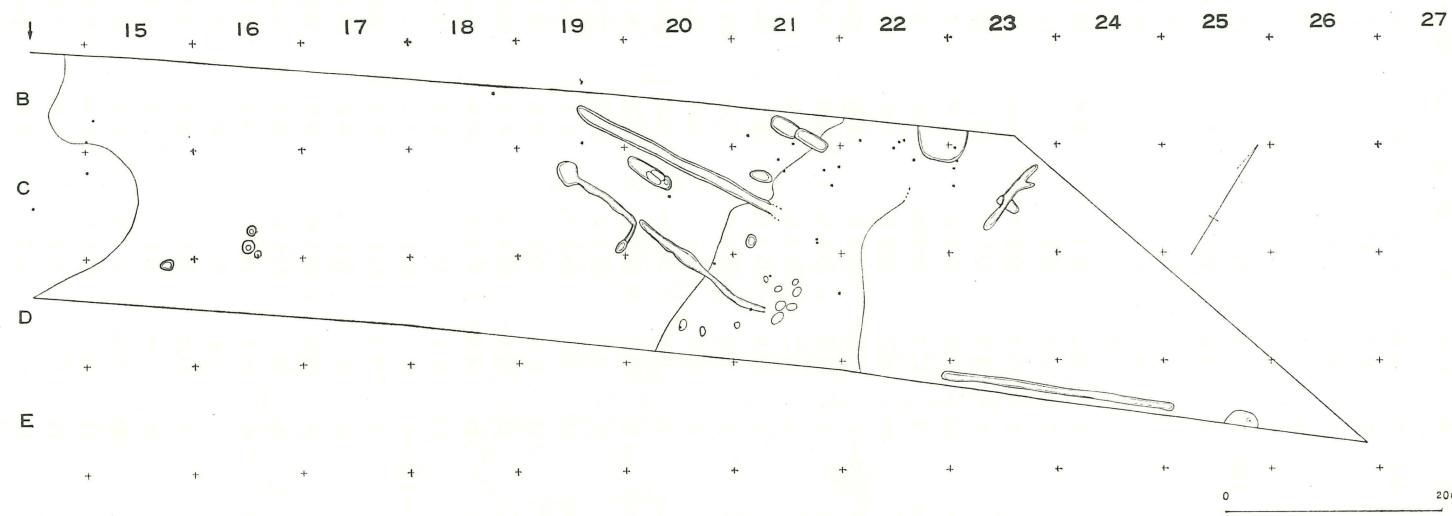
A

B

C

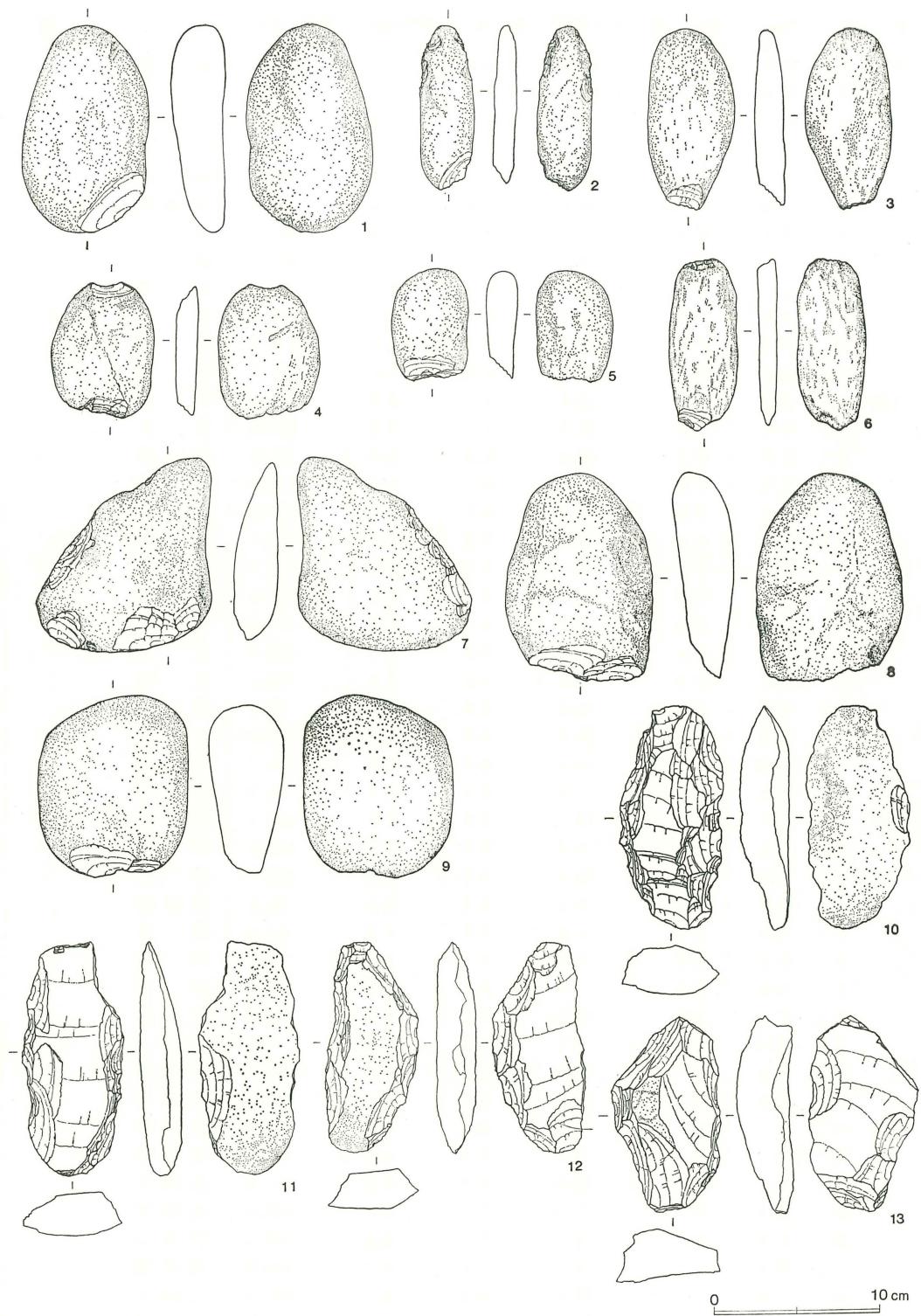
D

第116図 碓器平面分布図



番号	Grid	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石	質
111—2	C 10	C 11 b	15.4	9.1	4.4	651.0	砂	岩
3	B 7	C 11 b	14.6	9.5	4.4	668.0	砂	岩
4	D 21	C 11 b	17.3	8.0	3.2	350.4	頁	岩
5	B 7	C 11 b	14.3	9.0	3.9	443.3	頁	岩
6	C 7	C 11 b	(11.7)	11.7	5.4	923.4	砂	岩
113—1	C 4	D 1 a	6.7	11.5	3.6	298.0	頁	岩
2	A 8	D 1 a	8.4	9.9	3.5	354.3	砂	岩
3	C 8	D 1 a	6.3	11.7	4.1	389.7	頁	岩
4	B 5	D 1 a	5.2	10.8	3.3	191.4	頁	岩
5	C 7	D 2 a	9.0	12.7	5.2	721.6	頁	岩
6	B 5	D 1 a	7.9	10.4	2.5	241.2	頁	岩
7	C 7	D 2 a	7.8	10.8	3.7	334.5	頁	岩
8	C 8	D 2 a	10.6	10.0	2.9	413.4	頁	岩
9	B 6	D 2 a	8.3	12.9	5.4	560.0	頁	岩
10	B 6	D 2 a	7.0	7.2	4.3	213.0	頁	岩
11	C 7	D 2 b	8.6	9.1	3.6	377.3	頁	岩
12	C 7	D 2 b	9.7	11.4	3.5	468.6	頁	岩
114—1	C 11	D 2 b	9.3	11.2	4.0	503.4	頁	岩
2	C 8	D 1 b	9.3	5.6	2.6	206.7	粘	板
3	B 7	D 1 b	6.2	8.4	3.5	276.6	頁	岩
4	B 3	D 1 b	9.1	10.4	3.4	437.0	頁	岩
5	B 6	D 1 e	7.4	10.1	3.9	363.7	頁	岩
6	B 5	D 1 e	6.6	7.1	3.7	178.3	頁	岩
7	B 8	D 1 e	9.5	10.7	5.5	580.3	頁	岩
8	B 7	D 1 e	6.4	8.1	3.7	247.4	頁	岩
9	B 6	D 1 d	7.4	7.3	2.7	193.3	頁	岩
10	B 7	D 1 e	6.1	8.6	3.9	222.9	頁	岩
11	C 6	D 1 e	9.9	8.2	5.4	607.9	頁	岩
12	B 6	D 1 d	8.7	10.3	3.2	362.1	頁	岩
13	B 5	D 1 e	10.0	9.4	3.5	458.7	頁	岩
14	C 7	D 1 e	9.3	7.7	3.9	348.6	頁	岩
115—1	C 7	D 1 e	7.9	7.7	4.8	342.3	頁	岩
2	B 6	D 1 e	7.3	6.8	3.5	247.5	頁	岩
3	B 7	D 1 f	6.8	10.5	3.2	276.4	頁	岩
4	B 5	D 1 e	9.5	8.8	3.7	440.1	頁	岩
5	A 9	D 1 f	6.7	7.6	2.9	145.5	頁	岩
6	B 7	D 1 f	5.7	8.3	3.2	183.3	頁	岩
7	B 6	D 1 f	6.1	9.9	4.8	321.6	頁	岩
8	D 21	D 1 f	8.8	9.1	4.0	370.7	頁	岩
9	C 9	E 1 a	(11.7)	4.6	1.9	192.7		
10	A 6	E 1 a	8.0	2.4	1.6	36.2		
11	B 6	E 1 a	(10.9)	3.5	1.8	115.4		
12	C 7	E 2 a	8.3	7.0	1.6	137.5	砂	岩
13	C 7	E 2 a	8.2	8.2	1.9	215.1		
14	B 21	E 3 a	11.9	10.9	2.2	408.2	砂	岩
15	C 7	E 2 b	8.6	6.9	2.7	205.0	頁	岩
16	B 7	E 2 a	7.4	8.4	2.3	194.4		
177—1	C 7	E 3 a	12.6	7.8	3.3	453.3	花崗岩	

番号	Grid	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石	質
117—2	B 7	E 1 b	10.0	3.3	1.3	69.2	砂	岩
3	B 6	E 2 a	11.1	5.3	1.7	166.6		
4	C 7	E 2 a	8.2	6.4	1.3	95.0	砂	岩
5	A 6	E 2 a	6.7	4.8	1.9	91.9	砂	岩
6	A 7	E 1 a	10.0	4.2	1.1	98.0	緑泥片岩	
7	C 21	E 3 b	11.7	10.6	2.7	448.1	安山岩	
8	A 3	E 3 a	12.8	8.9	3.4	500.7	砂	岩
9	C 7	E 3 a	10.9	9.3	4.6	681.9	砂	岩
10	C 7	F 1	13.5	6.4	3.0	263.9	頁	岩
11	B 5	F 1	14.1	6.2	2.5	222.0	頁	岩
12	D 14	F 1	12.7	5.9	2.4	244.0	頁	岩
13	A 6	F 1	11.8	6.6	3.2	265.8	頁	岩
118—1	C 8	F 1	11.0	4.5	2.7	132.6	頁	岩
2	C 8	F 2	12.5	5.2	2.8	214.8	頁	岩
3	C 7	F 2	12.4	6.3	2.6	187.9	頁	岩
4	C 9	F 2	10.4	6.0	1.9	125.9	頁	岩
5	B 5	F 3	8.1	6.1	2.1	117.6	頁	岩
6	B 22	F 3	9.7	6.9	1.9	134.1	頁	岩
7	C 6	F 3	8.7	5.4	2.9	138.2	頁	岩
8	A 7	F 3	9.7	6.2	2.7	152.2	頁	岩
9	D 8	F 3	7.8	6.3	3.7	171.6	頁	岩
10	B 7	F 4	11.8	7.3	2.5	242.4	頁	岩
11	B 5	F 4	9.4	7.1	1.6	108.1	頁	岩
12	C 6	F 5	6.8	5.6	1.4	63.3	頁	岩
13	C 6	F 4	10.2	6.8	1.8	130.6	珪	岩
14	C 22	F 4	10.5	6.3	2.4	174.7	珪	岩
15	A 3	F 5	7.7	6.1	1.1	69.3	珪	岩
119—1	C 7	F 6	12.1	4.9	2.9	164.7	頁	岩
2	C 8	F 6	9.4	6.5	1.7	124.8	砂	岩
3	D 20	F 6	13.5	4.9	3.4	178.0	砂	岩
4	B 8	F 7	5.3	2.7	0.8	12.0	安山	岩
5	A 4	F 7	6.5	4.7	1.2	34.0	砂	岩
6	C 7	F 7	7.4	4.1	1.5	53.1	頁	岩
7	A 8	F 7	7.8	6.7	1.0	48.2	砂	岩
8	C 9	F 7	(8.3)	5.3	1.0	49.5	安山	岩
9	C 14	F 8	8.2	5.3	1.8	76.3	チャート	
10	A 6	G	8.8	8.7	3.8	427.4	花崗	岩
11	B 4	G	10.0	6.9	3.1	375.0	花崗	岩
12		G	9.2	8.7	4.6	475.3	花崗	岩
13	B 7	G	9.5	7.0	3.9	445.5	花崗	岩
14	B 4	G	10.5	7.9	3.5	467.5	花崗	岩
15	B 4	G	7.0	5.7	3.8	202.9	花崗	岩
16	B 2	G	11.5	7.1	3.3	398.5	花崗	岩
17	B 3	G	8.1	7.0	2.2	198.8	花崗	岩
18	C 6	G	10.8	8.4	3.7	482.4	花崗	岩
19	D 15	G	11.4	10.2	3.7	646.9	花崗	岩
20	D 21	G	5.4	7.7	2.2	53.6	安山	岩
21	C 6	G	8.4	6.8	3.9	300.0	花崗	岩



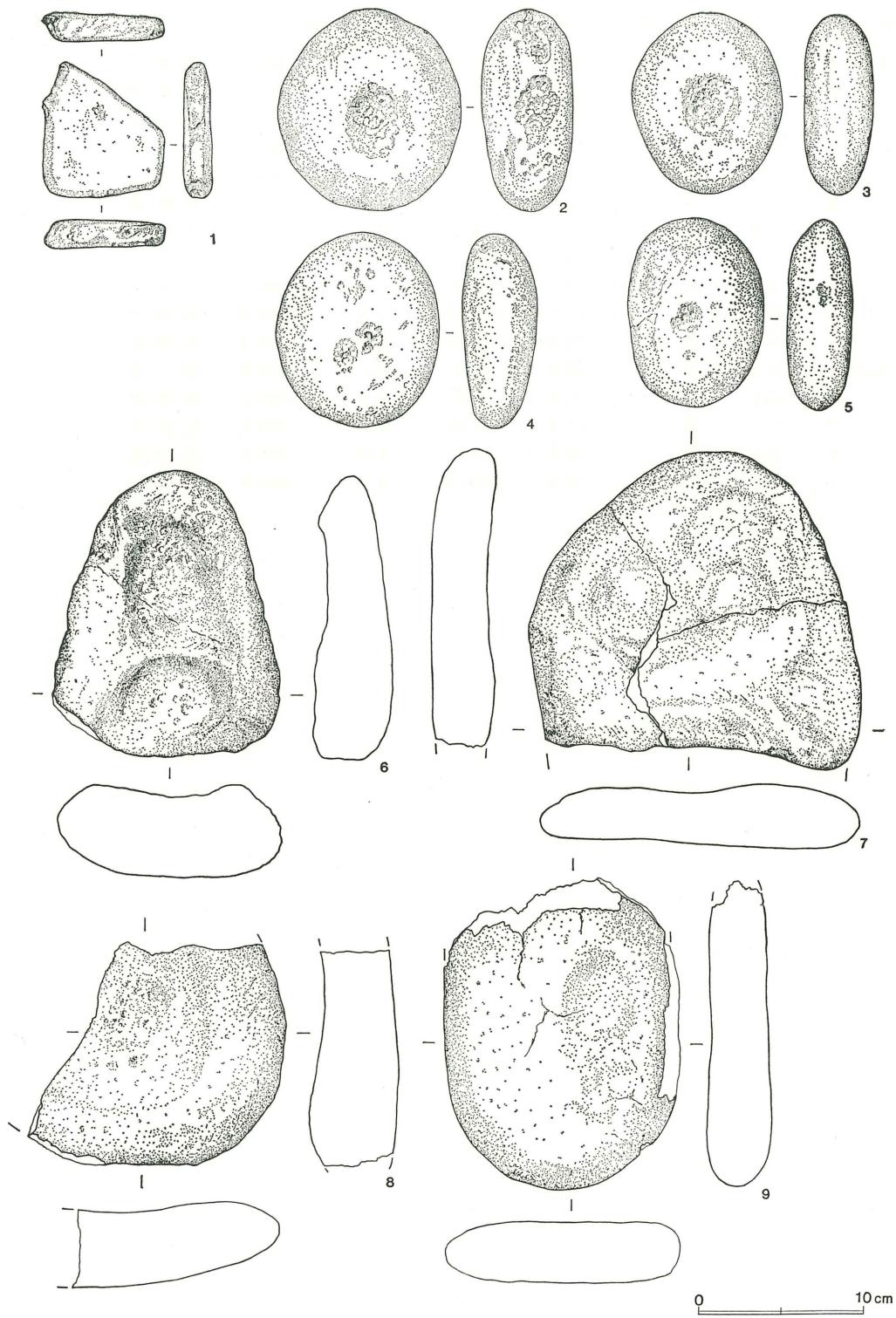
第117図 グリッド出土石器(14)



第118図 グリッド出土石器(15)

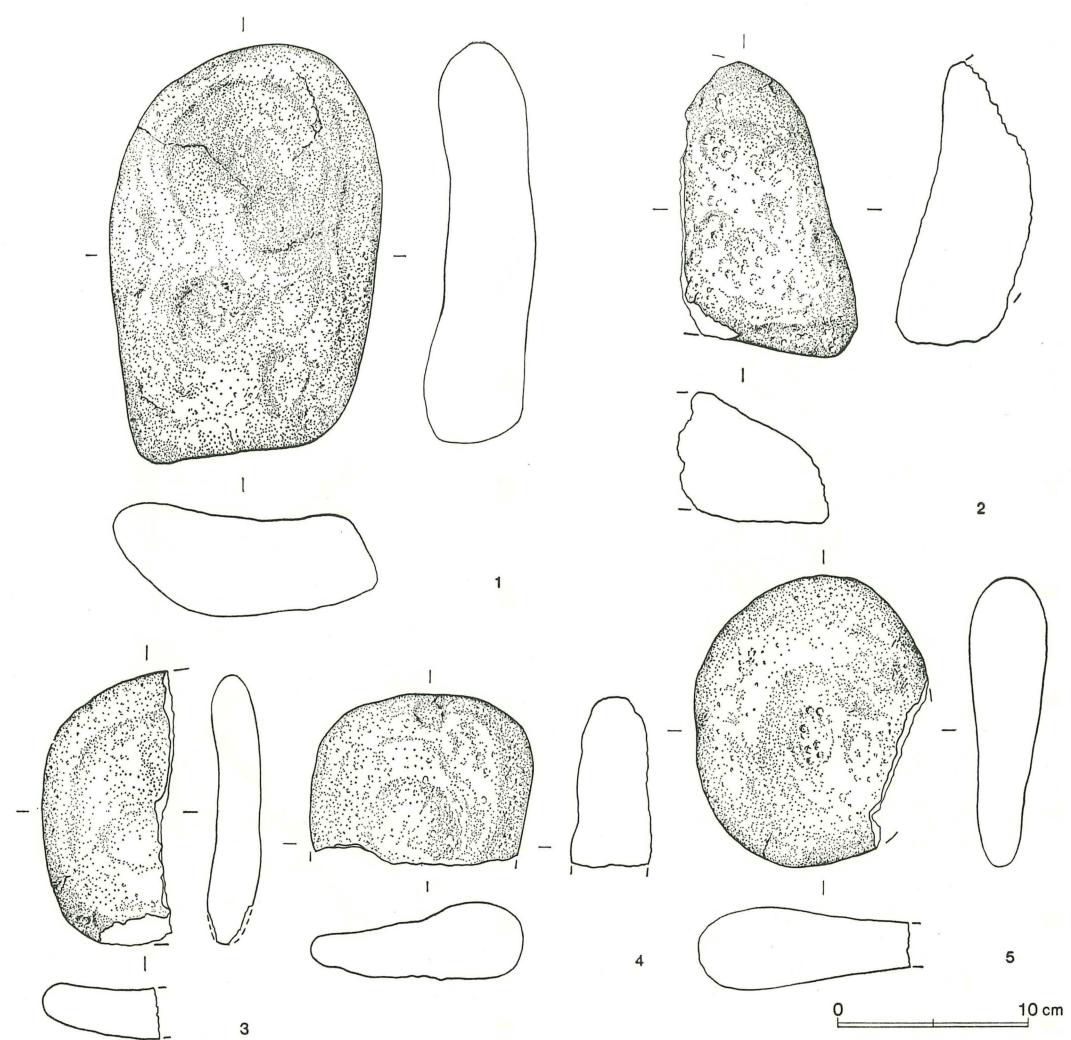


第119図 グリッド出土石器(16)

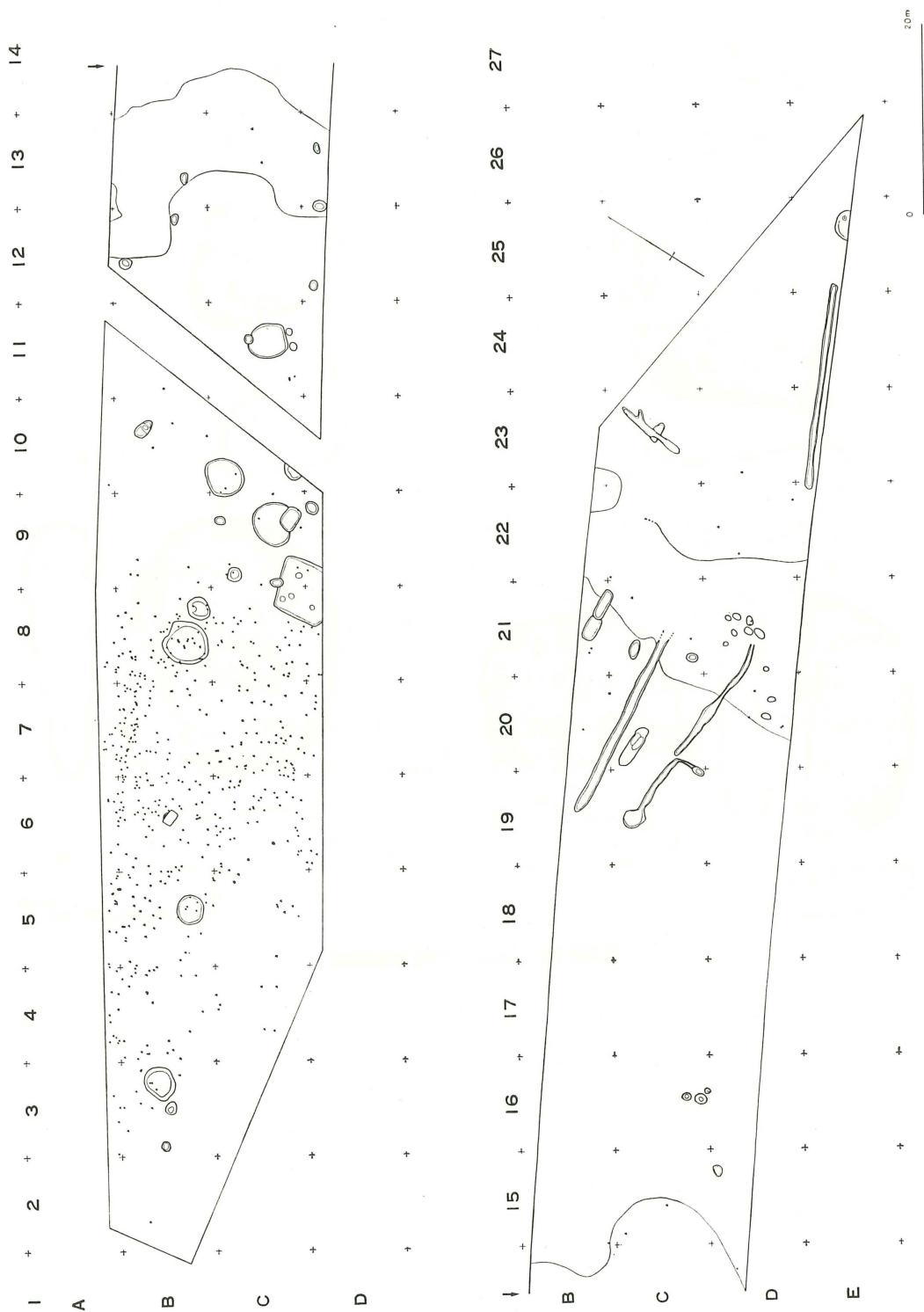


第120図 グリッド出土石器(17)

番号	Grid	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
119—22	B 5	G	8.2	7.0	4.2	350.3	花崗岩
23	C 6	G	8.4	7.7	2.9	266.5	花崗岩
120—1	D 22	G	8.1	7.4	1.7	173.9	安山岩
2	C 5	G	12.2	11.1	5.6	1052.2	安山岩
3	D 15	G	11.0	9.2	4.2	664.6	花崗岩
4	D 15	G	11.8	9.9	4.5	927.3	花崗岩
5	D 6	G	11.4	8.2	3.9	611.5	花崗岩
6		H	(15.4)	13.9	4.8		
7	B 7	H	(18.8)	20.1	3.9	2309.0	花崗岩
8	B 5	H	(13.0)	(15.5)	5.3	1542.0	花崗岩
9	B 8	H	(19.0)	(14.3)	3.6	1549.5	花崗岩
121—1	D 9	H	22.0	14.4	5.4	2829.0	砂岩
2	C 7	H	(15.3)	(9.5)	6.6	1221.0	花崗岩
3	C 7	H	14.3	(6.6)	2.5	423.8	花崗岩
4	A 4	H	(9.0)	11.7	4.3	588.3	花崗岩
5	B 6	H	15.5	(12.3)	4.1	1088.5	花崗岩



第121図 グリッド出土石器(8)



第122図 磨石・石皿平面分布図

VII 下南原遺跡

1. 遺跡の概観

下南原遺跡は、国道140号バイパスの建設に伴って新たに発見された遺跡である。今回調査を行なったのは、国道140号線を挟んだ北側の部分であり、その南側部分は昭和44年度に調査され、既に報告書が刊行されている（「下南原」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第8集 1982年刊行）。ここで検出された遺構は、住居跡1軒及び土壙23基である。住居跡からは、縄文中期の土器片数点と、打製石斧、石鏃が出土している。土壙からの出土遺物には縄文中期の土器片及び石器があるが、遺物が検出されたのは、23基中13基である。この44年度分の発掘調査区域においては、遺構の検出された部分が、発掘区の北西端に当たっている。従って、下南原遺跡の集落は、発掘区の西方を中心をもってひろがっており、確認された部分は、集落の限界と認識されている。

さて、今回発掘の対照となつた部分も、既報告の部分及び前述した大林I、大林II、宮林遺跡と同様に、荒川左岸にひらけた中位河岸段丘上に位置している。標高は70～72mを測り、発掘区中央部には、幅25mにわたる深い谷が東西に走っている。

発掘調査は、路線に沿って3m×3mのグリッドを全面に設定して実施した。耕作土の下に形成された暗褐色土包含層中には、おびただしい河原石が混在しており、遺構確認は困難を極めたが、合計23基の土壙が、谷を挟んだ両側に集中して検出された。土壙は、そのほとんどが橢円形の平面プランをもち、断面は底部からゆるく立ち上がっているものが多い。土層は以下の通りである。

第1層 黒褐色土を主体とし、大小の礫（所謂河原石）を多量に混じる。粘性は弱く、締まりは悪い。

第2層 1層と同様の礫を主体とし、暗褐色土を少量混入する。

第3層 2層に近く、礫を主体とするが、土は殆ど含まれず、4層と同様の砂が混入している。

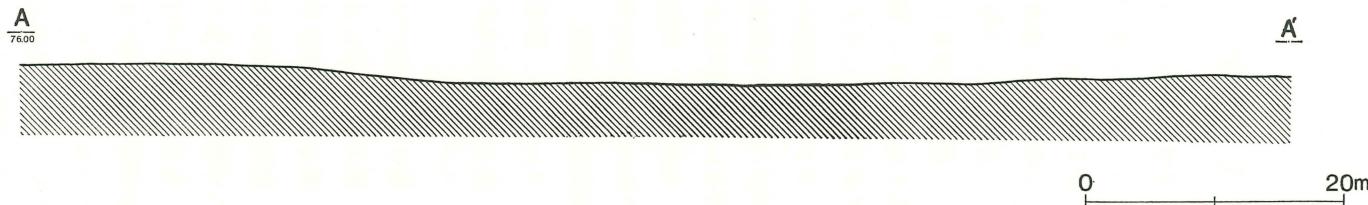
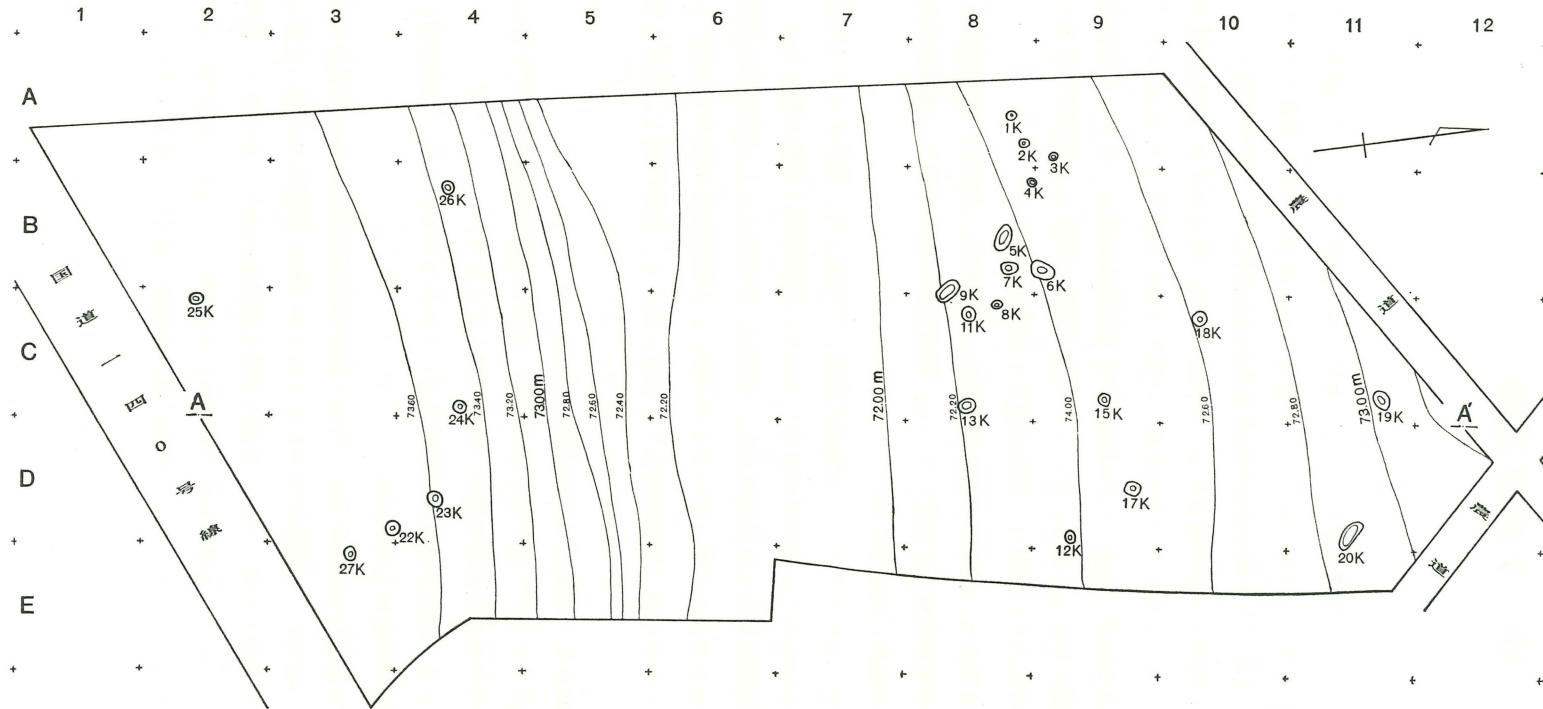
第4層 青褐色を呈する。ザラザラした砂質の量で、大小の礫も含まれる。

遺物は、数基の土壙の覆土中から、縄文土器及び石器が出土したのみである。また、包含層中からも縄文土器（主に中期）や石器が少量出土している。

なお、本遺跡では、住居跡等の遺構は検出されなかつたが、遺跡の立地状況をみると既報告の区域が段丘縁辺部に立地していたのに対し、本遺跡ではそれよりおよそ100m程段丘の内側に位置している。そのため、湧水等の便にも恵まれず、また、背後の不毛な扇状地の存在を考えると、集落としての立地条件は必ずしも満たされていなかつたものと思われる。従って、これらの土壙については、集落に伴うものとするよりは、むしろ、キャンプ地における施設、あるいは落とし穴としての可能性を考えるべきであろう。

第123図 下南原遺跡全測図

-160-



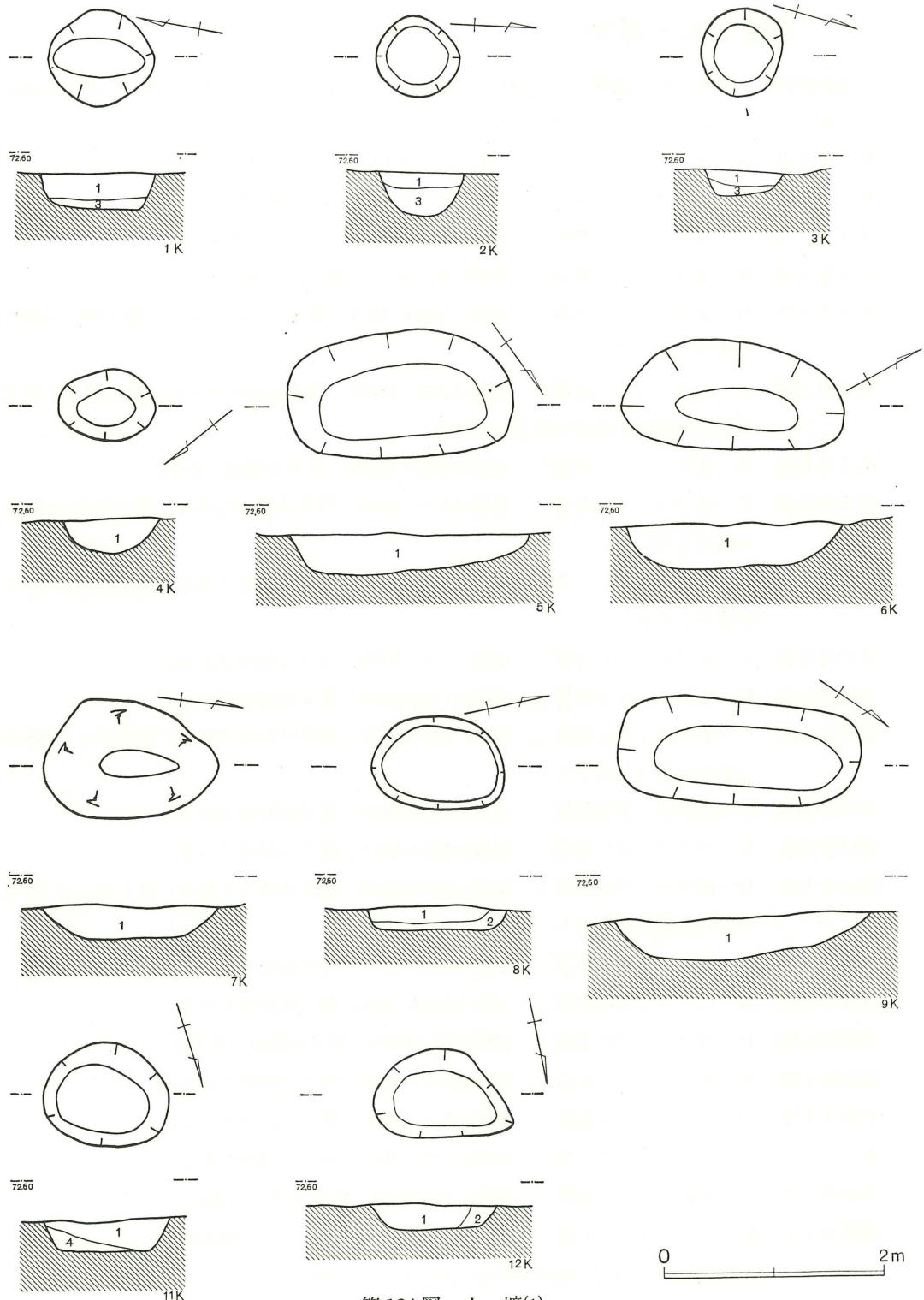
2. 遺構と出土遺物

下南原遺跡から検出された遺構は、土壙23基である。うち基17が谷の北側に、残りが南側の緩斜面に立地している。以下、それらの概要を記す。

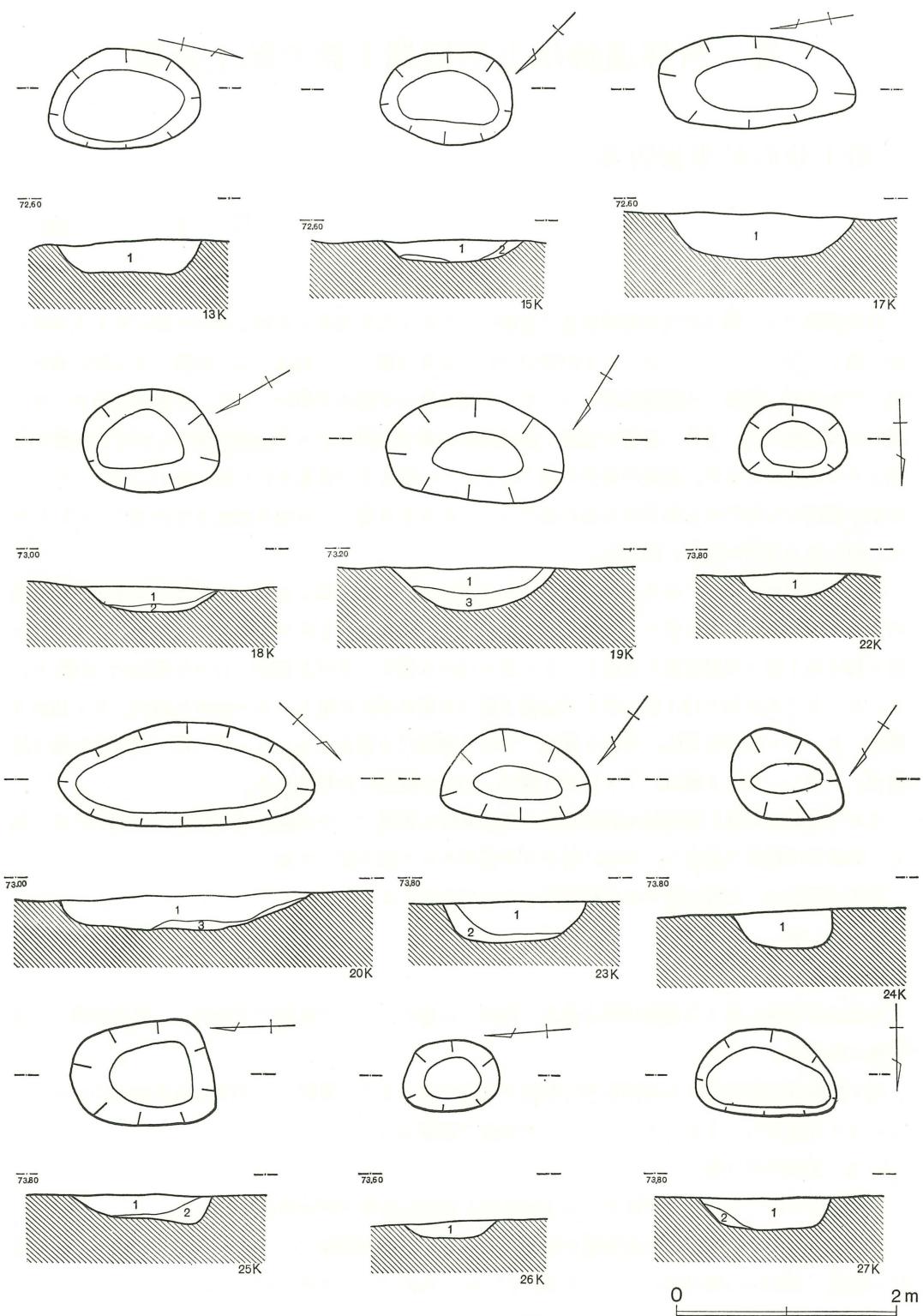
- 第1号土壙 A—8グリッドに位置し、規模は97×89cm、深さは35cmである。
- 第2号土壙 A—8グリッドに位置し、規模は77×74cm、深さは39cmである。
- 第3号土壙 A—9グリッドに位置し、規模は80×73cm、深さは23cmである。
- 第4号土壙 B—8グリッドに位置し、規模は89×66cm、深さは31cmである。
- 第5号土壙 B—8グリッドに位置し、規模は208×116cm、深さは35cmである。覆土中より礫器が出土している。
- 第6号土壙 B—9グリッドに位置し、規模は206×110cm、深さは41cmである。覆土中より縄文中期の土器片と剝片が出土している。
- 第7号土壙 B—8グリッドに位置し、規模は162×108cm、深さは30cmである。
- 第8号土壙 C—8グリッドに位置し、規模は124×86cm、深さは21cmである。覆土中より剝片が出土している。
- 第9号土壙 B—8グリッドに位置し、規模は225×94cm、深さは44cmである。覆土中より剝片が出土している。
- 第11号土壙 C—8グリッドに位置し、規模は116×93cm、深さは32cmである。
- 第12号土壙 D—9グリッドに位置し、規模は120×80cm、深さは24cmである。
- 第13号土壙 C—8グリッドに位置し、規模は142×92cm、深さは31cmである。覆土中より縄文土器片が出土している。
- 第15号土壙 C—9グリッドに位置し、規模は122×84cm、深さは21cmである。
- 第17号土壙 D—9グリッドに位置し、規模は133×86cm、深さは44cmである。
- 第18号土壙 C—10グリッドに位置し、規模は128×82cm、深さは25cmである。覆土中より縄文中期の土器片が出土している。
- 第19号土壙 C—11グリッドに位置し、規模は165×93cm、深さは40cmである。
- 第20号土壙 D—11グリッドに位置し、規模は236×94cm、深さは33cmである。
- 第22号土壙 D—3グリッドに位置し、規模は98×66cm、深さは22cmである。
- 第23号土壙 D—4グリッドに位置し、規模は137×83cm、深さは37cmである。
- 第24号土壙 C—4グリッドに位置し、規模は111×80cm、深さは33cmである。
- 第25号土壙 C—2グリッドに位置し、規模は130×95cm、深さは26cmである。
- 第26号土壙 B—4グリッドに位置し、規模は90×65cm、深さは15cmである。
- 第27号土壙 E—3グリッドに位置し、規模は130×79cm、深さは31cmである。

これらのうち記載のないものは、遺物が検出されていない土壙である。また、欠番は確認時に若干の黒褐色土が認められたものの、掘り込みが存在しなかったものである。

なお、包含層からは縄文時代中期の土器片と、打斧・石核・礫器などの石器が数点出土している



第124図 土 壤(1)



第 125 図 土 壤(2)

VII 宮林遺跡出土草創期土器の胎土分析

胎土分析結果報告書

井 上 巖

1 はじめに

宮林遺跡では、縄文時代草創期後葉に位置付けられる爪形文系・多縄文系の土器が凡そ1,000点余り出土した。しかし、これらの土器群については未だ幾つかの型式として分類できる程の資料も揃っておらず、器形・文様構成等についても不明な部分が極めて多い。また、本遺跡を始めとする幾つかの遺跡に於いては、該期の土器、特に爪形文系の土器は2~6mm程の極めて薄手の成形を特徴とすると思われるが、資料の稀少の為もあり、その胎土まで言及された例はなかった。しかし、今回本遺跡では量的にも多くのものが出土し、しかもその殆んどが包含層出土であることなどから、敢て胎土分析の資料に供した。

選出した資料は18点である。何れもグリッド出土の第1群に属するが、主に爪形文系・多縄文系のものを用いた。以下に各々の分類を示すが、その分類基準はV章3節のものに従った。1~3・11・12は第1類（爪形文系）に属し、1・3・11がb種(4), 2がb種(2), 12がb種(3)に分類される。4・5・8~10・13・14・17・18は第2類（多縄文系）に属し、4・14がa種(1), 5・13がa種(2), 8・17・18がe種(1), 9がe種(2), 10がe種(3)に分類される。6・7・15・16は第4類（沈線文）に属し、6がa種(1), 7・16がa種(2), 15がb種(2)に分類される。

なお、分析は（株）第四紀地質研究所の井上巖氏に委託し、その報告書を以下に転載する。但し、紙枚及び構成の都合上、表現に若干の変更があった事を記しておく。

以下の報告が、今後の研究の比較資料となれば幸である。

2 実験

2-1 試料

X線回析試験に供する遺物試料は洗浄、乾燥した後に、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。

電子顕微鏡観察に供する遺物資料は断面を観察できるように整形し、Φ10mmの試料台にシルバーペーストで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

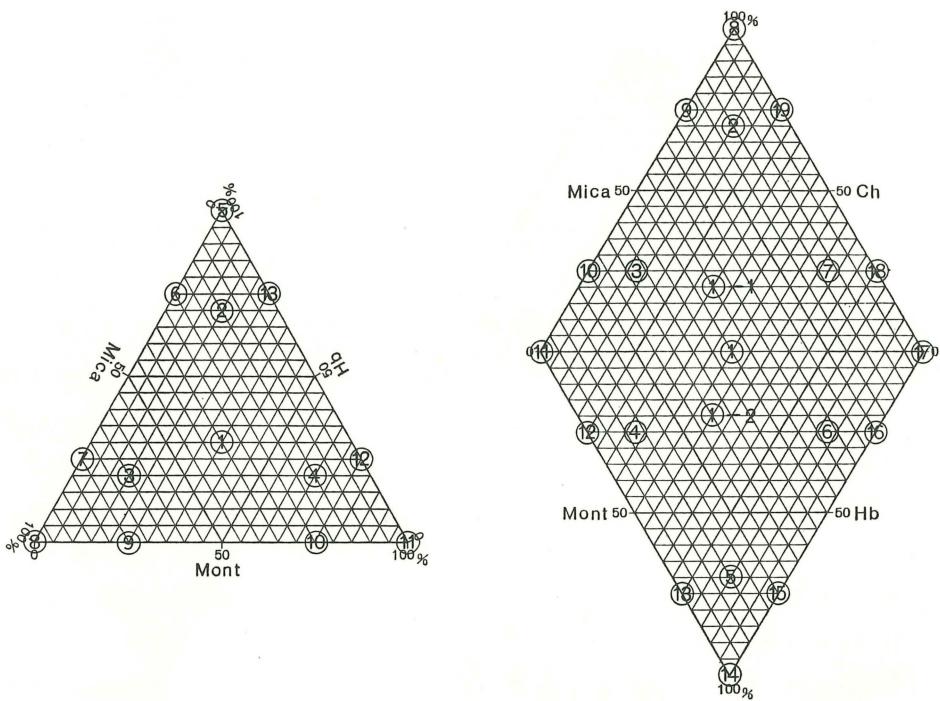
2-2 X線回析分析

土器胎土に含まれる粘土鉱物および造岩鉱物の同定はX線回析分析法によった。

測定には理学電機製X線回析装置を用い、X線管球、銅対陰極、フィルター、ニッケル、印加電圧-電流、30kV-15mA m, スリット系, 1°-0, 15mm-1°の条件で行った。

走時速度は、2°mm, フルスケールは800カウントとした。

なお、胎土の分析に先だって、原土と思われるローム質粘土の分析を行った。X線回析試験は原



第126図 ダイヤグラム位置分類図

土、電気炉に於いて 700°C 、 900°C で各々1時間焼成した試料（同一試料を石英ガラスに定着し、原土、 700°C 、 900°C と順次実験を行う）の3段階で実施した。その結果、組成上に大きな変化のないことを確かめた上で胎土分析を行った。ただ、 900°C 以上になった場合の組成については明らかではなく、今後の検討が必要である。

2-3 電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物およびガラス生成の度合についての観察は、電子顕微鏡によった。

観察には日本電子製T-20を用い、倍率は35, 350, 750, 1500, 5000の5段階で行い、写真撮影をした。

35~350倍は胎土の組織、750~5000倍は粘土鉱物およびガラスの生成状態を観察した。

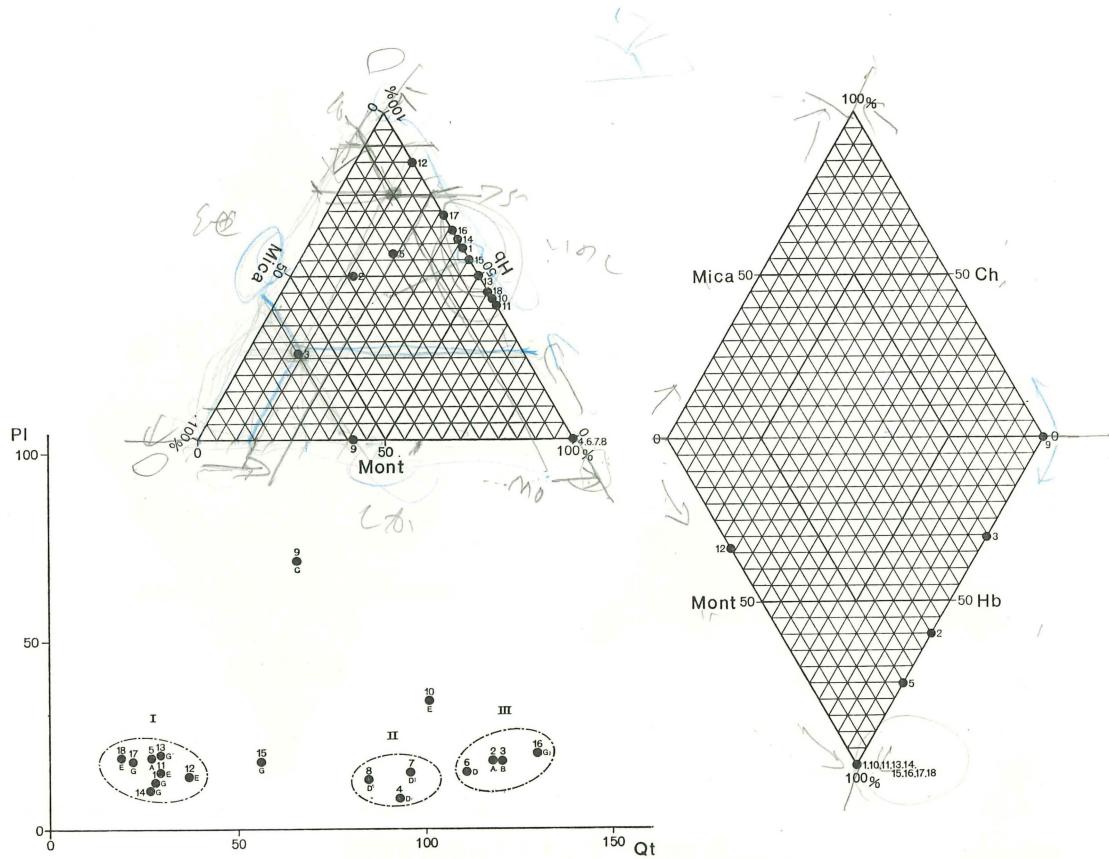
3 実験結果の取扱い

実験結果は胎土性状表に示すとおりである。

表の右側には、X線回析試験に基づく粘土鉱物および造岩鉱物の組成が示してあり、左側は各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回析試験結果に基づく粘土鉱物および造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの高さ（強度）をmm単位で測定したものである。

ガラス量は大略 $2^{\circ}=10^{\circ} \sim 20^{\circ}$ の範囲にあって、チャートが全体に腫れあがるブロードな現象を示す部分に対する面積で表示し、ガラス量の比較の材料とした。



第127図 Qt-Pt 相関図、三角・菱形ダイヤグラム

A	B	C	D		粘土鉱物および造岩鉱物 (mm)									ガラス量 (mm ²)	備 考	
			1	2	Mo	Mi	Hb	Ch	Ka(Ha)	Au	Hy	Qt	Pl	Cr(Mu)		
1	G	N	⑬	⑭	8	○	11		(4)			28	12		微少ガラス	中粒 Qt•Pl, I
2	A	N	②	⑮	2	4	6					118	18		"	" II
3	B	N	③	⑯	2	9	4		(4)			118	18		"	" I
4	D	N	⑪	⑳	3			5				93	8		"	細粒 Qt•Pl, III
5	A	N	②	⑮	5	4	12					27	19	12	"	" II
6	D	N	⑪	⑳	3			3				111	15	4	"	" I
7	D	N	⑪	⑳	3			4				96	15		"	中粒 Ot•Pl, I
8	D	N	⑪	⑳	3							85	13		"	" I
9	C	N	⑨	⑰	5	7				8		66	71		"	細粒 Qt•Pl, I
10	E	N	⑫	⑯	4		3					101	34		"	細～中粒 Qt•Pl, I
11	E		⑫	⑯	7		6					28	15			
12	F		⑬	⑫	2		11	4				37	14	15		
13	G		⑬	⑯	10		10					28	20			
14	G		⑬	⑯	7		11		5			27	11			
15	G		⑬	⑯	4		5			3		56	18	6		
16	G		⑬	⑯	4		7				2	130	20	6		
17	G		⑬	⑯	5		11					22	18	16		
18	E		⑫	⑯	17		14	4				19	19			

A—試料No. B—タイプ分類 C—焼成ランク D—組成分類 1—Mo-Mi-Mb 2—Mo-Ch-Mi-Hb
I—ローム質粘土 II—粒径のそろったローム質粘土 III—粒径のそろった均質な碎屑性粘土
胎土性状表

電子顕微鏡観察によって得られたガラス量と、X線回析試験に於けるガラスとを比較対比し、さらにムライト (Mu), クリストバーライト (Cr), などの組成上の組み合わせとによって焼成ランクを決定した。

3-1 組成分類

I) Mo-Mi-Hb 三角ダイヤグラム

第126図に示す様に三角ダイヤグラムを①～⑬に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mont, Mica, Hb の3成分の含まれない胎土は記載不能として⑭に含め、別に検討した。

三角ダイヤグラムは、モンモリロナイト (Mont), 雲母類 (Mica), 角閃石 (Hb) のX線回析試験に於けるチャートのピーク高を、百分率 (%) で表示する。

Mont は $Mont / Mont + Mica + Hb \times 100$ で百分率として求め、同様に Mica, Hb も計算し、三角ダイヤグラムに記載する。

三角ダイヤグラム内の①～④は Mont, Mica, Hb の3成分を含み、各辺が2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は第127図に示すとおりである。

II) Mo-Ch, Mi-Hb 菱形ダイヤグラム

第126図に示す様に菱形ダイヤグラムを①～⑯に分類し、位置分類を数字で記した。記載不能は⑰として別に検討した。

記載不能は Mont, Mica, 縁泥岩 (Ch), Hb のうち、④3成分以上含まれない。⑤Mont, Ch の2成分が含まれれない。⑥Mica, Hb の2成分が含まれない、の3例がある。

菱形ダイヤグラムは Mo-Ch, Mi-Hb の組み合わせを表示するものである。Mo-Ch, Mi-Hb の各々のX線回析試験のチャートの高さを各々の組み合わせ毎に百分率で表すもので、例えば、 $Mont / Mont + Ch \times 100$ と計算し、組み合わせ百分率を記載したものである。

菱形ダイヤグラム内にある①～⑦は Mont, Mica, Ch, Hb の4成分を含み、各辺は Mont, Mica, Ch, Hb の3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。⑧～⑨と⑩～⑪は現在のところ大きな意味はないが、胎土分析の量が増えてくると位置分類上の区分が必要なものとなるかもしれない。しかし、現在は⑫として一括して取り扱いたい。

位置分類についての基本原則は第126図に示す通りである。

3-2 焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回析試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によった。

Mu は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、Cr は Mu より低い温度、ガラスは Cr より更に低い温度で生成する。

これらの事実に基づき、X線回析試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクを I～V の5段階に区分した。

①焼成ランク I … 高温を示す Mu が多く生成し、ガラスの単位面積が広い。

②焼成ランク II … Mu と Cr が共存し、ガラスの単位面積が狭くなる。

③焼成ランクⅢ…ガラスの中にCrが生成し、ガラスの単位面積が小さく、葉状断面を成し、ガラスのつながりに欠ける。

④焼成ランクⅣ…ガラスのみが生成し、原土の組織をかなり明瞭に残す。ガラスは微小な葉状を呈する。

⑤焼成ランクⅤ…原土に近い組織を有し、ガラスはほとんどできていない。

以上のⅠ～Ⅴの分類は原則であるが、胎土の性質、すなわち粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このためMu, Crなどの組み合わせとは幾分異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については表の右端の備考に理由を示した。

3-3 タイプ分類

タイプ分類は各々の土器胎土の組成分類に基づくもので、三角ダイヤグラム・菱形ダイヤグラムの位置分類による組み合わせによって行った。同じ組成をもった土器胎土は、位置分類の数字組み合わせも同じはずである。

タイプ分類は、三角ダイヤグラムの位置分類に於ける数字の小さいものの組み合わせから作られるもので、便宜上、アルファベットの大文字を利用し、同じ組み合わせのものは同じ文字を使用し表現した。例えば、三角ダイヤグラムの①と菱形ダイヤグラムの①—1の組み合わせはA、三角ダイヤグラムの②と菱形ダイヤグラムの⑯はB、という具合にである。

各文字の後の()内の数字は、三角・菱形ダイヤグラムの位置分類の数字を合計したものである。近い組織を示しながら、位置分類上隣接するタイプ分類に入る場合には、試料数の多いものの類似としてA'などとダッシュをつけて分類した。

なお、タイプ分類のA, B, C等は便宜上であり、今後試料数の増加に伴って統一した分類名称を与える考えである。

4 実験結果

4-1 タイプ分類

土器胎土は胎土性状表に示すように、第126図ダイヤグラムの位置分類、焼成ランクに基づいてA～Gの7タイプに分類される。

各タイプの土器は全体に焼成温度は低く、ガラスは微小で焼成ランクはⅣと低い。

Aタイプ…Mi-2.5

Mont, Mica, Hbの3成分よりなり、Chに欠ける。

中粒の石英(Qt), 斜長石(Pl)を混入する粒径の揃ったローム質粘土で構成され、ガラスは微小で焼成ランクはⅣと低い。

Bタイプ…Mi-3

Mont, Mica, Hbの3成分よりなり、Chに欠ける。

組成的にはAタイプと類似するがMicaの強度に差があり、位置分類では異なる。全体にAタイプと共に通する点が多く、同系統と推察される。

中粒のQt, Plを混入するローム質粘土で構成され、ガラスは微小で焼成ランクはⅣと低い。

C タイプ…Mi—9

Mont, Mica の 2 成分を含み, Hb, Ch の 2 成分に欠ける。

細粒の Qt, Pl を混入するローム質粘土で, ガラスは微小であり, 焼成ランクはⅣと低い。

D タイプ…Mi—4, 6~8

Mont, Ch の 2 成分を含み, Mica, Hb の 2 成分に欠ける Mi—4, 6, 7 は D タイプ, Mont 1 成分のみの Mi—8 は D' タイプとされる。

D タイプと D' タイプは位置分類上同じ D タイプに入るが, 組成上若干の相違がある。これは菱形ダイヤグラムの位置分類で, 記載不能②に両者とも属するために生じたものである。

Mi—4 は細粒の Qt, Pl を混入する粒径の揃った均質な破壊性粘土とあるが, 他の Mi—6~8 は何れもローム質粘土である。

ガラスは微小で, 焼成ランクはⅣと低い。

E タイプ…Mi—10, 11, 18

Mont, Hb の 2 成分を含み, Mica, Ch の 2 成分に欠ける。

細粒の Qt, Pl を混入するローム質粘土で構成され, ガラスは微小で焼成ランクはⅣと低い。

F タイプ…Mi—12

Mont, Hb, Ch の 3 成分を含み, Mica に欠ける。

G タイプ…Mi—1, 13~17

Mont, Hb の 2 成分を含み, Mica, Ch の 2 成分に欠ける。

組成的には E タイプと類似するが, 強度比に差があり位置分類上は異なる。

小結 全体を通じ Mont, Hb の 2 成分を含む, E・G タイプが最も多く, 個体数の多さ(全18試料中半分の 9 試料におよぶ)から判断して在地性の可能性が最も高い。

4-2 Qt-Pl の相関について

第 127 図 Qt-Pl 相関図は X 線回析試験による強度高を単純にグラフ化したものである。

実験は Full Scale 800 Count に条件設定したものであり, この条件下に於けるチャート上の強度高をミリメーター単位で表わしてある。

Qt, Pl は砂の主成分であり, 土器製作過程で粘土中に混入される。

砂に於ける Qt, Pl の量比は後背地の地質及び運搬過程に於ける流速などの条件によって, ある地域に於いては大まかにある一定の比率を有するものと推察される。

ある地域に於けるある比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは, 各集団に於ける技術上の問題である。例えば, 同一集団に於いて使用する粘土は若干異っても, 砂の粘土に対する混合比はある一定の量比にあると考えられる。すなわち, 各集団に於ける土器焼成温度は燃料の相違, 燃焼のさせ方など異っていたであろうし, 燃料の原材料となる木材の相違, 言い替えれば, 植生によつても異ったであろう。

粘土に対する砂の混合比は, 各集団が維持した土器焼成温度と密接な相関をもつたであろうと推察される。すなわち, 維持した土器焼成温度に於いて良質の土器を焼きあげる為に, 粘土の材質と砂の混合比を経験的に決定したものであり, 砂の混合比は純然たる土器焼成上の問題であると

推察される。

宮林遺跡に於ける Qt-Pl の相関は第 127 図に示すとおりである。

土器胎土に含まれる砂の量の分類によると I ~ III の 3 グループとその他に分類される。

I グループ…Mi—1, 5, 11~14, 17, 18

Qt は 15~40, Pl は 10~20 の範囲にあり、個体数は 8 個とグループの中で最も多い。

胎土の鉱物組成も E, G タイプに相当し、個体数の多さから推察して在地性の可能性が最も高い。

II グループ…Mi—4, 7, 8

Qt は 85~100, Pl は 5~15 の範囲にある。

個体数は 3 個と少ないが、胎土の鉱物組成では D・D' タイプに属する。

III グループ…Mi—2, 3, 6, 16

Qt は 110~130, Pl は 15~20 の範囲にある。

個体数は 4 個であるが、胎土の鉱物組成は A, B, D, G タイプと 4 タイプあるのが特徴である。

その他…Mi—9, 10, 15

Mi—9 は Pl の量が他のものと比較して 3 倍近く高く、胎土の組成も C タイプと全く異っており、外来性の可能性が最も高い。

Mi—10, 15 も共に I ~ III のグループには属さず個々が 1 つの集団を代表しているものであろう。

小結 土器胎土中に含まれる砂の Qt と Pl の比によって I ~ III の 3 グループとその他に区分された。前記の前提条件に基づいて考察するならば、I ~ III の 3 グループは同時代に於ける異なる集団、あるいは、同集団に於ける時間の相違を意味するものであり、また、その他の各々は各々が別の集団を意味するものであろう。なお、各グループが同時に別集団を意味するか、同一集団の時間の相違を意味するかは、別に土器の形態・出土層準による時間の決定等との対比によらなくてはならない。

4-3 まとめ

当遺跡に於ける土器胎土の分析は鉱物組成による E, G タイプが最も多く、両タイプ共に Mont, Hb の 2 成分よりなり、その強度の相違で位置分類が異ったが、組成的に両者共に非常に類似し、個体数も全体の半分に相当する 9 試料に達し、個体数の多さから推察して在地性の可能性が最も高い。

Qt-Pl 相関図に示すように、I グループはそのほとんどが E, G タイプであり、個体数も多いことから推察して在地性と推察される。

鉱物組成、砂の混合比の両者が一致しており、E・G タイプは在地性であろう。

II グループは D・D' タイプで、組成と混合比が一致し、これも在地性の可能性がある。

III グループ及びその他は個々の組成も異っており、I・II の両グループに対しては外来性の可能性が高いと推察される。

VIII 結語

本報告書で扱った4遺跡では、各々縄文時代を主体とした成果があげられた。また、何れも櫛挽原台地の縁辺部に立地するが、この扇状地という特殊な立地環境を背景とした存在は、各期における遺跡の立地要件に関して重要な示唆を与えていたものと思われる。

さて、本章では、特に宮林遺跡から検出された縄文時代草創期の資料について簡単にまとめておきたい。

県内における草創期遺物出土遺跡についてはII章で触れた通りであるが、当該期に関する研究は、その地域性もさることながら、むしろ全国的な視野の元に行なわれているのが現状である。これは主に類似する文様・施文手法の分布範囲が極めて広いこと、資料が少なく、しかも断片的なものが多く、地域性を比較検討するに至らなかったことなどが理由であるが、また、土器発生の問題に関わっていることもその大きな要因となっていよう。所謂縄文草創期の土器は、従来主として洞穴遺跡における層位的事実をもとに、隆起線文系→爪形文系→押圧縄文系→回転縄文系という編年の大要が組み立てられてきた。しかし、近年当該期の資料が増加し、特に所謂オープンサイトの調査が多くなされるに従って、従来の編年には必ずしも適合しないものも報告されるようになってきた。また、本遺跡も該期に属するオープンサイトの一つとして記録されるが、その資料は他遺跡とも若干様相を異にし、単純には位置付けられないのが現状である。従って、今後の研究においては、従来の編年を再検討と共に、地域性の問題も避けて通る訳にはゆかないであろう。

では、以下に本遺跡出土の草創期の資料について、いくつか注意すべき点を記しておく。

第1に、第4号住居跡としたものの存在があげられよう。本遺構は擂鉢状を呈し、炉跡・柱穴等の言わば住居としての積極的な施設はもたないものの、①覆土は明確で、しかも比較的均一なこと。②出土遺物は、所謂草創期に属するものが圧倒的に多いこと。③出土した草創期遺物に関しては、爪形文系・多縄文系等の層位によるまとめは認められなかったこと。④早期に属すると思われる第12号土壙に切られていることなどが確認されている。従って、所謂草創期に属する何らかの遺構であること、出土遺物はかなりの同時性をもつと思われること、しかも文様による層位的な差は認められないこと、などは確実と思われる。

第2に、本遺跡出土の土器群を見れば明らかのように、他の該期の遺跡に比べ、その文様のバリエーションは極めて豊富であると言えよう。例えば、文様の構成自体は新潟県小瀬が沢洞窟（中村1960）、埼玉県西谷遺跡（栗原・小林1961）、同水久保遺跡（小林他1979）、或は長野県石小屋洞穴（1967永峯）などの資料に極めて近い様相を呈しているが、本遺跡の構成文様のうち、西谷遺跡では沈線文・撚糸文、水久保遺跡では爪形文・沈線文・撚糸文、石小屋洞穴では沈線文・撚糸文・刺突文などが欠落している。また、本遺跡では特に爪形文系・押圧縄文系及び回転縄文系の土器群が主体的に出土しているが、これらは、必ずしも従来考えられてきたような時間差、或は段階差を暗示するような出土状況を呈してはいない。むしろ、遺構出土遺物の一括性を重視するならば、それらは共伴、若しくは極めて近い時期の所産と考えざるを得ないであろう。更に、本遺跡では同一破

片に2種類以上の文様が複合しているものがいくつか出土しているが、これらもその証左の一端となり得ると思われる。例えば、第24図39、第68図25は爪形文と押圧縄文、同図22・24・26・27は爪形文と回転縄文、同図28～35、第69図1・2は押圧縄文と回転縄文が複合している。このように、少なくとも本遺跡の属する比較的短かい時間内において、これらの文様がほぼ並行して用いられていたことは確実と考えられる。ただし、ここで注意すべきは、押圧縄文と回転縄文の複合するものが多いのに比べ、爪形文と多縄文系の複合するものが比較的少ないとある。このことは、或いは両者の系譜の違いを意味するものかもしれない。

第3に、上記の点に関しては、VII章に示しに胎土分析の結果からも同様に支持されている。まず分析の資料としては、爪形文・押圧縄文（側面压痕文）・回転縄文・沈縄文の施されているもの18点が共されている。そして分析の結果、土器の胎土組成よりA～Gに、また、それらと混和材としての砂の性状よりI～IIIにグルーピングされており、各々時期差或いは地域差を示すものと考えられているが、各グループとも文様という面では必ずしも統一性は認められない。従って、この胎土分析結果に関してはまだまだ細かい操作が可能と思われるが、少なくとも本遺跡の土器群については爪形文と多縄文系、或いは押圧縄文と回転縄文を分けるような結果は示されていない。

第4に、所謂「ハ」の字形爪形文（殆どが生体によるものと思われる）の存在が注意されよう。「ハ」の字形爪形文自体は、山形県一ノ沢岩陰（加藤1962）、西谷遺跡、小瀬が沢洞窟、石小屋洞窟などをはじめいくつかの遺跡で多縄文系土器群と共に検出されているが、何れも量的に少なく、また層位的にも明確な出土を示していない。ただ、山形県火箱岩洞穴（加藤1967）、同日向洞穴（佐々木1971）、或は近年では神奈川県花見山遺跡（坂本1978）、東京都多摩ニューウタタウンNo.426遺跡（原川1981）、千葉県南原遺跡（大塚1979・1980）などをはじめとする遺跡で隆起線文系の土器に併用される例があることから、隆起線文系土器群と爪形文系土器群をつなぐものとして比較的古い段階に置かれてきている。しかし、本遺跡では第1類a種とした如く、その文様構成にはいくつかのバリエーションが認められる。また、遺構出土の土器にも明らかのように、「ハ」の字形爪形文と所謂爪形文、及び多縄文文系の土器群とはほぼ共伴すると考えざるを得ない。例えば、第24図14と第25図15の土器は同様に上げ底を呈する底部破片でありながら、14は指頭で抓み出した様な「ハ」の字形爪形文と、同様の手法による底部外縁部とをもつて対し、15にはL Rの縄の先端部の押捺文が施されている。また、他の文様と複しているものもいくつか確認されている。第24図32・34・35・37は所謂爪形文と複合するもの、同図36、第68図21は沈線文と複合するものである。特に21の沈線文は、出土例は少ないものの、福井県鳥浜貝塚の例などから所謂多縄文系の土器群に伴なうものと考えてよいであろう。このように、多縄文系の土器と直接複合するものはないものの、本遺跡を見る限り文様としての「ハ」の字形爪形文が多縄文系、及び所謂爪形文系の土器群に伴なうことは確実と思われる。しかし、一方では同様の爪形文が隆起線文系の土器群の一部に伴なうことも確実である。従って、両者にある程度の時間差を認めるならば、所謂「ハ」の字形爪形文に関しては、爪形文系土器群の初現段階のものとしてではなく、それ自体の系譜が問い合わせなければならないであろう。今後、特に共伴関係を有する資料の増加に期することが大きい。

第5に、該期の土器製作の技法に関する注意すべき破片が出土している。第68図31とした土器

は、横位に施文された無節Rの縄文と同一原体による縦位の側面圧痕文が施される破片であるが、粘土紐の接合部の剥落した面に数ヶ所の爪形状の刻みが施されている。勿論、本片に関しては、土器製作途上において偶然に付けられた可能性が大きいが、岐阜県柵の湖遺跡（原・紅村1974）・同向山遺跡（長野県1982）等の表裏縄文系の資料を実見した際に、同様の剥落した下の面に表面から連続した縄文の施されている例が見受けられた。また、本遺跡出土の土器を見ても、接合部の付近で文様が変化乃至は重複している例が多いようである。つまり、該期の土器に関しては、器形を完全に作り上げてから施文するのではなく、施文しながら積み上げていった可能性が考えられる。またその場合、施文は装飾的効果よりも、むしろ土器製作上の技法的効果を期待したものである可能性が高いであろう。

第6として、文様帶及び区画文の存在が挙げられよう。もっとも、該期における文様帶の存在自体は山形県一ノ沢岩陰、埼玉県橋立岩陰（芹沢他1967）、新潟県室谷洞窟（中村1964）、長野県石小屋洞穴などをはじめとする資料で既に確認されている。しかし、それらは何れも小破片で全体を窺い知ることは難しい。本遺跡の資料でも、明確に文様帶構成をとると思われるものがいくつか存在するが、それらからは以下の諸点が確認される。①文様は口縁直下から施文されるものが多い。②文様帶は何れも横帶文の構成をとる。③文様帶の置かれる部位は明確ではないが、その数は数帯に及ぶ可能性がある。例えば、第24図34の下端と35の上端は同部位に相当すると思われるが、その場合この土器は少なくとも2～3帯の文様構成をもつものと推定される。

なお、第69図1・2は鋸歯状に配した側面圧痕文の区画間に自縄自巻の圧痕を充填したものであるが、このような鋸歯状の区画自体は、僅かに橋立岩陰遺跡に例をみるのである。あるいは、神奈川県上野第1地点（隆起線）、橋立岩陰（沈線）、鳥浜貝塚（沈線）、及び本遺跡（沈線）などにみられる斜格子状のモチーフの系譜をひくものかもしれない。

第7に、所謂表裏縄文と呼ばれるものについてであるが、本遺跡の資料には少なくとも2種以上の分類が可能と思われる。つまり、第66図2～7・9・12～14などは胎土・器厚など他の多縄文系の土器群に極めて近く、それに伴なうものと思われるが、他のものは若干異なり、むしろ長野県下で出土している表裏縄文土器の多くに近いようである。あるいは、両者は若干の時間差をもつものかもしれない。なお、側面圧痕文が表裏に施文された例があることは注意されよう（第61図9）。

第8に器形については、本遺跡では口縁から底部まで連続して接合したものはなく、全体の器形は不明である。ただし、破片は曲率の極めて小さいものが多く、室谷遺跡出土土器などの方形の器形の存在を予想させる。また底部形態については、何れも平底を呈し、①立上りの急なもの（第61図31）、②立上りの緩やかなもの（第23図2・第24図25・第59図21）、③上げ底気味のもの（第24図14・第25図15）の3形態が認められる。なお、第23図2・第24図14・第25図15などを見ると底部から大きく外傾しながら立上っており、胴下半部で第23図2の様な屈曲部を何ヶ所かもつ器形を呈するものと思われる。

さて、最後に本遺跡の編年上の位置についてであるが、現在のところ一時保留としておきたい。たしかに、爪形文・押圧縄文・回転縄文のうち前二者の下限を確定しなければ、三者が出現した段階として草創期末葉におくことは可能であろう。しかし、上記の諸点を考慮するならば、資料の細

かい吟味に基かない安易な位置付けは避けるべきだと思われる。

該期の土器の変遷に関しては、まず施文手法の変化が挙げられよう。隆起線文に代表される貼付手法から、爪形文・刺突文・沈線文そして所謂多縄文に示されるような器面自体に調整を施す（原体を器面に押捺）手法への変化は確実と思われる。また、その漸移的段階として、大塚達朗氏の指摘の如く（大塚1982）隆起線文十「ハ」の字形爪形文の土器が存在するかもしれない。しかし、それ以降の「ハ」の字形爪形文、爪形文及び多縄文に関しては、その出自・系譜とも未だ資料的には確実とは言えない。特に多縄文に関しては、爪形文→刺突文→押圧縄文という図式が成り立ち難いとすれば、その施文具自体の出現が聊か唐突であり、また爪形文にしても、その出自を物語っていると思われるのは山形県日向洞窟出土の1例のみでしかない。ただ、「ハ」の字形爪形文に関しては、生体によるものが基本と思われ、本来「土器製作上の技術的な過程の1つであり」「接合及び成形の技術」とする佐々木洋治氏の指摘は正しいであろう（佐々木1975）。従って、工具を用いた「ハ」の字形爪形文は施文の際にも煩瑣であり、文様として形骸化したものと考えられる。

また「ハ」の字形爪形文は、所謂爪形文とは系譜を異にすると思われるが、その変遷は現在のところ明確にはし得ない。ただ、第23図1・第24図34・第68図21などに見られるように、文様（帯）の上下を画するように用いられている例が目立つ点は注意されよう。あるいは、前述したように該期の土器の施文が、土器製作工程に従って数度に分けて行なわれたとするならば、粘土紐の接合部に「ハ」の字形爪形文を用いることは必然的に文様（帯）を区画することになることから、「ハ」の字形爪形文が文様帶区画の役割りをもっていた可能性も考えられよう。

なお、本遺跡では「ハ」の字形爪形文は爪形文・沈線文・刺突文とは複合するが、所謂多縄文系の文様とは複合していない。ここで第23図2を見れば、縦条体压痕文が文様帶の下端を区画しており、あるいは、多縄文系土器群の中で「ハ」の字形爪形文と同様の用いられ方をしたものかもしれない。

以上、いくつか気付いた点について若干の所見を記してきたが、言うまでもなく、該期に関しては比較資料の少なさを痛感する。今後の資料の増加に期待がかかる。

参考文献

- 大塚 達朗 1980 市原市南原遺跡第2次調査抄報『伊知波良』4
1982 「隆超線文土器瞥見」『東京大学文学部考古学研究室紀要』1
- 加藤 稔 1962 「山形県一ノ沢岩陰遺跡」『上代文化』31・32
1967 「山形県下の洞穴遺跡」『日本の洞穴遺跡』
- 栗原 文蔵・小林達雄 1961 「埼玉県西谷遺跡出土の土器群とその編年的位置」『考古学雑誌』47-2
- 小林 達雄 1979 「縄文時代草創期における回転施文縄文への一様相」『埼玉県史研究』4
- 坂本 彰 1978 「横浜市花見山遺跡の隆起線文土器群」『日本考古学協会昭和53年度総会研究発表要旨』
- 佐々木洋治 1971 『高畠町史 別巻考古資料』
1975 「山形県における縄文草創期文化の研究Ⅱ」『山形県立博物館報告』3
- 芹沢長介他 1967 「埼玉県橋立岩陰遺跡」『石器時代』8
- 長野県 1982 『長野県史 考古資料編』
- 中村孝三郎 1960 『小瀬ヶ沢洞窟』(長岡市立科学博物館)
1964 『室谷洞窟』(長岡市立科学博物館)
- 永峯 光一 1967 「長野県石小屋洞穴」『日本の洞穴遺跡』
- 原寛・紅村弘 1974 『桟の湖遺跡調査報告書』(坂下町教育委員会)
- 原川 雄二 1981 「多摩ニュータウンNo.426遺跡」『東京都埋蔵文化財センター調査報告』1